



TITLE:

京都大学埋蔵文化財調査報告 第4冊 : 京都大学病院構内遺跡の調査

AUTHOR(S):

CITATION:

京都大学埋蔵文化財調査報告 第4冊 : 京都大学病院構内遺跡の調査. 京都大学埋蔵文化財調査報告 1991, 4: 1-92

ISSUE DATE:

1991-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/230841>

RIGHT:

京都大学埋蔵文化財調査報告 IV

—京都大学病院構内遺跡の調査—

京都大学埋蔵文化財研究センター

序

本調査報告は、埋蔵文化財研究センターが1976年度以来京都大学病院構内遺跡においておこなってきた調査と研究をまとめたものである。14年間に発掘・試掘調査をおこなった地点は21個所に達し、病院構内の各所に及んでいる。各調査の内容についてはそれぞれの年度の調査研究年報で報告しているが、本調査報告ではそれらの調査結果を総合するとともに、各調査で得られた特色のある遺構・遺物の考古学的な分析、文献資料との比較検討をおこなった。

高野川、鴨川系流路が氾濫と転変を繰り返すこの地一帯においては、自然環境の変化と結びついた人びとの営みの移り変わりを強く見いだすことができる。はやく縄文時代には生活がおこなわれていたが、その後ながい空白の時期があって、生活の地として安定してはいなかった。古代末になって白河に院の御所や御堂が設けられると、この一帯は「京白河」とよばれるまでに市街地が発達した。当時の遺構・遺物も増加するが、大小の河川の氾濫は依然つづき、やがて、院政の衰退後に街区も衰亡し耕地化した。

一方で古代から中世にかけて鑄物生産が継続的におこなわれた理由の一つは、河川の堆積物を鑄物土として利用したことにある。さらに中世から近世にかけては、大規模な土の採取がおこなわれており、環境を利用した人々の姿をもうかがうことができる。このような病院構内遺跡の位置する鴨東の地の歴史的な変遷の復原と、調査にもとづく分析を試みたのが本書である。

本調査報告を作成するにあたり、学内、学外の多くの関係者の方々に御指導、御助言をいただいたこと、とりわけ本学の施設部、医学部附属病院などの関係者各位にたいし、あらためて謝意を表したい。今後とも変わらない御協力のほどをおねがいする次第である。

1991年1月

京都大学埋蔵文化財研究センター長

西 川 幸 治

例 言

- 1 本報告書は、京都大学病院構内で1976年度から1989年度までに実施した発掘調査の成果を総括し、京都大学埋蔵文化財研究センターにおける研究成果を報告するものであり、京都大学埋蔵文化財調査報告の第4冊にあたる。
- 2 国土座標にしたがって一辺50mの方形の地区割りをして、遺跡の位置を表示した。
- 3 層位と遺構の位置については、国土座標第Ⅵ座標系($x = -108,000$ $y = -20,000$)が($X = 2,000$ $Y = 2,000$)となる京都大学構内座標によって表示した。
- 4 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所の方式にしたがって、井戸：SE，土坑：SKのように表示した。
- 5 第3章と第5章の掲載遺物についてはローマ数字を冠して通し番号を1から付した。この遺物番号は、本文、実測図、写真を通して表示を統一した。
Ⅰ：第3章関係遺物，Ⅱ：第5章関係遺物
- 6 原則として、遺物の実測図は縮尺1/4，遺物の写真は約1/2に統一した。他の縮尺のもの、それぞれに縮尺を明記した。
- 7 参考文献は、本文中に、〔著者名 発表年〕の形式で表わし、各章末に一覧を付した。
- 8 本文の執筆者名は各章の初めに記した。
- 9 編集は西川幸治の指導のもとに森下章司が担当し、清水芳裕，五十川伸矢，浜崎一志，千葉豊，西川恵美子，石田由利子，合田敦子，エフナコ八重子，中田敬子が協力した。

京都大学埋蔵文化財調査報告 IV

目 次

第1章 病院構内遺跡調査の経過と成果	3
1 調査の経過	3
2 遺跡の環境	6
3 調査の成果	9
第2章 遺跡の形成と地形の変化	19
1 遺跡の立地と地形環境	19
2 高野川系旧流路と病院構内地域の開発	22
3 粘土層の形成	24
4 粘土層の堆積と周辺の地形	25
第3章 病院構内の先史時代遺跡	29
1 はじめに	29
2 遺物の出土状況と編年的位置	29
3 縄文後期前半土器の様相	38
4 比叡山西南麓における縄文時代遺跡	42
第4章 白河の条坊地割	47
1 はじめに	47
2 白河御堂の遺構	48
3 京都大学構内で検出した遺構	53
4 造営尺と方位	56
5 おわりに	58

第5章 中世白河の鑄造工房	61
1 はじめに	61
2 中世白河の鑄造工人の生産技術	62
3 中世京都の鑄造遺跡	68
4 文献にみえる京都の鑄造工房	71
5 中世京都の鑄物生産の変転	74
第6章 土取りの歴史的変遷	79
1 はじめに	79
2 中世・近世の土取り遺跡	80
3 土の用途	83
4 土取りの歴史的変遷	87

図版目次

病院構内遺跡調査の経過と成果	第1章末
図版1 京都大学病院構内遺跡全景(南から)	
遺跡の形成と地形の変化	第2章末
図版2 黄色砂の分布	
病院構内の先史時代遺跡	第3章末
図版3 病院構内A H19区縄文土器出土状況	
図版4 縄文後期の土器	
図版5 縄文早期・前期・中期・後期の土器	
図版6 縄文後期・晩期・弥生前期の土器	
白河の条坊地割	第4章末
図版7 白河条坊の復原案	
中世白河の鑄造工房	第5章末
図版8 1 鋳型	
2 坩堝, 鑪羽口, 小炉壁	
土取りの歴史的変遷	第6章末
図版9 1 医学部構内A N20区 土取り穴(南から)	
2 医学部構内A L20区 土取り穴(南から)	
3 病院構内A J18区 土取り穴(南から)	

挿 図 目 次

病院構内遺跡調査の経過と成果

- 図1 京都大学病院構内遺跡の位置… 2
- 図2 調査区の位置…………… 4
- 図3 江戸時代末の東山…………… 8
- 図4 病院構内遺跡の層位……………10・11
- 図5 病院構内遺跡の遺構……………12・13
- 図6 福勝院の九輪阿弥陀堂……………14
- 図7 SK3の墨書土器出土状況……………15
- 図8 蓮月焼……………16

遺跡の形成と地形の変化

- 図9 病院構内周辺の地形……………19
- 図10 高野川系旧流路の攻撃面……………21
- 図11 白川扇状地の復原……………23
- 図12 病院構内A J18区の粘土層……………25

病院構内の先史時代遺跡

- 図13 縄文早期・前期・
中期・後期の土器……………31
- 図14 縄文後期の土器(1)……………32
- 図15 縄文後期の土器(2)……………33
- 図16 縄文後期の土器(3)……………35
- 図17 縄文後期の土器(4)……………36
- 図18 縄文後期・晩期・
弥生前期の土器……………37
- 図19 北白川追分町遺跡出土土器……………41
- 図20 比叡山西南麓の縄文時代遺跡……………45

白河の条坊地割

- 図21 法勝寺の寺域の推定図……………49
- 図22 尊勝寺の寺域の推定図……………50
- 図23 白河南殿と宝荘殿院の推定図……………51
- 図24 宝荘殿院用水事……………52
- 図25 白河の条坊の南北路……………54
- 図26 京都大学構内検出の遺構……………55

中世白河の鑄造工房

- 図27 病院構内A J19区出土の
鑄型・埴塼・羽口……………63
- 図28 京都大学構内の鑄造遺跡……………63
- 図29 鏡土形と引形ぶんまわし……………64
- 図30 鏡の粗型……………65
- 図31 ル壺と屏風……………66
- 図32 医学部構内A L20区出土
の小炉壁……………67
- 図33 小炉壁と使用状況の復原……………67
- 図34 京都の鑄造遺跡……………69

土取りの歴史的変遷

- 図35 京都大学構内の
土取り遺跡……………80
- 図36 京都大学構内の
土取り遺構……………81
- 図37 京都周辺の土の産地……………85
- 図38 紙屑買と砂土売……………89

京都大学埋蔵文化財調査報告 IV

—京都大学病院構内遺跡の調査—

第1章 病院構内遺跡調査の経過と成果

第2章 遺跡の形成と地形の変化

第3章 病院構内の先史時代遺跡

第4章 白河の条坊地割

第5章 中世白河の鑄造工房

第6章 土取りの歴史的変遷

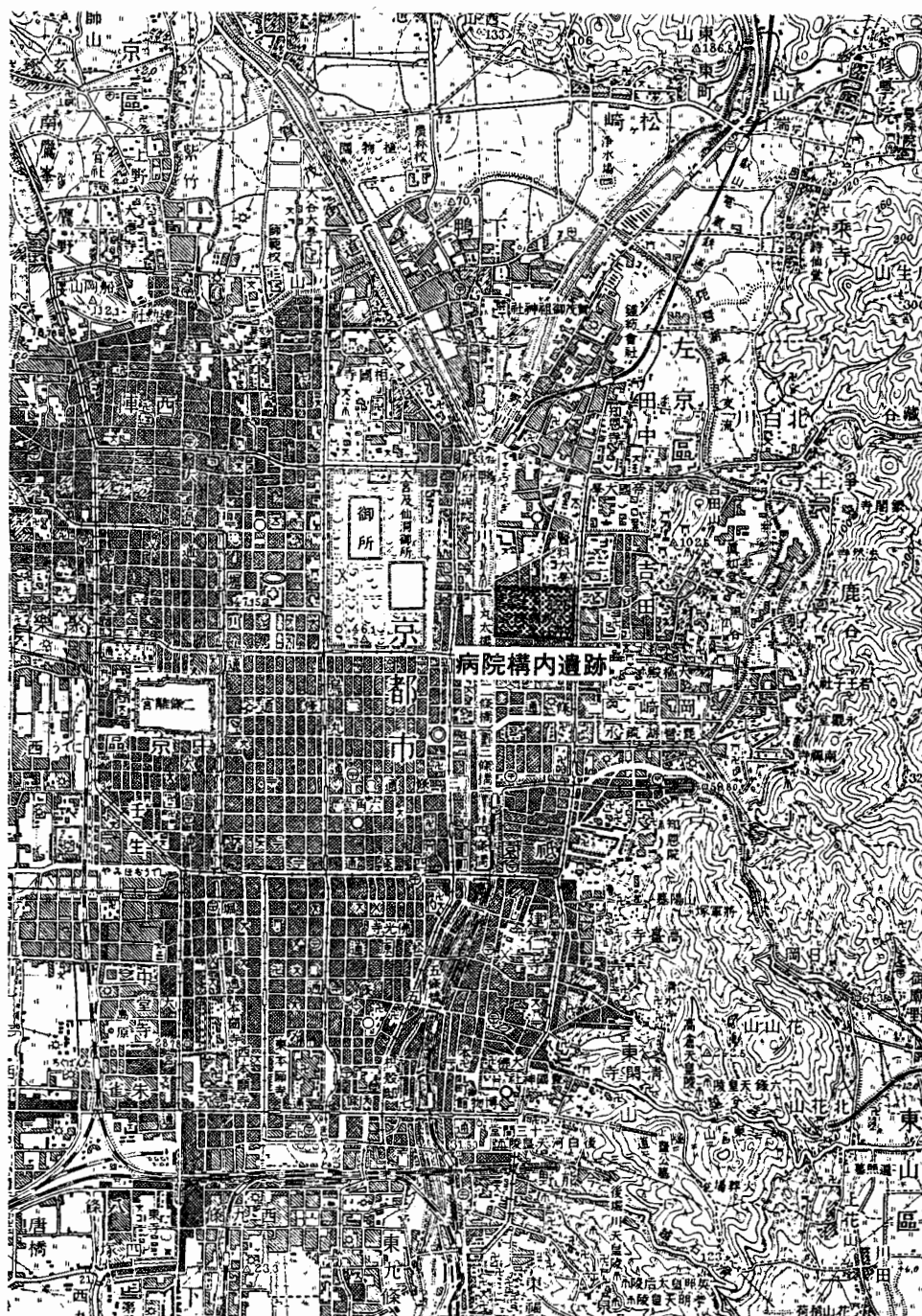


図1 京都大学病院構内遺跡の位置（陸地測量部発行 昭和6年都市近郊図『京都』）

第1章 病院構内遺跡調査の経過と成果

西川幸治 清水芳裕 森下章司

1 調査の経過

京都大学医学部附属病院構内において、はじめておこなわれた考古学的な発掘調査は、1976年度の医療技術短期大学部校舎等の新営にかかわる調査であった。この調査によって当時周知の遺跡となっていた北部構内、教養部構内にくわえて、病院構内をふくめ吉田地区全体に遺跡が広がっていることが明らかになり、京都大学全構内の遺跡調査を恒常的におこなう組織が必要となった。そこで、発掘調査を実施する組織として京都大学構内遺跡調査会、調査や保存について研究する組織として京都大学埋蔵文化財研究センターが設立され、1977年度以降、構内遺跡の調査と保存について積極的に取り組むことになったのである。以来、現在に至るまで、表(P. 5)にまとめたように、病院構内においては11件の発掘調査、10件の試掘調査、15件の立合調査をおこない、縄文時代から近世にいたる各時代の遺構、遺物が構内全体に広く分布していることを明らかにしてきた。

1976年度と1977年度に2次にわたっておこなった医療技術短期大学部校舎新営地(病院構内A E 15区、A F 14区)の調査の成果は、『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白井北殿北辺の調査—』(1981年)として報告した。そこではとくに古代から中世にかけての遺物・遺構の編年、考古学的な調査の成果と文献資料との対照による鴨東の歴史的な変遷の復原をおこない、その後の研究の基礎とした。

1978年度から1981年度にかけては、試掘・立合調査を経て病院構内各所において、中世・近世の遺跡が保存されていることを確かめたが、1979年度におこなった和進会館移転予定地(A K 18区)の試掘調査で検出した中世の遺物を含む土坑は、その後の調査の進展で土取り穴であることがわかった。この土取りは医学部構内北半では中世に、その南半から病院構内では近世にそれぞれおこなわれており、医学部構内から病院構内にわたる範囲に広がっていることが、明らかになった。

1984年度におこなった医学部附属病院全身用 NMR-CT 装置棟新営予定地(A F 19区)の調査では、幕末の歌人大田垣蓮月に関わる遺物を検出し、19世紀中葉の貴重な一括遺物を得ることができた。また、この調査では、高野川系旧流路層から縄文土器を検出し、吉田山西南麓に広がる微高地に縄文集落が存在した可能性を見いだした。

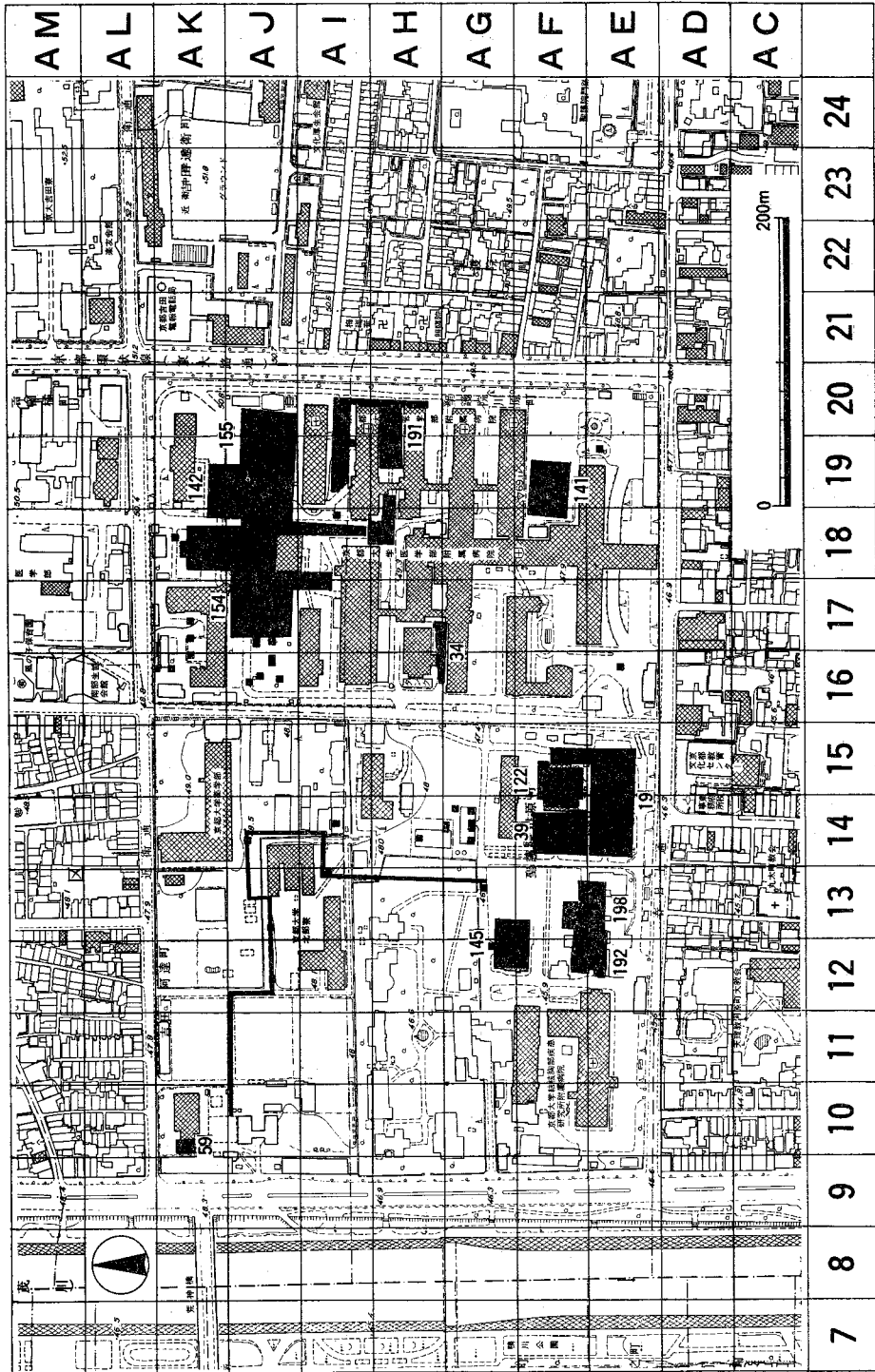


図2 調査区の位置 縮尺1/5000

一覧

地点	年度	地区	調査	文献	遺構	遺物
4	1976	A E15区	試掘	泉 77	ビット	土師器, 瓦
5		A E15区	発掘	岡田 77	池, 溝	土師器, 瓦
6		A H17区	試掘	泉 77	なし	土師器, 瓦
16		A I18区	試掘	泉 77	溝	土師器, 瓦
22		A H17区	発掘	泉 77	溝, 井戸, 集石	土師器, 陶磁器
26		A I18区	立合	泉 77	石敷	土師器
39	1977	A F14区	発掘	岡田・宇野 78	護岸, 井戸, 溝, 石列	弥生土器, 土師器, 須恵器
47		給水管	立合	泉・宇野 78	なし	
53	1978	電気管	試掘	京大埋文研 79	なし	
59		A K10	立合	樋口・亀井 79	なし	
63		電気管	立合	樋口・亀井 79	なし	
72	1979	A K18区	試掘	泉・浜崎 81	中世土取り穴	土師器
86	1980	A K16区	試掘	泉・浜崎 81	なし	
87		A G14区	試掘	泉・浜崎 81	近世包含層	土師器
88		A J17区	試掘	泉・浜崎 81	中世溝	土師器, 陶磁器
97		ガス管	立合	京大埋文研 81b	なし	
108	1981	A K17区	試掘	浜崎 83	なし	
122	1982	A F15区	発掘	浜崎 84	井戸, 中世土坑, 列石遺構, 溝, 櫛列	土師器, 瓦器, 須恵器, 陶磁器
141	1984	A F19区	発掘	浜崎・宮本 87	旧道路, 中世土取り穴, 井戸	縄文土器, 土師器
142		A J19区	発掘	京大埋文研 87	近世池, 土坑, 野壺	焼盆壺
145		A G13区	立合	京大埋文研 87	中世土坑, 柱穴, 溝	土師器, 陶磁器
150		A F20区	立合	京大埋文研 87	なし	
154	1985	A J18区	発掘	五十川・浜崎 89	中世井戸, 野壺, 櫛列, 高野川系流路	縄文土器, 土師器, 焼盆壺, 陶磁器
155		A J19区	発掘	五十川・浜崎 89	近世土取り穴, 土坑	土師器, 須恵器, 陶磁器
161		A E10区	立合	京大埋文研 89	井戸, 溝, 近世土取り穴	
162		A E19区	立合	京大埋文研 89	近世包含層	
171	1986	A H15区	試掘	京大埋文研 90	なし	
173		A J10区	立合	京大埋文研 90	なし	
177		A H10区	立合	京大埋文研 90	中世包含層	土師器, 陶磁器
178		A K16区	立合	京大埋文研 90	なし	
179		A J13区	立合	京大埋文研 90	なし	
184	1987	A H10区	立合	中世包含層		
186		A H20区	立合	縄文河川		土師器, 陶磁器
191	1988	A H19区	発掘	京大遺跡調査会 88	土坑, 溝, 井戸, 柱穴	縄文土器, 土師器, 須恵器, 瓦器
192		A E12区	発掘		道, 井戸, 野壺, 溝	土師器, 陶磁器, 土製品
198	1989	A E13区	発掘		井戸, 野壺, 溝, 柱穴	土師器, 瓦, 陶磁器, 土製品

病院構内遺跡調査の経過と成果

1985年度の医学部附属病院内科系病棟新営予定地（A J18区）、医学部内科系臨床研究棟新営予定地（A J19区）の調査では、調査面積の総計は7295 m²に及び、古代の遺構、中世の多数の井戸、近世の井戸や大規模な土取り穴を検出した。井戸の変遷や土取り穴の構造等を明らかにしている。また鞠の羽口、埴塼、鋳型など中世の鋳造関連遺物も出土した。教養部構内では平安時代、医学部構内では中世の梵鐘鋳造遺構を発見しており、鋳造関連の遺構・遺物が病院構内まで広がることが判明している。

1988年度から1989年度にかけておこなった医学部附属病院中央診療棟・臨床研究棟新営予定地（A H19区）の調査では、多数の中世、近世の遺構を検出した。また福勝院に関わる遺構ではないかと想定される、墨書土器を含む多数の土師器が一括投棄された土坑を検出した。東西方向に向かう中世の溝は地割を復原する資料となり、また近世の大規模な溝も検出した。さらに下層の白川系旧流路においては、一時期の肩と思われる部分から、縄文後期前半の土器がまとまって出土し、このことから東に隣接する微高地に縄文集落が存在した可能性が一段と強まった。

さらに、これまでの中でもっとも西の地区の調査（A E12・13区）を2次にわたっておこない、中世の遺物包含層はこの地まで続いていること、近世末に耕作地として利用されるに至ったことを確認した。中世後半まで旧高野川系流路の氾濫原として開発の手が及んでいなかったことがわかり、土地利用の変化をうかがう資料とすることができた。

2 遺跡の環境

(1) 地理的環境

京都大学吉田キャンパスは京都盆地の北東部、比叡山西南麓の西辺に連なる扇状地の扇央部から、鴨川に至る平地部に位置する（図1）。したがって構内東半部は、扇状地をとりまく微高地上に、また西半部は高野川の旧流路が形成した後背地上に立地する。病院構内はこの西半部の南半にあたる。その地理的変遷の過程は今日の地形にも痕跡がみられ、現地表面の標高が北部構内東端で約68 m、病院構内の西南端では約47 mと、構内全体の標高差はおおよそ21 mにのぼる。比叡山西南麓一帯から吉田山周辺の微高地上には縄文時代以降の遺跡が点在し、そのひとつが北部構内に広がる北白川追分町遺跡である。この微高地上にはその後も歴史時代に至るまで人々の活動の痕跡が残されていることが発掘調査によって明らかにされている。これに対して、病院構内を含む西半部では、明瞭な遺構をともなってその活動が知られるのは平安時代以後である。

(2) 歴史的環境

鴨川の治水が非常に困難な事業であったことはよく知られている。鴨川に隣接する病院構内一帯が初めて文献にあらわれるのも、平安中期の治水に関連する土木事業の記事からである。『権記』長保6(1006)年3月10日条に「防河の水を東流に移す。師宮見給う、」、『御堂関白記』長保6年5月11日条には「鴨河上方一条より近衛御門末に至りて落水す」との記事があり、鴨川の東側に新河道が作られたことがわかる。その地点はほぼ病院構内遺跡の近辺にあたるものと考えられる。ところが『御堂関白記』同年6月2日の条には、この夏の大雨によって新堤防が破壊されたとの記事がみられる。さらに『本朝世紀』康治元(1142)年8月25日条によれば水害を防ぐために河床の掘り下げがおこなわれたが、同年9月2日の条では、大雨による氾濫のためたちまち元通りになってしまったことが記されている。こうした不安定な状況は中世、近世に至るまで続いた。

病院構内一帯の開発が本格的に開始される契機は、平安時代の六勝寺の造営による。白河天皇の法勝寺(1077年)に始まり、堀河天皇の尊勝寺(1102年)、鳥羽天皇の最勝寺(1118年)、待賢門院璋子の円勝寺(1128年)、崇徳天皇の成勝寺(1139年)、近衛天皇の延勝寺(1149年)が次々と建てられ、これとともに院の御所や公家の邸宅、諸寺院の建立が続き、岡崎一帯から病院構内にかけての様相は一変した。

六勝寺造営にともなった市街地形成の過程については、平安京の条坊を鴨川以東へ延長させ、同様の形態をとった方格状の街区であったという考案にもとづいていくつかの復原がなされている。杉山信三は六勝寺の寺域復原にもとづいて、周辺の条坊および街区の部分的な考察を試みている。また岡田保良は近年の発掘調査によって得られた溝あるいは建物の遺構の方位をもとにして、条坊の復原をおこなった〔岡田81〕。

古代末に建立された福勝院は、京都大学構内一帯に位置したと考えられる御堂のひとつである。鳥羽法皇の皇后高陽院泰子の御願により建立された寺院であり、九輪阿弥陀堂をはじめとして三重塔、寝殿、護摩堂をそなえていたことが知られている。『兵範記』の記述をもとに杉山信三は近衛末の北、つまり教養部構内南半の吉田寮付近にその所在を比定している〔杉山62〕。杉山は規模を方一町としたのに対して、川上貢は九輪阿弥陀堂などの建物規模から方一町にはおさまらないとして、その範囲を広く考えている〔川上77〕。

中世に病院構内一帯が文献にあらわれるのは法勝寺焼亡に関する記事である。暦応5(1342)年3月法勝寺焼亡の火元が7～8町北の勘解由小路仏所小路の帥法院宿所とあり、これが病院構内東半付近に比定される〔福山43〕。また、この構内は熊野社の社領の中に

組み込まれる。病院構内の北半付近で吉田社の社領と接し、熊野神社境内管領を聖護院に命じた『東寺文書』応永3年12月18日將軍義持御教書によると熊野社の社領は崇徳院と大吉祥院敷地を除いて「近衛以南、大炊御門以北、今辻子以西、至于河原」の範囲にあったことが知られている。

その後室町後期ごろから田畑化されたようで、それは近世に引き継がれ、畑作地として蔬菜の栽培で著名な地ともなった。近世後半の景観は元治元(1864)年に木村明啓と川喜多真彦によって描かれた『花洛名勝図会』東山之部によってみることのできる(図3)。中央やや右に熊野社が位置し、2つの鳥居を通り抜ける道が参道にあたる。熊野社の左上に聖護院が位置する。この参道は現在の丸太町通りにあたり、病院構内はその左側に位置することになる。病院構内東南の一带は聖護院村の一部に組み込まれていた。この参道から、図の左にそびえる比叡山に延びてゆくように描かれた白川道と百万遍の間の、現在の京都大学構内にあたる一带のほとんどがはねつるべの点在する田畑で占められていることがわかる。一方、幕末に描かれた富岡鉄斎による『聖護院村略図』によれば、この熊野社への参道沿いは大田垣蓮月、画家中島華陽・小田海仙、歌人税所敦子など多くの文人たちの居住するところともなっていた。

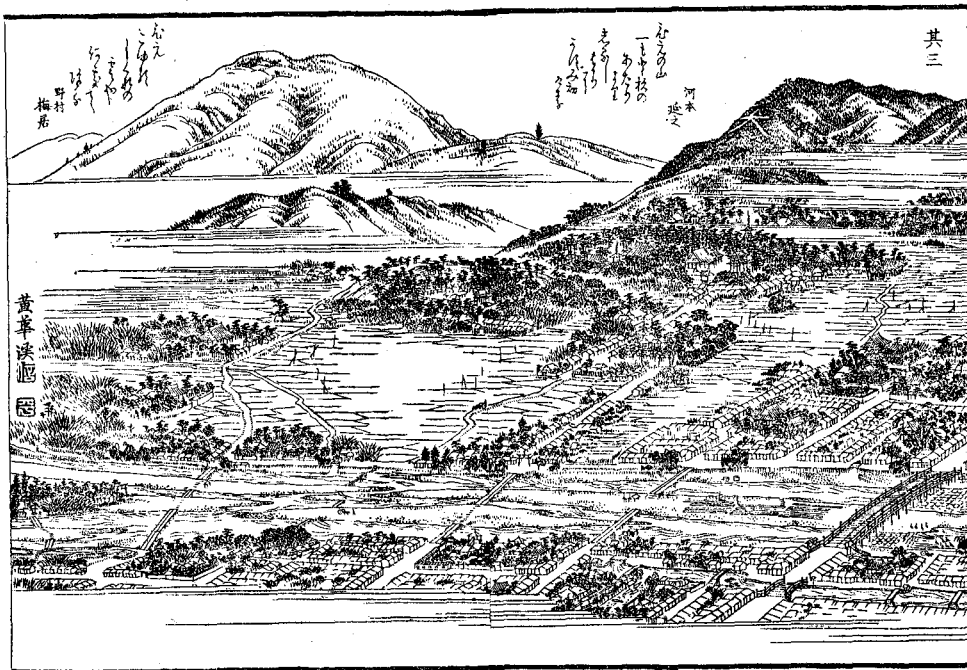


図3 江戸時代末の東山(『花洛名勝図会』元治元(1864)年)

調査の成果

3 調査の成果

(1) 層 位 (図4)

病院構内遺跡の層は3つに大別できる。その1は、基盤を形成する砂礫層、シルト層であり、高野川系、白川系旧流路の堆積物である。これらの流路は流れを幾度も変えており、一時期の肩にあたる部分を各所で検出している。構内東半のAH19区ではそうした肩の部分から縄文後期の土器がまとまって出土し、構内西半のAF14区では平安中期の護岸施設を検出しており、各時期の流れの転変の様をうかがうことができる。また高野川系旧流路の後背湿地の地形が形成された時期に白川系旧流路の比較的緩慢な流れが運んだシルトや粘土の堆積層は、中世・近世の土取りの対象となった。

その2は青灰色粘土・茶褐色土を中心とする古代・中世の遺物包含層である。古代の遺構は構内東半の3ヶ所で検出しているが、包含層は削平のため残っていない。中世の遺物包含層もAF14区の護岸施設以西では検出していない。また構内東半北部のAJ18・AJ19区では近世の大規模な土取りによって、中世遺物包含層はほとんど攪乱されており、また南部のAF19区でもこの層は検出していない。

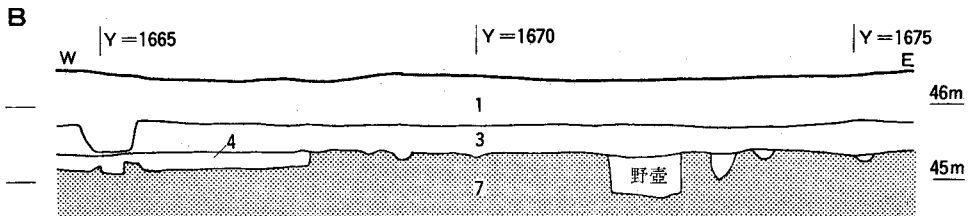
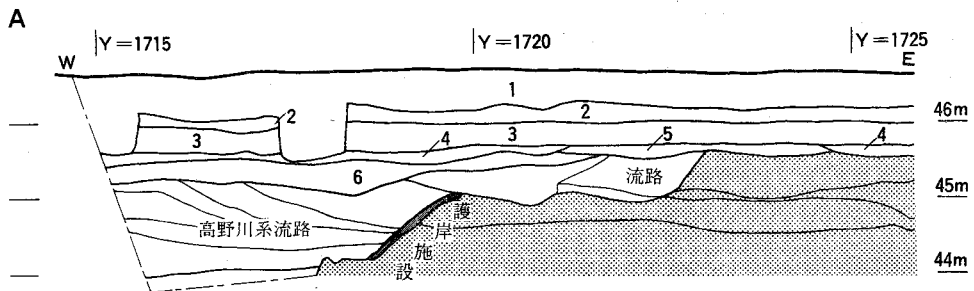
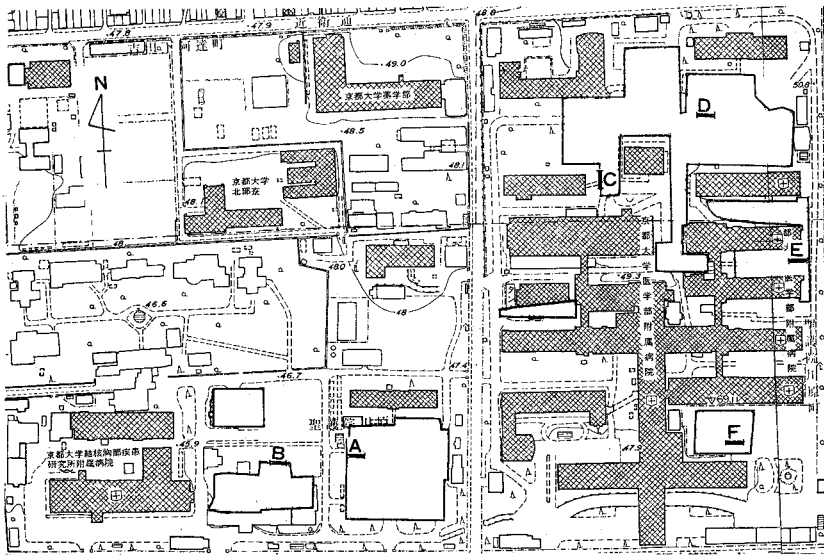
その3は暗褐色土と灰黒色土を中心とする近世後半の遺物包含層である。大部分が耕土で、遺物は比較的少ない。近世遺物包含層は全調査区で検出されており、『花洛名勝図会』に示されたように、この地一帯が近世後半には可耕地として安定したことを示している。

(2) 遺構と遺物 (図5～8)

病院構内の各時代の遺構・遺物の分布はほぼ明らかになっている。それによると、古墳時代以前の遺物は構内東半で出土しているが遺構は発見されていない。奈良～平安時代の遺構はわずかに残されているが、多数の遺構の分布がみられるのは平安時代末以降のことである。それ以前は、高野川系旧流路のために安定した居住性は得られず、短期間の活動の痕跡をみることができのみである。遺構・遺物の量が増加し一定量検出できる時期は、六勝寺の造営・活動時期と一致する。しかし六勝寺の衰亡した14世紀になると、生活の痕跡は急速に失われ、田畑化したものと考えられる。そして18世紀末に聖護院村の北への展開にともなって、生活に関連する遺構・遺物が再び現われるようになった。

縄文・弥生時代の遺物 AF19区、AJ18・AJ19区・AH19区など構内東半の3ヶ所の調査区で、縄文時代の土器、石器、弥生土器を検出している〔浜崎・宮本87、五十川・浜崎89、京大調査会88〕。いずれも遺構をとまなうものではなく、流路の堆積による砂層、砂

病院構内遺跡調査の経過と成果



- | | |
|---------|--------|
| 1 表 土 | 5 赤褐色土 |
| 2 黒 色 土 | 6 灰色砂礫 |
| 3 灰黒色土 | 7 砂 礫 |
| 4 黄褐色土 | |

0 5 m

調査の成果

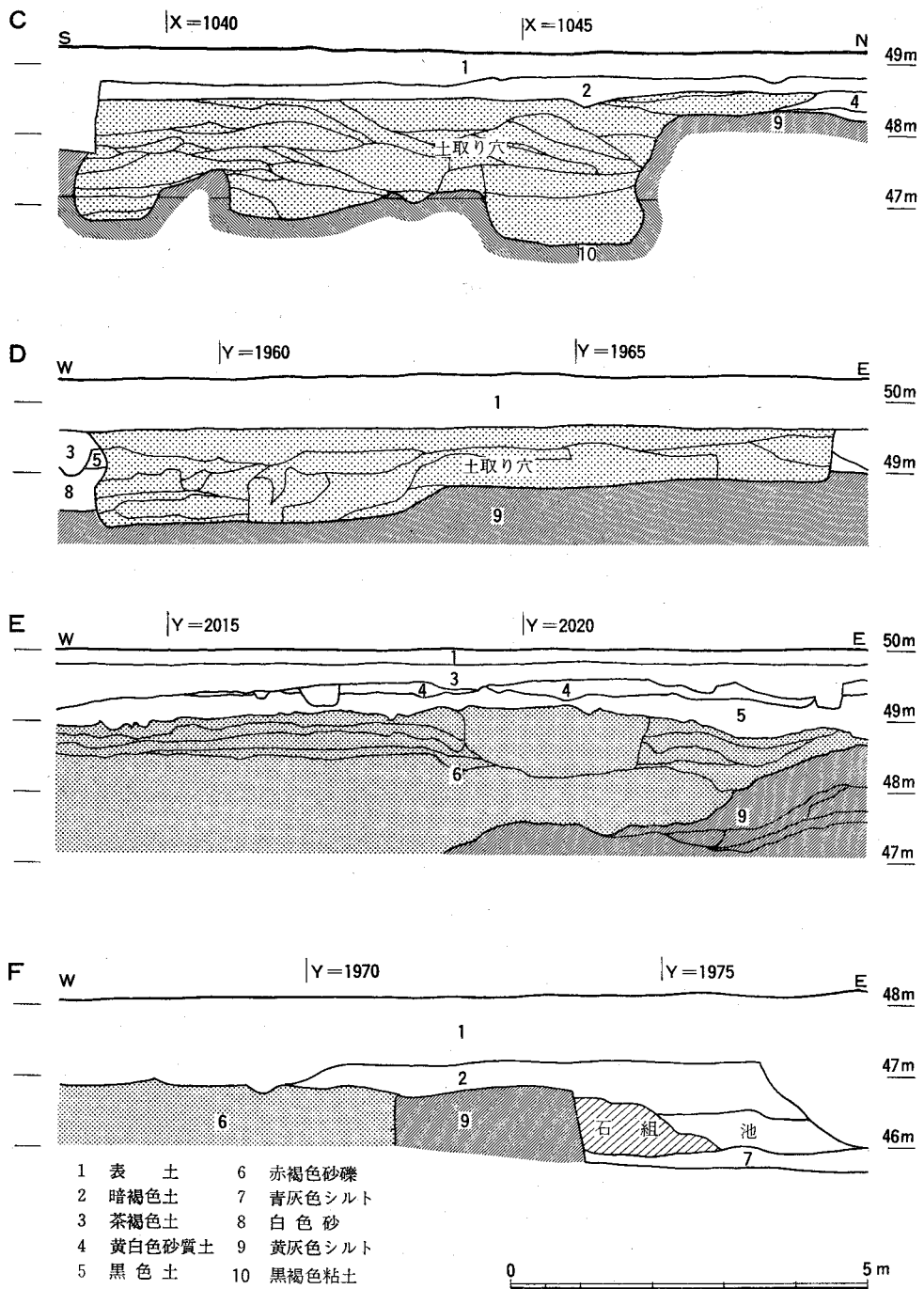
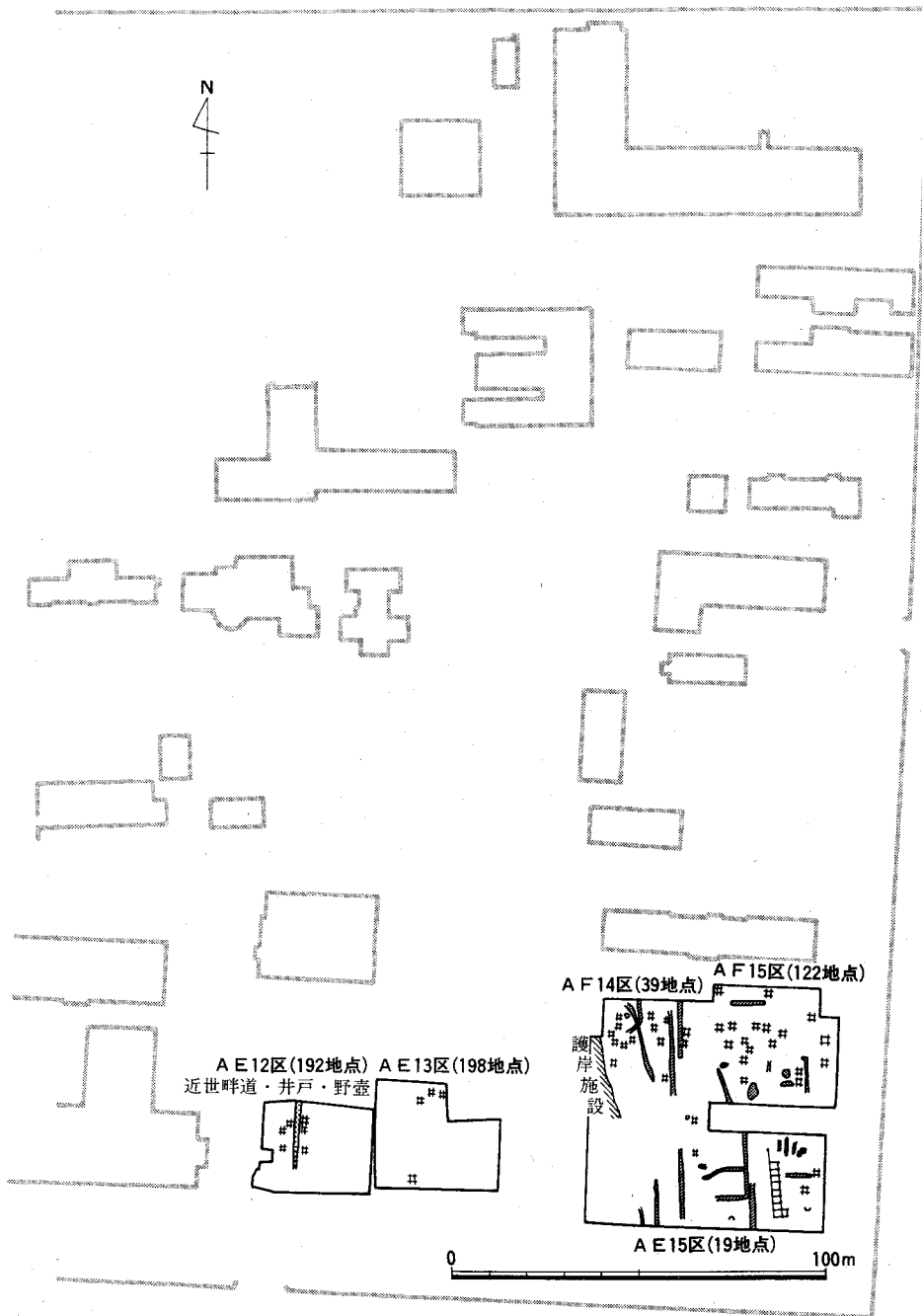


図4 病院構内遺跡の層位 縮尺1/100

病院構内遺跡調査の経過と成果



調査の成果

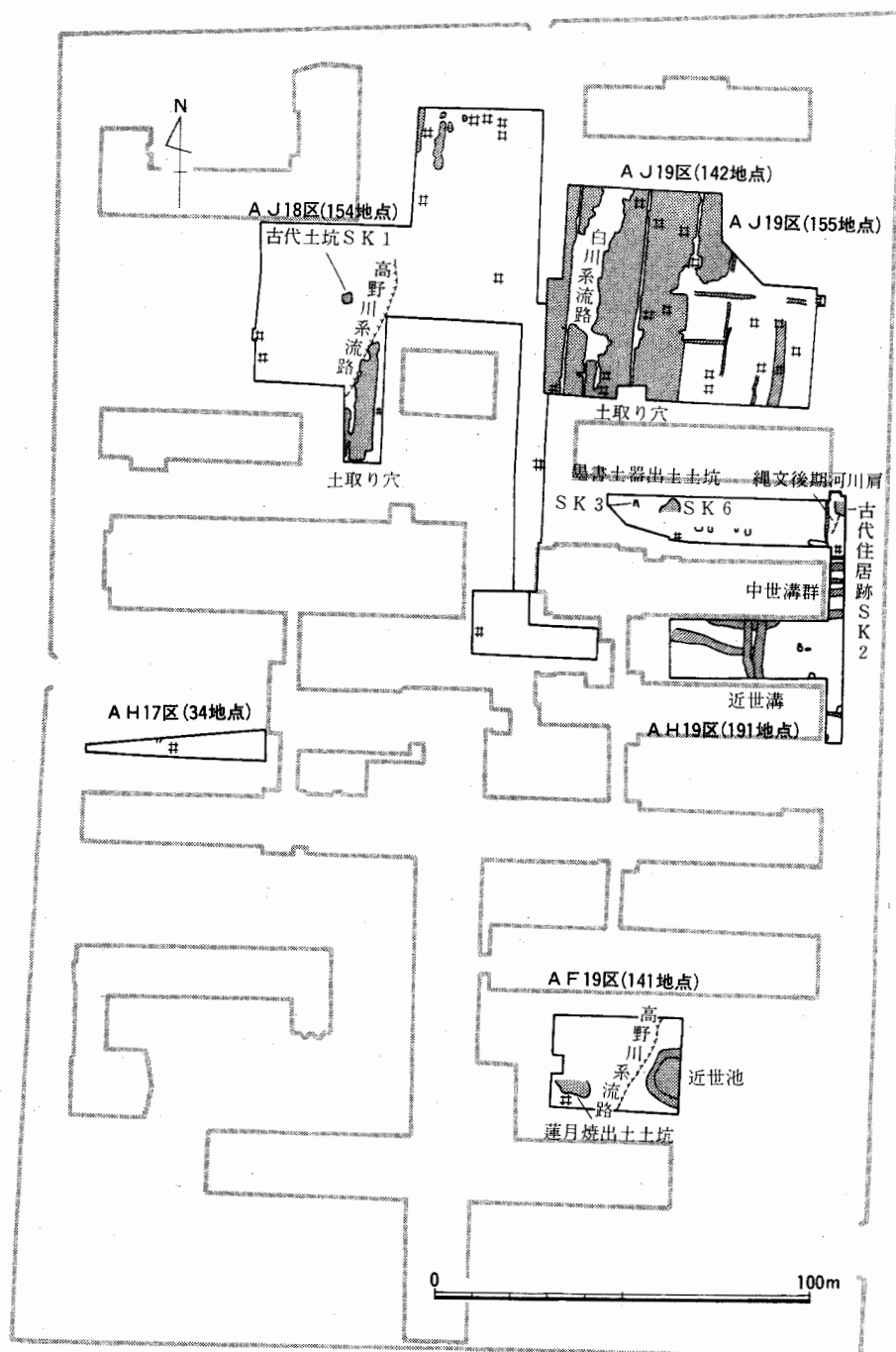


図5 病院構内遺跡の遺構 縮尺1/2000

礫層中から出土したものであるが、なかでもAH19区からは、河川の肩と思われる場所から縄文後期前半の土器がまとまって出土しており、調査区にすぐ隣接する地点に縄文時代の居住地のあったことがうかがわれた（第3章参照）。

古代の遺構 AJ18区の調査では、鉄滓、粘土塊、炭化物の詰まった土坑SK1を検出し、鉄の素材あるいは鉄器の生産に関わる遺構と考えた。出土遺物から7世紀後半から8世紀初めの年代に属する〔五十川・浜崎89〕。AH19区では、焼土や8世紀代の須恵器、土師器をとまなう方形の土坑SK2の一部を検出し、住居跡の可能性が高い〔京大遺跡調査会88〕。このように古代の遺構は、構内の東半に散在している。

古代・中世の遺物の編年 病院構内で大量に出土した古代・中世の遺物を検討する基礎的な作業として、AE15、AF14区の調査資料によってまとめた古代・中世の土師器皿を中心とする遺物の編年をおこなった〔宇野81〕。この平安京Ⅰ期から中世京都Ⅳ期にいたる時期区分を用い、病院構内のみならず他での中世遺跡の調査にも活用してゆくことになった。その後も、AJ18・AJ19・AH19区の調査で、中世遺物の良好な資料を検出し、編年の検討作業を続行している。

福勝院 鳥羽法皇の皇后高陽院泰子の御願によって創建され、九輪阿弥陀堂をはじめとして寝殿、三重塔、鐘楼、護摩堂をそなえていた福勝院は教養部構内南半部に比定されているが、その正確な位置は不明であり、これに関わる遺構を検出することが課題となっている。直接関係する遺構は未検出であるが、AJ18・AJ19区の調査で検出した古代末から中世初頭にかけての多数の井戸や、AH19区で検出した、墨書土器を含む多数の完形の土師器皿を出土した12世紀の土坑SK3・SK6などは、福勝院に関連する可能性が強いものと考えている。さらに医学部構内AL20区では平安後期の密教法具である六器の鋳型が出土しており、『兵範記』に記された仁平2(1152)年、鳥羽法皇の五十賀算を福勝院で

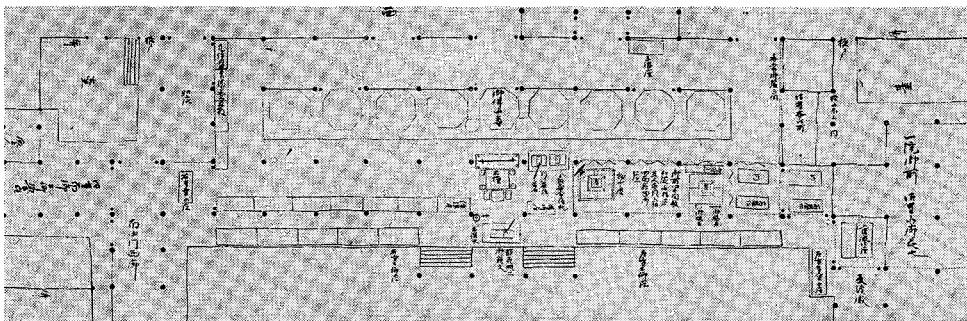


図6 福勝院の九輪阿弥陀堂（重要文化財『兵範記』京都大学附属図書館所蔵より）

調査の成果

設けたことの記事とも関連するものである〔浜崎90〕。このように病院 構内北半から医学部構内の南半には福勝院に関わった遺跡が存在していることが明らかになりつつある。

中世・近世の溝と地割 AH19区の調査では、東西方向に伸びる中世の溝がほぼ同位置に繰り返し掘り直され、さらにその上に近世後半の溝や現代の字境界も重なることが確認された。この境界が中世以降現代まで踏襲されていたものと考えられる。こうした京都大学構内各所で検出してきた地割に関連する遺構と、近年検出の進んでいる六勝寺に関連する遺構を結びつけ、法勝寺造営に始まる院政期に整備された白河街区の復原を試みた（第4章参照）。

中世の鑄造工房 AJ19区では、鋳型、轆の羽口、埴塙が出土した。教養部構内での平安時代のものとあわせて、医学部構内で確認した梵鐘鑄造遺構をはじめとする鑄造関連遺構・遺物に新たな資料を加え、中世白河の鑄造工房の実態を考える資料となった（第5章参照）。

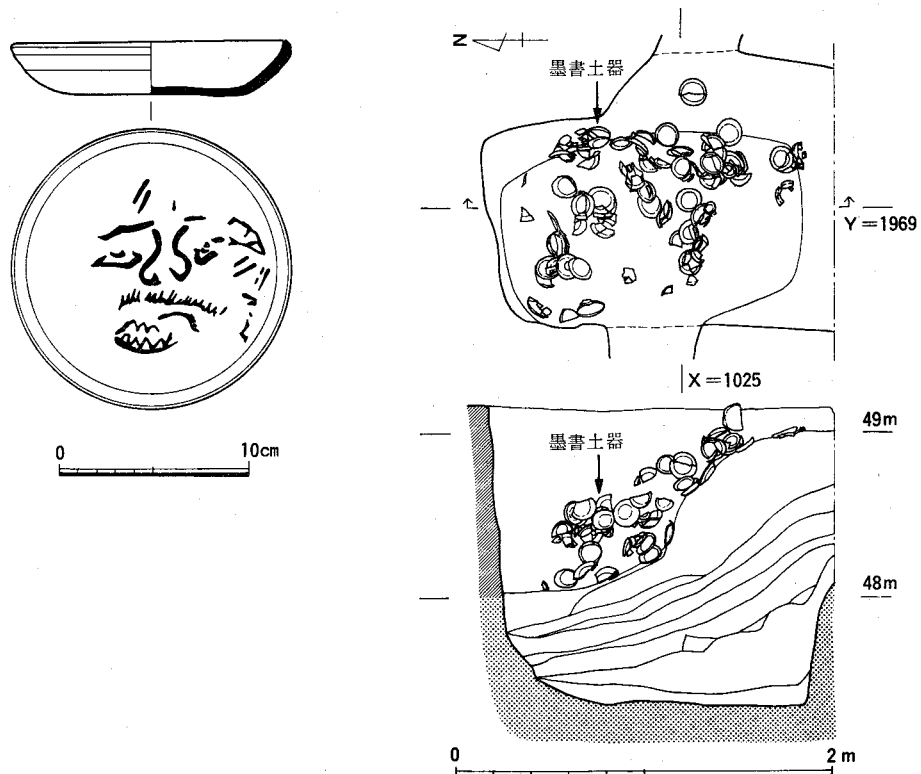


図7 SK3の墨書土器出土状況 縮尺 遺構1/40 遺物1/4

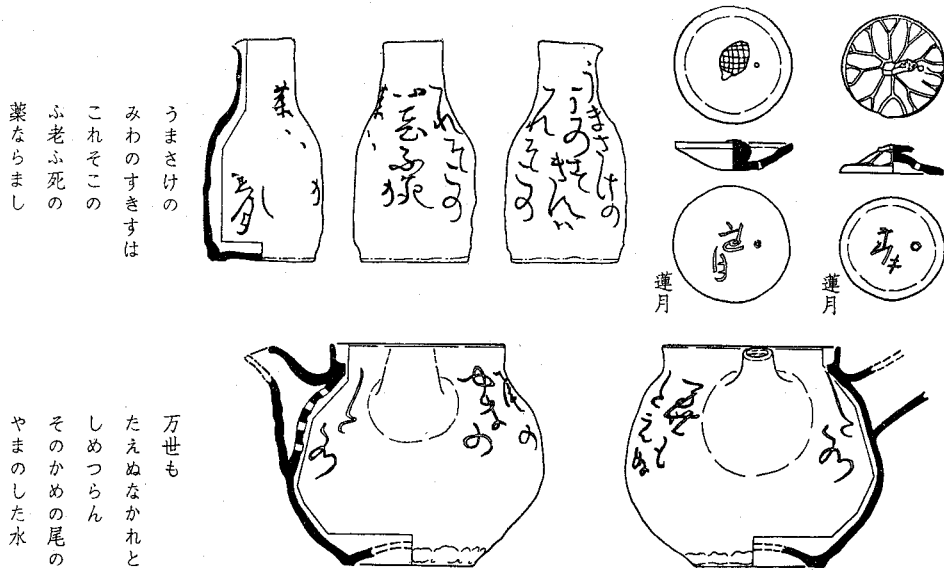


図8 蓮月焼 縮尺1/4

中世・近世の土取り 医学部構内から病院構内にかけては、14世紀から18世紀にいたるまで継続して土取りのおこなわれていたことが明らかになった。時期の推移と共に、土取り穴の形態にも変化のあることが観察されている。また、採取された土の用途については、中世鑄造工房との関連が注目される（第6章参照）。

蓮月焼 幕末の歌人として著名な大田垣蓮月の手になる蓮月焼をAF19区の土坑SX1から検出した「浜崎・宮本87」。調査区は富岡鉄斎の「聖護院村略図」に表わされた蓮月の住居のすぐ裏手にあたる地点である。出土した蓮月焼は徳利、急須、蓋、鉢などからなるが、製作技法の違いから蓮月以外の人の手になる作品も識別されている。この土坑からは他に日常雑器が多数出土しており、19世紀中葉の一括遺物として貴重な資料となった。

〔参考文献〕

- | | | |
|-----------|-------|---|
| 泉 拓良 | 1977年 | 「京都大学構内遺跡と調査の概略」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』 |
| | 1978年 | 「京都大学病院遺跡AH17区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』 |
| 泉 拓良・宇野隆夫 | 1978年 | 「昭和52年度 京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』 |
| 泉 拓良・浜崎一志 | 1981年 | 「京都大学構内の試掘・立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』 |

参 考 文 献

- 五十川伸矢・浜崎一志 1989年 「京都大学病院構内A J 18・A J 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 宇野隆夫 1981年 「遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白河北殿北辺の調査—』
- 岡田保良 1977年 「京都大学病院内遺跡A E 15の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 1979年 「京都大学構内遺跡と京・白河」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 1981年 「層位と遺構」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白河北殿北辺の調査—』
- 岡田保良・宇野隆夫 1978年 「京都大学病院遺跡A F 14区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
- 川上 貢 1997年 「京都大学構内における史跡の文献的考察」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 京大埋文研(京都大学埋蔵文化財研究センター)
- 1979年 「京都大学吉田キャンパスの試掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 1981年 a 「京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白川北殿北辺の調査—」
- 1981年 b 「昭和55年度京都大学構内遺跡調査の大略」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 1987年 「昭和59年度京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
- 1988年 「昭和60年度京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
- 1989年 「1986年度京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 1990年 「1987年度京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』
- 京大遺跡調査会(京都大学構内遺跡調査会)
- 1988年 『京都大学医学部附属病院構内の遺跡—A H 19区発掘調査現地説明会資料—』
- 杉山信三 1962年 「院の御所と御堂」『奈良国立文化財研究所学報』第11冊
- 浜崎一志 1983年 「昭和56年度京都大学構内の試掘・立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
- 1984年 「京都大学病院西構内A F 15区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
- 1990年 「京都大学医学部構内A L 20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』
- 浜崎一志・宮本一夫 1987年 「京都大学病院構内A F 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
- 樋口隆康・亀井節夫 1979年 「昭和53年度京都大学構内遺跡調査の大要と成果」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 福山敏男 1943年 「六勝寺の位置について」『美術史学』81号, 82号



京都大学病院機内遺跡全景（南から）

第2章 遺跡の形成と地形の変化

清水芳裕

1 遺跡の立地と地形環境

京都大学吉田キャンパスは京都盆地の東北部、吉田山と鴨川の間形成された沖積地に立地し、比叡山西南麓に発達した白川扇状地の西端部、吉田山西麓に形成された微高地および鴨川左岸の低地部を含んでいる（図9）。したがって、構内全体にわたる現地表面の標高は場所によって大きな差があり、北部構内東端で約68m、鴨川に近い病院構内西南端では約47mと、キャンパス全体では東北端と西南端で約21mの標高差をもっている。この地形の形成過程と地理的条件とは、先史時代から中世に至る土地利用に少なからぬ影響を及ぼしている。

弥生時代前半にはほぼ安定した地形を形成したと考えられる北白川扇状地末端、および吉田山西麓の微高地を含む東半部と、医学部附属病院構内を含む鴨川に近い西半の低地部では先史時代から歴史時代に至る間の遺跡のあり方に大きな差がある。つまり東半部では縄文時代から平安時代の遺跡が間断なく認められるのに対して、病院構内西半部では平安時代以前の遺跡はきわめて希薄である。

病院構内を中心とする地域が安定した居住地として、あるいは街として利用されはじめるのは、平安時代末以後のことである。その土地利用の歴史的変遷の背景となった自然地形の変化と遺跡の形成について、周辺部を含めて復原してみることにする。

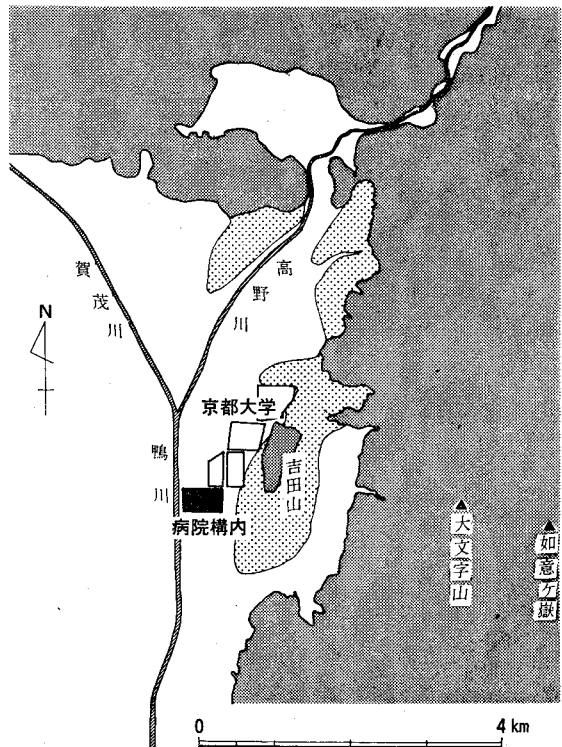


図9 病院構内周辺の地形 縮尺1/10000

遺跡の形成と地形の変化

この北白川および周辺の地で、先史時代以降人々の居住あるいは街の形成を規制した自然地形の変化の大きな要因は、第1に東側の比叡山西南麓の扇状地の形成過程であり、第2に西側を流れる河川の流路の変化にあったといつてよい。

京都盆地およびその周辺は、もともと古生代から中生代の堆積岩からなる広い丹波高原東端にあたり、白川扇状地の形成は古生代以降の地質と深くかかわっている。現京都盆地は比良山—比叡山に通じる山系との間を断つ花折断層による山系のせり上がりの結果生じたものである。一方中生代の終り頃、現在の比叡山と如意ヶ嶽の間に花崗岩を作るマグマが上昇した結果、これと接する古生代、中生代の堆積岩は熱変成をうけて堅い変成岩を作り、侵食に対して強い地形が生じた。他方、花崗岩は風化されやすく、容易に侵食を受ける地形が生まれた。これによって現在の侵食をうけにくく突出して残る比叡山および如意ヶ嶽と、両者の間に風化されやすく侵食をうけた低い山並とができた。この侵食による花崗岩の風化砂礫は京都盆地へ向かって流出し、山麓一帯に大小の扇状地を生み出していった。そのひとつが白川扇状地である。この扇状地の末端部の微高地、およびその緩傾斜地は、主に先史時代の主要な居住地として利用された。吉田山の北および西麓にかけての北部構内から教養部構内の一帯に遺跡の形成がなされていくことになる。まずこの地域の地形と遺跡の形成過程をみていくことにするが、具体的な事例についてはすでにふれたことがあり〔清水85〕、ここでは概要を示すことにする。

比叡山西南麓に形成された扇状地西端部では、縄文早期と後期の修学院・一乗寺遺跡群や縄文前期から晩期の北白川遺跡群などが南北約4 kmの範囲に存在する。北部構内ではこの北白川遺跡群のひとつ北白川追分町遺跡があり、それは西へ発達した扇状地の最末端部にできた微高地とその縁辺部に位置する。56, 135, 54, 123, 16, 11の各地点（図版2）では、縄文時代の遺跡がこの微高地と低湿地に存在し、それらは時期の差はあるもののこうした地形に適した生業活動の一端をよく示すものであった。まず135地点では花崗岩砂からなる微高地の西へ下がる傾斜面が検出され、斜面をとりまく低湿地部に縄文中期と晩期の土器・石器のほか、木材や種実類、昆虫などの動植物遺存体が多数出土し、また人や動物の足跡も多数検出された。木材や種実の同定によって常緑広葉樹と落葉広葉樹の混交林をなしていたことがわかり、種実などから食糧採取の場を提供していた状況が明らかになった〔泉・宇野80、京大埋文研85〕。一方東へ高まる微高地上では、123地点で中期の竪穴住居跡が2棟〔清水84〕、11地点では後期の配石をともなう甕棺墓群〔中村74〕が、また16地点では晩期の土壇墓〔吉野77〕がそれぞれ検出されており、このことから基本的にこの微

高地上を居住の場とし、またこれを取りまく低湿地を生業の場の一部としていたことを知ることができる。こうした縄文時代を通じて存在した微高地と低湿地の地形は、晩期の堆積層によってその比高差も約1 m程度のもとなり、なだらかな斜面をなす地形に変わりそれは弥生前期までつづき、この地形を反映して弥生前期の遺跡は縄文時代の微高地からやや離れた周辺の低地部でも残されるようになる。54地点や6地点では弥生前期の土器がまとまって出土しており〔石田ほか72, 岡田・吉野79〕, また111地点では前期の水路や溝が検出されている〔五十川・飛野84〕。そこでも生業にかかわる遺構は低地部に設けられ、一方住居に関する遺構は発見されていないが、おそらく縄文時代と同様に低地部に近接する東側の微高地上に存在していたのであろう。

このような景観はその直後に大きく変化し、吉田山の北側を東から西へ向かって流出した土石流と黄色砂によって厚くおおわれ、その範囲は吉田山の西麓にまで広く及んでいる。この堆積によって北部構内から教養部構内へかけての地形はほぼ今日の景観に近いものとなったと考えられる。その時期は、54地点で弥生中期中葉の方形周溝墓がこの黄色砂の堆積の上で検出されていることから、弥生前期末から中期初頭の頃であることが明らかになっている。さらにこの堆積物の砂は淘汰が進んでおらず、層中には遺物を含まず、また地表面を形成した痕跡のひとつである有機物の混在などもみられないことから、きわめて短期間に堆積したものと考えられる。またこの砂層は厚いところでは約1.8 mに達しており、比叡山と如意ヶ嶽の間を形成する花崗岩を供給源として、きわめて多量の砂がそれ以前の旧地形にそって東から西あるいは南西へ向かって流出したことがわかる。

その分布は、図版2の梨地部分にはほぼ相当することが発掘調査の結果から明らかになっている〔京大埋文研81b〕。つまり弥生前期以前の東から西へ低くなるいくつかの扇状地端部の谷状地形にそって流出した砂は、北部構内および吉田山の西から教養部構内にわたって南北に長い分布を認めることができる。本部構内、教養部構内ではほぼ南北に直線的にその分布域の西が限られている。60地点ではこの黄色砂層とその下部の粘土層を南北方向に削り去った河道の

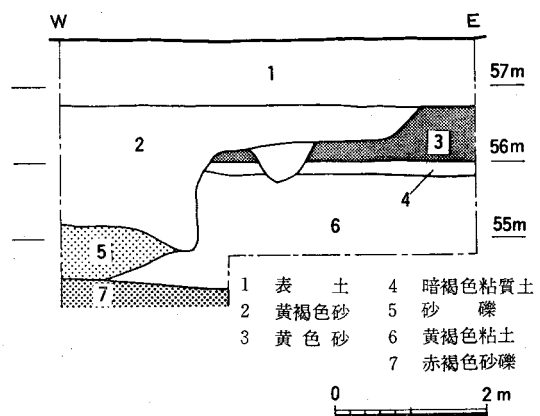


図10 高野川系旧流路の攻撃面 縮尺1/100

攻撃面を検出しており、河道に堆積した砂礫がチャートなど高野川の流路で運搬される系統の砂礫であることが明らかになっている（図10）〔京大埋文研79〕。

これは高野川系旧流路の東限のひとつを示すものであり、この黄色砂の分布を東大路通りをもって明瞭に限るこの高野川系旧流路の移動や盛衰は、病院構内一帯の弥生中期以降の土地利用と白河街区の形成を大きく規制していたといえる。

2 高野川系旧流路と病院構内地域の開発

高野川系旧流路の痕跡と関連する堆積が確認できた地点をみていくと以下のである。病院構内A J 18区（154地点）では約30 mにわたる南北方向の高野川系旧流路を検出している。この年代は流路堆積物の上面で検出した土坑SK 1の年代が7世紀後半の遺物を含むことから、それ以前にあたることが明らかになっている〔五十川ほか89〕。また医学部構内AN 18区（143地点）の調査では、北東から南西へ向かって流れる河川SR 1を検出している〔五十川・宮本88〕。その埋土から出土した須恵器壺や、緑釉陶器碗などの年代から11世紀ごろに堆積したものと考えられており、またこの河川はこれより西を南流していた白川系旧流路の一支流と推定されている。

病院構内A F 19区（141地点）からも約20 mにわたって北東から南西へ向かう高野川系流路が検出されたが、その埋土には縄文後期の土器を含む黄白色砂が堆積しており流路の存在は、この時期以前と判断されている〔浜崎・宮本87〕。この流路と関連する遺構と考えられる最古のものは図版2の19地点で検出された川の護岸跡である〔岡田81〕。河道の東岸斜面に約20 mにわたって粘土を貼りつけた遺構で、粘土中から平安中期の遺物が出土する。さらにこの遺構は高野川系の砂礫で覆われており、10世紀頃にはまだ高野川系旧流路の1つがこの付近に存在したことを示している。この一帯では平安後期になって遺構が増加すること、また周辺の開発では11世紀末から12世紀にかけて法勝寺をはじめとする六勝寺、院の御所などが造立され市街化していく時期でもあることともよく符合している。このことは、さきの医学部構内AN 18区で検出された11世紀頃の堆積と考えられているSR 1の存在とも関連しており、高野川の旧流路が医学部から病院構内西半部にわたる一帯から西へその流路を安定させていくのが、この時期にあたるというひとつの証拠でもある。平安中期河道の護岸跡とされる遺構が検出された19地点から測って西へ東西約50 mから100 mの範囲で1988、89年にわたっておこなったA E 12区（192地点）、A E 13区（198地点）の調査では古代以前の遺構は皆無で、中世の遺物がわずかに出土した程度であった。

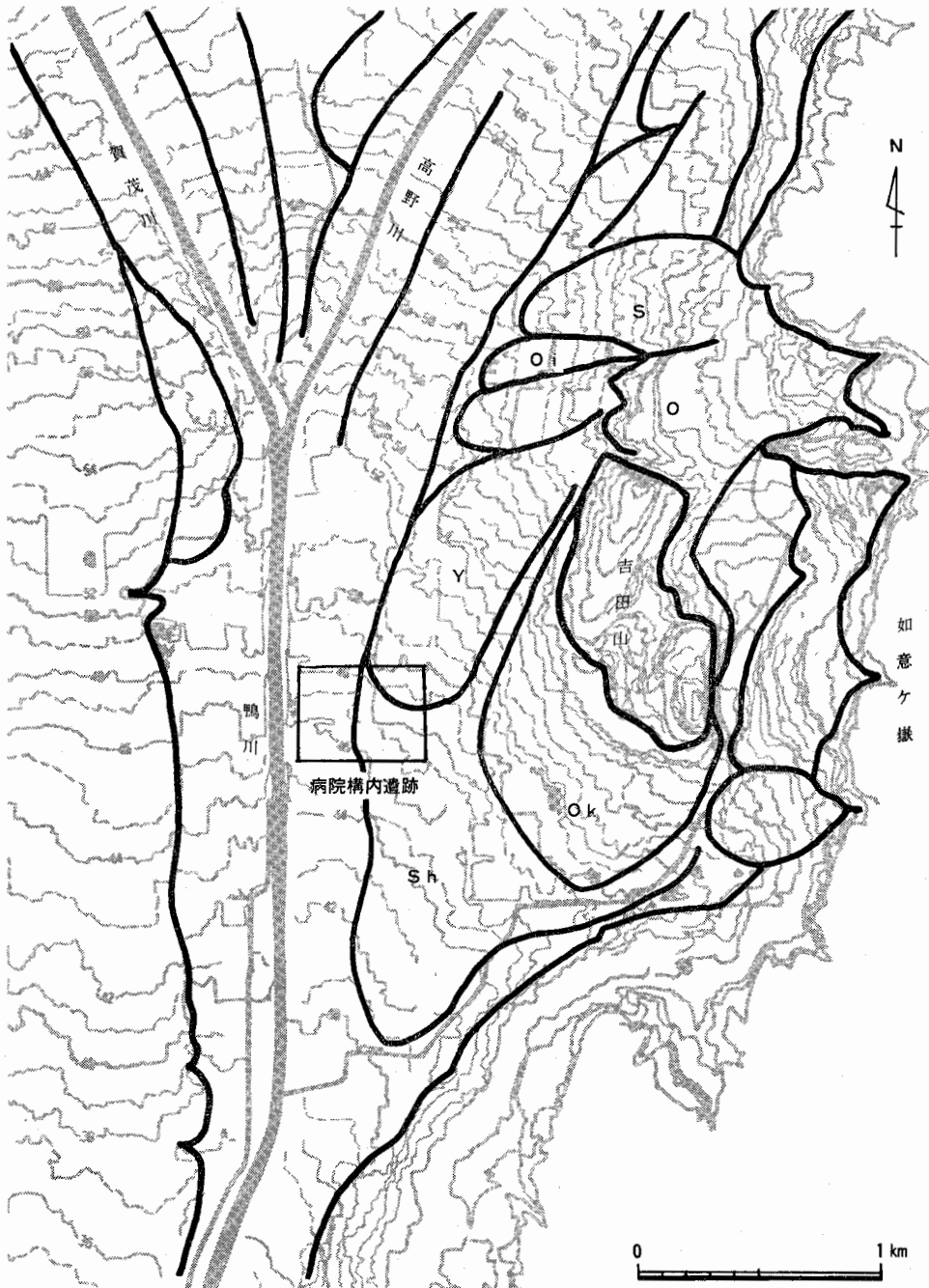


図11 白川扇状地の復原 縮尺1/30000 O 小倉町, S 瀬ノ内町, Oi 追分町
(〔石田・竹村85〕より) Y 吉田, Sh 聖護院, Ok 岡崎

つまり病院構内西半の現在の鴨川に至る一帯が本格的に開発される環境が整ったのは近世をまたなければならなかったことを知ることができる。

3 粘土層の形成

堆積物からみていくと病院構内で顕著なものとして厚い粘土層の堆積がある。この粘土層は旧地形の基盤となる堆積物の一部である砂礫層の上にあるものである。この旧地形を形作った砂礫層は、北方からの高野川系旧流路によって運搬されたものと、東方からの白川系旧流路によって運搬されたものが互いに混在している。チャートなど高野川系旧流路によって運ばれた礫層が広く堆積しているものの、その間に灰白色から黄灰色砂をはさむ地点があることや、中世の井戸の中には花崗岩を組石に利用しているものがあることからわかる。比叡山西南麓にあたる一帯は西方あるいは南西方へ広がる扇状地の末端部と低地の境界にあたり、白川系の堆積物はこの西へゆるやかに下がる旧地形の傾斜にそって堆積物を運んだものである。その旧地形にあたる白川扇状地の復原が図11のように石田志朗によって描かれている。これと現地形の西へ下がる傾斜の変換点を重ね合わせるとよく符合する。一方、低地部を南北に流れを変えながら流れる高野川系旧流路は、ときとして本部構内、教養部構内の西端近くに至り、こうした流れがある所では深くこの砂礫層をえぐり凹地を作ったことが考えられる。粘土層の堆積はその後大きな流れが西へ移動した時期があったことを示すとともに、凹地内では水は、きわめてゆるやかな流れであったか、あるいは、全く滞水域として残されたものであることを示している。

凹地の生成が流路と深く関係する点としては、粘土（シルト）の堆積が顕著にみられる個所でのその上面のレベルがほぼ東北から南西へ下がり、東に高く西へ下がるという傾向からもうかがえる。この粘土と下部の砂礫層との境のレベルをみていくと医学部構内A P 19区では約50 m、同構内A L 20区では約48 m、病院構内A J 18・A J 19区（154・155地点）では、ほぼ46 mである。こうした帯状に、ほぼ南北に連なる砂礫層の凹地は、しばしば東方からの白川系の堆積物によって分断されつつ、凹地の単位を作り上げ、個々の滞水域ができたものと考えられる。粘土層の堆積年代については竹村恵二らがおこなった火山ガラスの分析によって病院構内A J 18区中央部の粘土層の測定がある〔竹村・檀原88〕（図12）。検出した粘土層上限の標高約49 mから51 mの深さまでの柱状に10 cm単位のサンプル10個について火山ガラスの屈折率の測定をおこなった。上部2サンプルから検出したガラスはアカホヤ火山灰、また上から3, 4, 8, 9のサンプルから検出したガラスはA T火山灰

粘土層の形成

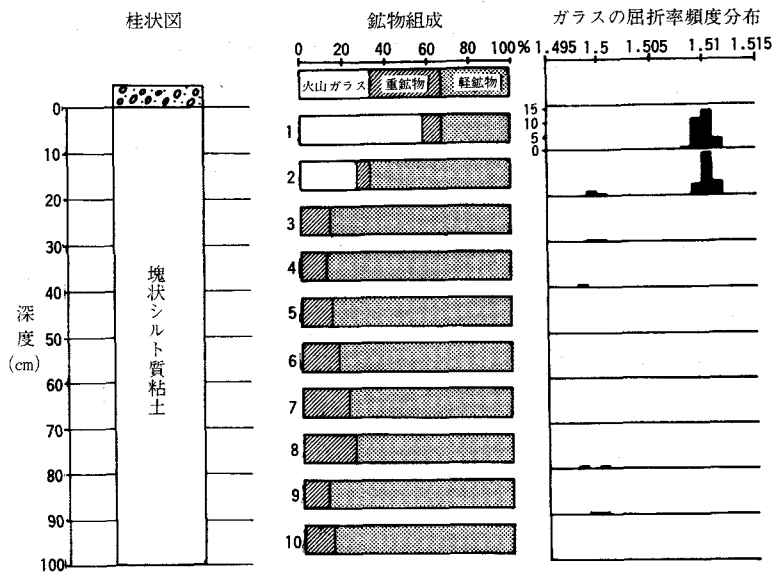


図12 病院構内 A J 18区(154地点)の粘土層〔竹村・檀原88〕図6より)

であることを同定している。上部2サンプル中の火山ガラスの量はともにきわめて多く、全体が屈折率1.51を中心とする値に集まることから年代約6300年前のアカホヤ火山灰という蓋然性がきわめて高いことを示している。さらにその下部のA T火山灰の混在は各サンプル中の量が少なく数サンプルにわたって存在していることから、二次的な堆積による現象であるかも知れないが、いずれにしても、このA J 18区中央部に堆積した粘土層中の上部にあたる約1 mの堆積は少なくともA T火山灰降下の年代約24000年以後であることがわかる。このうち最も新しい堆積部にあたる上部約20 cmの堆積が約6300年前にあたるということが明らかになっている。

4 粘土層の堆積と周辺の地形

これに微視的に医学部構内から病院構内にかけてみていくとその地形は概ね次のように復原できる。

医学部構内A P 19区 (74地点) の中世シルト採取跡でのシルトは、標高50~51 mを上面とする砂礫の上に堆積する。また同構内A N 20区 (134地点) でのシルト採取跡の下に堆積する細砂、あるいは砂礫の上面はほぼ49.5 m、病院構内A J 18・A J 19区 (154・155地点) では砂礫上面はほぼ46 mである。こうした粘土層が生成される条件である滞水域を想

遺跡の形成と地形の変化

定すると、教養部および医学部構内付近から次第に南西に向かって低くなる下部の砂礫層の上面が作る地形と高野川系旧流路の堆積物によって封じられた一帯が形成され、その最も深い位置がA J18区付近にあたると考えられる。これより西、あるいは南ではこれに近い粘土層の堆積は今日まで認められず、おそらくこの付近を南限とした高野川系旧流路の後背湿地による凹地が存在したことが想定される。この粘土層の堆積によっていったん今日に近い地形が吉田山西麓域一帯に形成されたものであろう。このような吉田山西麓と高野川系旧流路との間にできた後背地としての地形は北部構内B G31区（56地点）でその東の傾斜面が検出されており、同様の扇状地先端をとりまく小規模な谷状地形が吉田山西麓一帯に形成されている。その地形と相ともなう図版2で示した黄砂層の西を限る高野川系旧流路よりも古い流路によって後背地が形成され、粘土層堆積の条件が整ったものといえよう。

このような条件は、北部構内中央部から教養部中央部および吉田山南麓一帯を東縁とする扇状地末端部と西部構内、医学部構内、病院構内の西端付近を限る後背地の間に帯状に吉田山西麓をとりまくように存在したものと想定される。厚い粘土層が点在するかのよう^にに形成されているのは扇状地末端の谷状地形と深い関係があるためであろう。

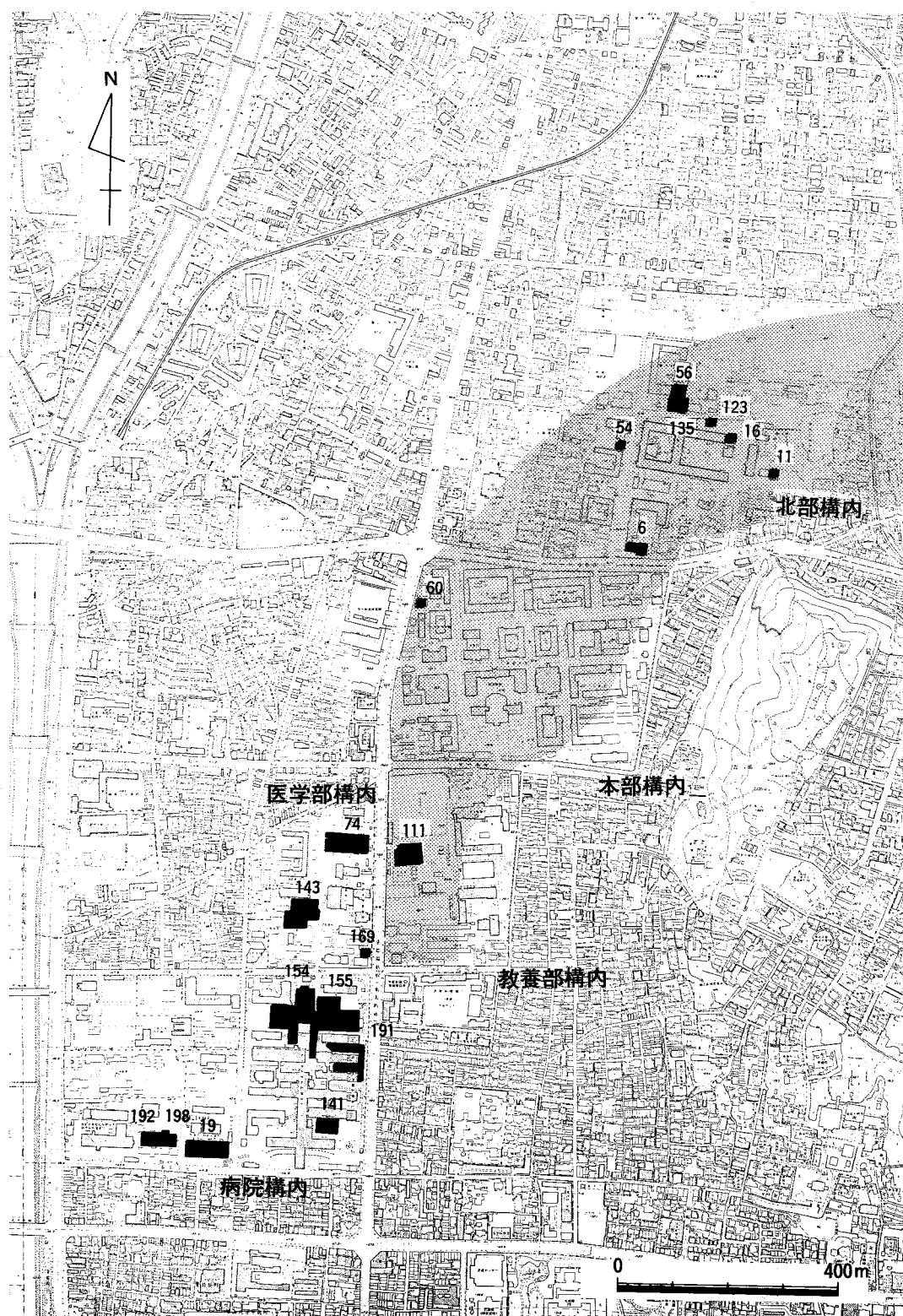
今日までこの一連のものと考えられるシルト、あるいは粘土層中での縄文土器の発見例はなく、A J18区でのアカホヤ火山灰が検出された粘土上層の一部の堆積が最も新しいものと考えられる。近接するA J18・A J19区の南東部にあたるA H19区では白川系砂礫層中から縄文前期以降の土器が出土している。その下層の粘土層はA J18・A J19区の粘土層の上面の標高とほぼ同じ48.5～49mであり、そこでは東に下がる谷状の傾斜が認められ、これを砂礫層が埋めている。こうした粘土層上面を掘り下げる白川系旧流路の痕跡は、教養部構内A P22区（111地点）、病院構内A J19区でも存在する。これらはいずれも黄色粘土層を削って南あるいは南西方向への流路であり、一連の白川系流路の痕跡をみる^{ことができる}。

こうした白川扇状地と高野川、白川の旧流路によって変転をくり返した病院構内を中心とした一帯も、平安後期以降では検出される遺構が急増し開発が進んだことを知ることができる。このことは周辺で、11世紀から12世紀にかけて法勝寺をはじめとする六勝寺・院の御所などが造立され、この地域の市街化していく時期と一致する。以後、鎌倉～室町時代にわたる遺構が多数残され、さらに現在も痕跡をとどめる近世の白川道に至るまで連綿と人の営みが続いていく。

参 考 文 献

〔参考文献〕

- 石田志朗・中村徹也・中村友博 1972年 『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』
- 石田志朗・竹村恵二 1985年 「北白川追分町遺跡の堆積環境の変遷」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』
- 泉 拓良・宇野隆夫 1980年 「京都大学北部構内B G 31区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
- 五十川伸矢 1981年 「京都大学本部構内A T 27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 五十川伸矢・飛野博文 1984年 「京都大学教養部構内A P 22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
- 五十川伸矢・浜崎一志・伊東隆夫 1989年 「京都大学病院構内A J 18・A J 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 五十川伸矢・宮本一夫 1988年 「京都大学医学部構内A N 18区の発掘調査」『京都大学校内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
- 岡田保良 1981年 「層位と遺構」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白河北殿北辺の調査—』
- 岡田保良・吉野治雄 1979年 「京都大学理学部遺跡B E 29区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 京大遺跡調査会(京都大学構内遺跡調査会)
1988年 『京都大学医学部附属病院構内の遺跡』『—A H 19区発掘調査現地説明会資料—』
- 京大埋文研(京都大学埋蔵文化財研究センター)
1979年 「昭和53年度京都大学構内遺跡調査の概要と成果」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 1981年 a 「昭和55年度京都大学構内遺跡調査の大略」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 1981年 b 「京都大学構内遺跡の概略」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 1985年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』
- 清水芳裕 1984年 「京都大学北部構内B F 33区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
- 1985年 「自然地形の変化と遺跡の形成過程」『第四紀研究』第24巻第3号
- 竹村恵二・檀原 徹 1988年 「土壌火山ガラス抽出分析による遺跡の地層対比および編年」『考古学と自然科学』第20号
- 中村徹也 1974年 『京都大学理学部ノートバイオトロニクス実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 浜崎一志・宮本一夫 1987年 「京都大学病院構内A F 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
- 吉野治雄 1977年 「農学部遺跡B E 33区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』



黄色砂の分布

第3章 病院構内の先史時代遺跡

千葉 豊

1 はじめに

病院構内一帯は第2章で述べているように、現在の鴨川東縁部にあたり、先史時代には高野川系旧流路、白川系旧流路が流入する低地部を形成していた。従来、この地域では先史時代の遺物はみとめられておらず、先史時代においては遺跡形成の範囲外であると考えられてきた。

そのような状況の中で、A F 19区 (141地点)、A J 19区 (155地点) という構内東辺の調査がすすむにつれて、旧流路にあたる下層の砂礫層中より縄文土器が出土することが判明した。これは磨滅の著しいものもあって、明らかに二次堆積の遺物であり、吉田山西麓から岡崎にかけての微高地上に存在した縄文遺跡からの流れ込みであると解釈された。

ところが、構内東辺の中央に位置するA H 19区 (191地点) の調査では、下層の砂礫層より縄文時代の遺物がみつかったばかりでなく、白川系旧流路の肩部に遺棄されたと考えられる状況で縄文後期の土器をとらえることができた。これは、病院構内で発見される縄文・弥生時代の遺物がたんに東方からの流れ込みによるものばかりでなく、高野川系、白川系の旧流路がながれ、低地部を形成していた病院構内一帯とくに東半部にも、自然堤防上や微高地上に縄文人や弥生人の活動が及んでいたことを推定させる資料となった。先史遺跡として、その性格を改めて見直す必要が生じたといえるであろう。

本章では、以上のような把握にもとづき、最初に、病院構内で出土した縄文・弥生時代の遺物の出土状況とその内容について紹介し、時期的変遷をあとづける。次に、出土遺物のうちでも比較的まとまった資料が出土している縄文後期前半の土器について検討を加える。最後に、隣接して存在する諸遺跡と時期的変遷等について比較し、比叡山西南麓の先史遺跡群のなかでの病院構内の先史遺跡の位置づけを試みたいと思う。

2 遺物の出土状況と編年的位置

病院構内の調査で、先史時代の遺物が見つかっているのはA F 19区、A H 19区、A J 19区の調査である〔浜崎・宮本87, 京大遺跡調査会88, 五十川・浜崎89〕。また、A F 20区の立合調査でも縄文土器を採集している。これらの地点は、いずれも病院構内の東辺に位置

し、吉田山西麓から岡崎にかけて広がる白川扇状地南辺の先端と現在の鴨川の河床礫地帯とのほぼ境界の部分にあたっている。

A J 19区の発掘調査では白川系旧流路である白色粗砂中より磨滅の著しい縄文前期の土器がみつまっている。A F 19区の調査では高野川系旧流路である黄白色砂中より縄文後期の土器がみつまっている。A H 19区の調査では白川系旧流路である白色砂礫中より縄文前期～後期の土器がみつかったほか、歴史時代の堆積層中にも先史時代の遺物が含まれていた。白川系旧流路は北東から南西へ流れており、東側の肩部にあたる位置からは遺存状態の良好な縄文後期の土器が3個体見つかった(図版3)。これは原位置を保っていると判断でき、一括廃棄された状況を示すものと理解できる。白色砂礫より出土した縄文後期の土器もほとんど磨滅していない遺存状況の良好なものが多い。

以上、出土状況について簡単にみたように、大半の遺物は旧流路にあたる砂礫層中より出土しているものであり、本来の位置を保っているとは考えられないものである。しかし、A H 19区の白川系旧流路の肩部から出土した縄文後期の土器は原位置を保ったもので、縄文人の活動がこの地一帯に及んでいたことを明示する資料となった。砂礫層出土の遺物も磨滅の少ないものが一定量あることから、これら調査区の東方、近接した地点に縄文集落が営まれたことを強く示唆するものであるといえよう。遺跡の形成や性格の問題については、最後にふれることとし、最初に出土遺物の内容について時代順にみていく。

縄文早期の土器(図版5, 図13) I 1の1点のみ、歴史時代の堆積層より出土した。山形押型文を横位にめぐらす。細片で磨滅しており、原体長・単位数は不明である。押型文土器は比叡山西南麓ではもっとも古く位置づけられる縄文土器であり、修学院遺跡〔梅川71〕、一乗寺向畑町遺跡〔佐原61〕、北白川上終町遺跡〔梅原35〕でみとめられている。早期前半から、比叡山西南麓一帯で縄文人が活動していたことを示す資料である。

縄文前期の土器(図版5, 図13) I 2・I 3はともに器壁の厚さが2～3mmと薄く、I 2は縄文地に半截竹管文による沈線を2条、I 3はC字形Ⅱ型爪形文〔網谷82〕を横位にめぐらしている。I 2は京都府舞鶴市志高遺跡〔三好ほか89〕などに類例があり、北白川下層Ⅱ式に相当しよう。I 3は北白川下層Ⅱb式に比定される。I 4は縄文地に凸帯を2条貼り付け、凸帯上を半截竹管状施文具で押し引いている。肥厚させた口縁端部にも同一の原体で押し引きを加えているようである。前期末の大歳山式に比定できる。

縄文中期の土器(図版5, 図13) I 5はR L縄文地に凸帯を貼り付け、凸帯上を半截竹管状施文具で押し引いている。口縁端部にも両側から同一の原体で押し引きを加えてい

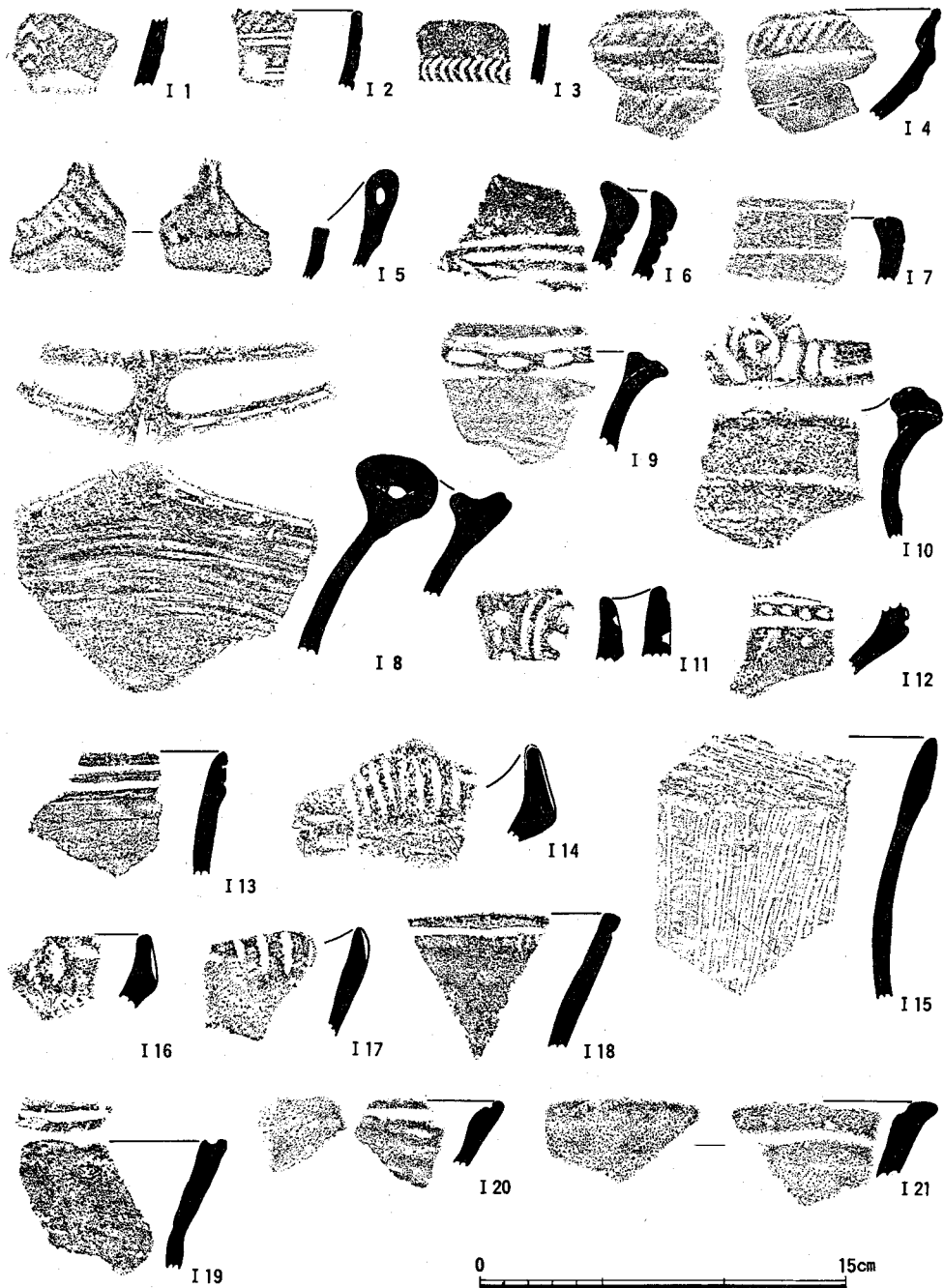


図13 縄文早期の土器(I 1 AH19区), 縄文前期の土器(I 2・I 3 AH19区 I 4 AJ19区), 縄文中期の土器(I 5 AH19区), 縄文後期の土器(I 7・I 9・I 15 AF19区 I 6・I 8～I 14・I 16～I 21 AH19区) 縮尺1/3

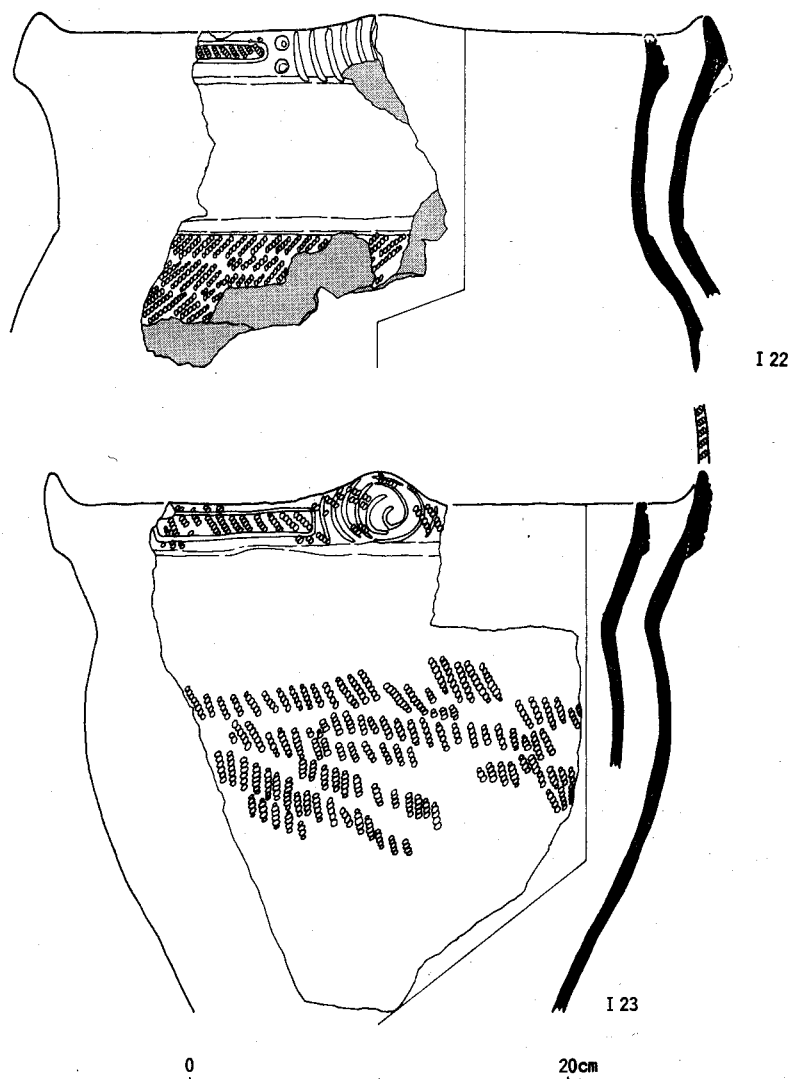


図14 縄文後期の土器(1) (I 22・I 23 AH19区) 縮尺1/4 (梨地部分は剥落を示す)

る。波状口縁で頂部を橋状突起につくる。中期初頭の鷹島式に比定できる。

縄文後期の土器 (図版4～6, 図13～18) I 6・I 7は口縁部が内側へ肥厚する土器。I 6は口縁部直下に3条の沈線が横走り、I 7は口唇上と口縁部直下に沈線がめぐる。福田K 2式に比定される。I 8～I 10は口縁端部が内外に肥厚する深鉢。いずれも口縁端部に沈線を1条めぐらしており、さらにI 8は口縁部外側端部に浅い沈線を加え、I 9は外側端部との間に刺突列を加えている。I 8・I 10は波状口縁を呈し、I 8は頂部を橋状に

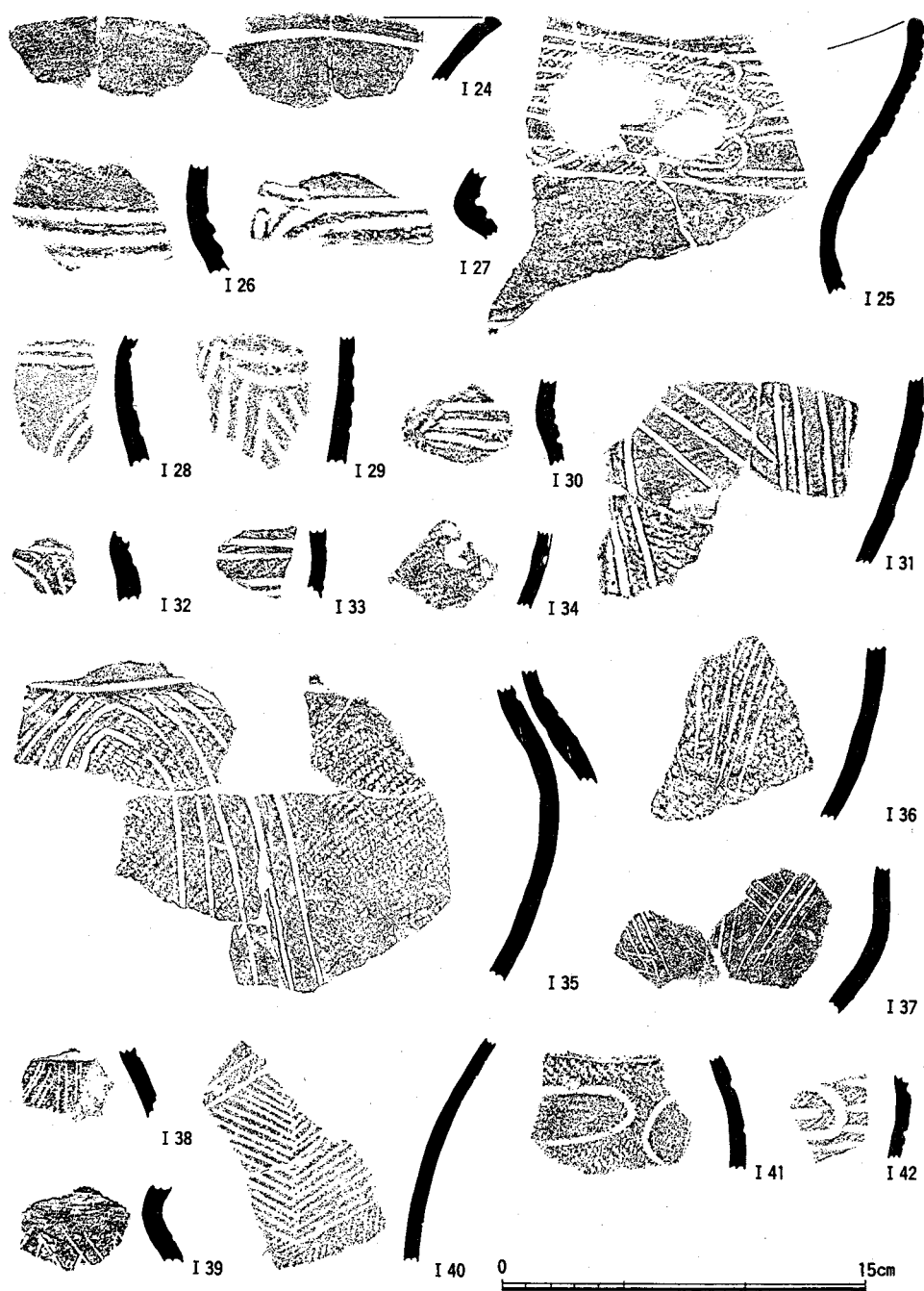


図15 縄文後期の土器(2) (I 28・I 29・I 40 AF19区 其他はAH19区) 縮尺1/3

つくりだし、I10は突起状にし、渦巻文と弧線文を配する。頸部は外反がつよく無文となる。I8～I10は成立期縁帯文土器であり、「広瀬土壙40段階」に相当する。

I11～I17・I22・I23は口縁部前面を屈曲や肥厚によって区別し、そこに文様を施した深鉢。主文様部には弧線文（I11・I22）や渦巻文（I23）、弧線文の退化形態である短直線（I14・I16・I17）を施し、従文様として長方形区画文（I22・I23）や1本沈線（I16・I17）、櫛状施文具で斜沈線（I15）を施す。頸部は垂下条線を加えるもの（I15）のほか、無文帯とする例も多い。I22・I23は胴部までわかる例で、I22はLR縄文、I23はRL縄文を横位にめぐらしている。I22は頸胴部の境を段状につくり、I23はなめらかに移行している。I22は口縁部の縄文にRL（0段の3本撚り）の撚紐を用いており、口縁部と胴部で異なる縄文原体を用いている珍しい例である。なお、I22とI63・I64は旧河川肩部より一括して出土した。I18は口縁部直下、I19は口縁端部に1条の沈線を横走させる。I20・I21・I24は口縁部内面に1条の沈線を横走させる例で、I20・I21は内面がわずかに肥厚する。I25は幅広の口縁部が内湾する波状口縁深鉢。上下を2条の沈線で区画した後、8条の沈線を横走させ、「ノ」字状の沈線を上下に3段重ねて区切り文とし、LR縄文を充填している。胴部に横走する沈線の端がわずかにみえる。I11～I25は北白川上層式に比定され、I11～I13・I22・I23は1期、I14～I21・I24は2期、I25は3期に相当しよう〔泉81〕。

I26～I42は有文深鉢胴部。I26・I27は頸胴部の境を界線がめぐる。I28～I30は3条1単位の沈線を曲線的に配する。I31～I35は縄文地に沈線を施すもので、I31・I34・I35は縄文→沈線、I32・I33は沈線→縄文の順序に施文している。文様意匠は、I31は垂下文を斜行文でつなぎ、I35は多条沈線で逆「U」字状の文様を描いている。I36～I38は櫛状施文具による条線で文様を描く類。I36は縄文を地文に施している。I39は沈線で斜格子文を描く。I40は菱形状の区画帯にLR縄文を施し、区画帯内を綾杉沈線文で充填する。I41は2条の沈線帯にRL縄文を充填する。I42は数条の沈線束を横位にめぐらし、部分的に「ノ」字状に区切りを加え、LR縄文を充填している。

以上の胴部資料のうち、I26・I27は「広瀬土壙40段階」に相当し、他は北白川上層式に比定される。I28～I36は1期、I37～I39は1期～2期、I40・I41は2期、I42は3期に相当しよう。I40は関東系深鉢で、近畿地方でも安定的に器種を構成している。

I43～I51・I61は口縁部や胴部に縄文を施している深鉢。I44は頸部に条線で蛇行文を加えている。I51は巻貝による擬似縄文である。I52・I53は外面全体に条線文を施し

遺物の出土状況と編年の位置

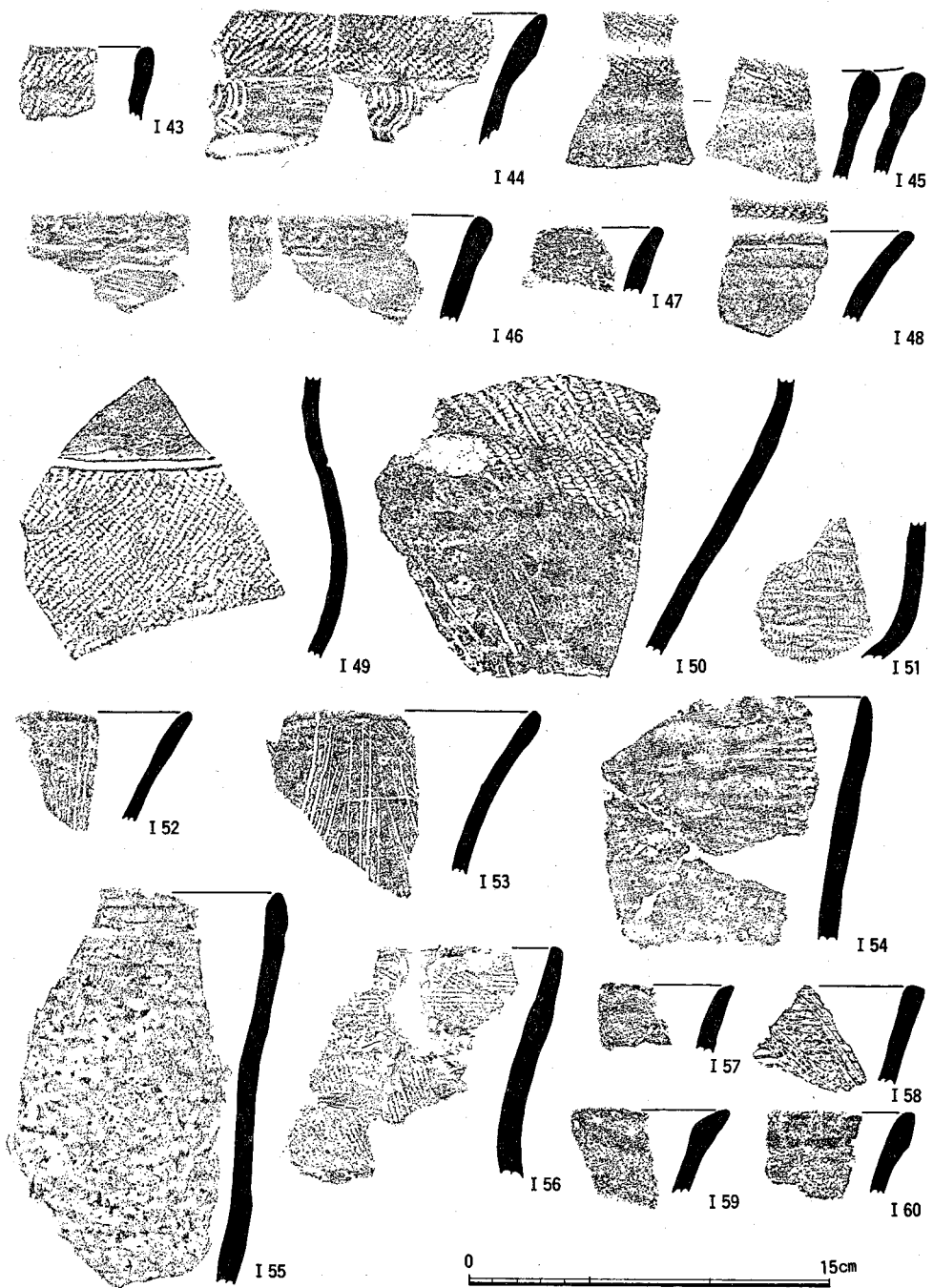


図16 縄文後期の土器(3) (I 43~I 60 AH19区) 縮尺1/3

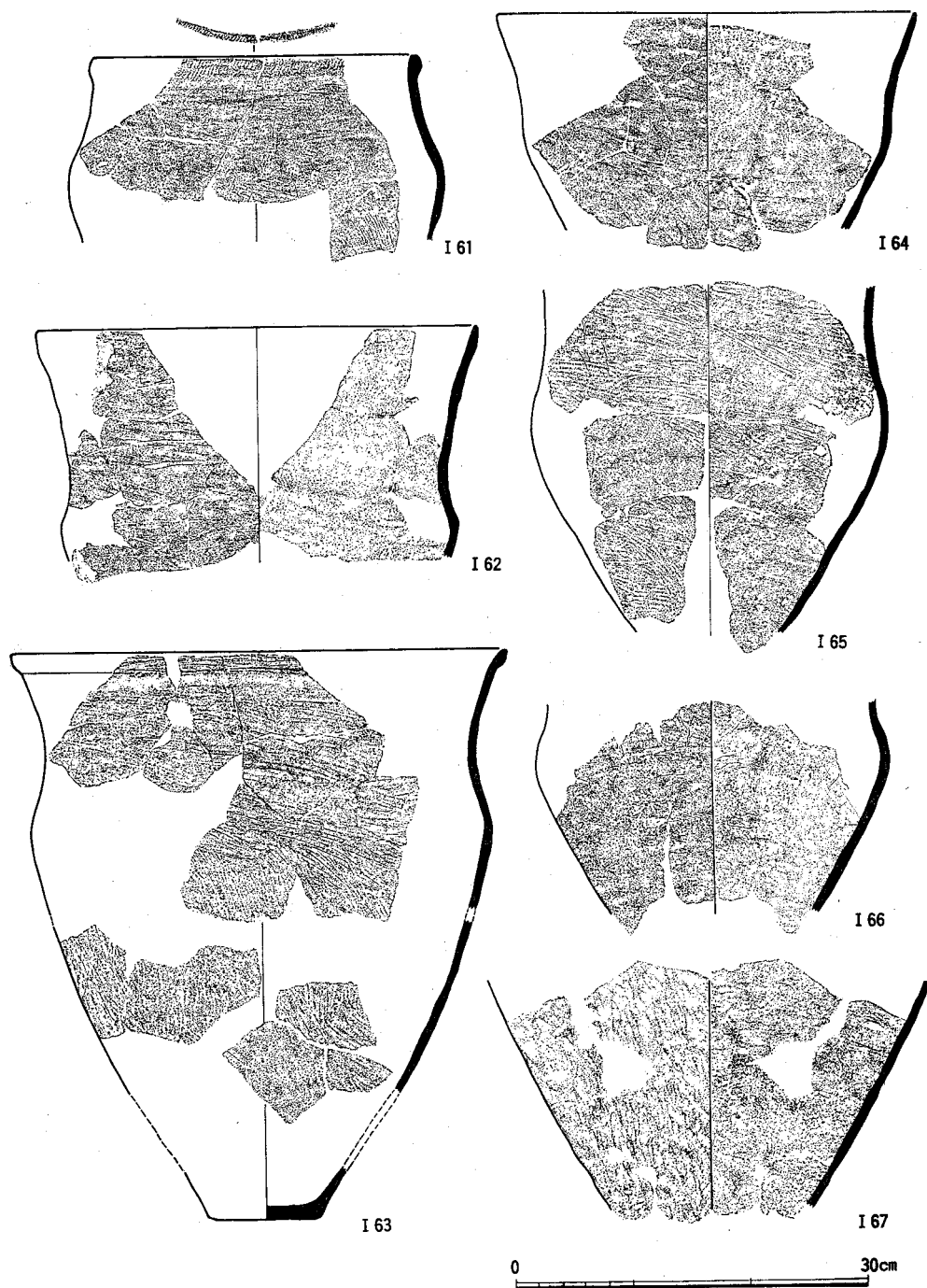


図17 縄文後期の土器(4) (I 61~ I 67 AH19区) 縮尺1/6

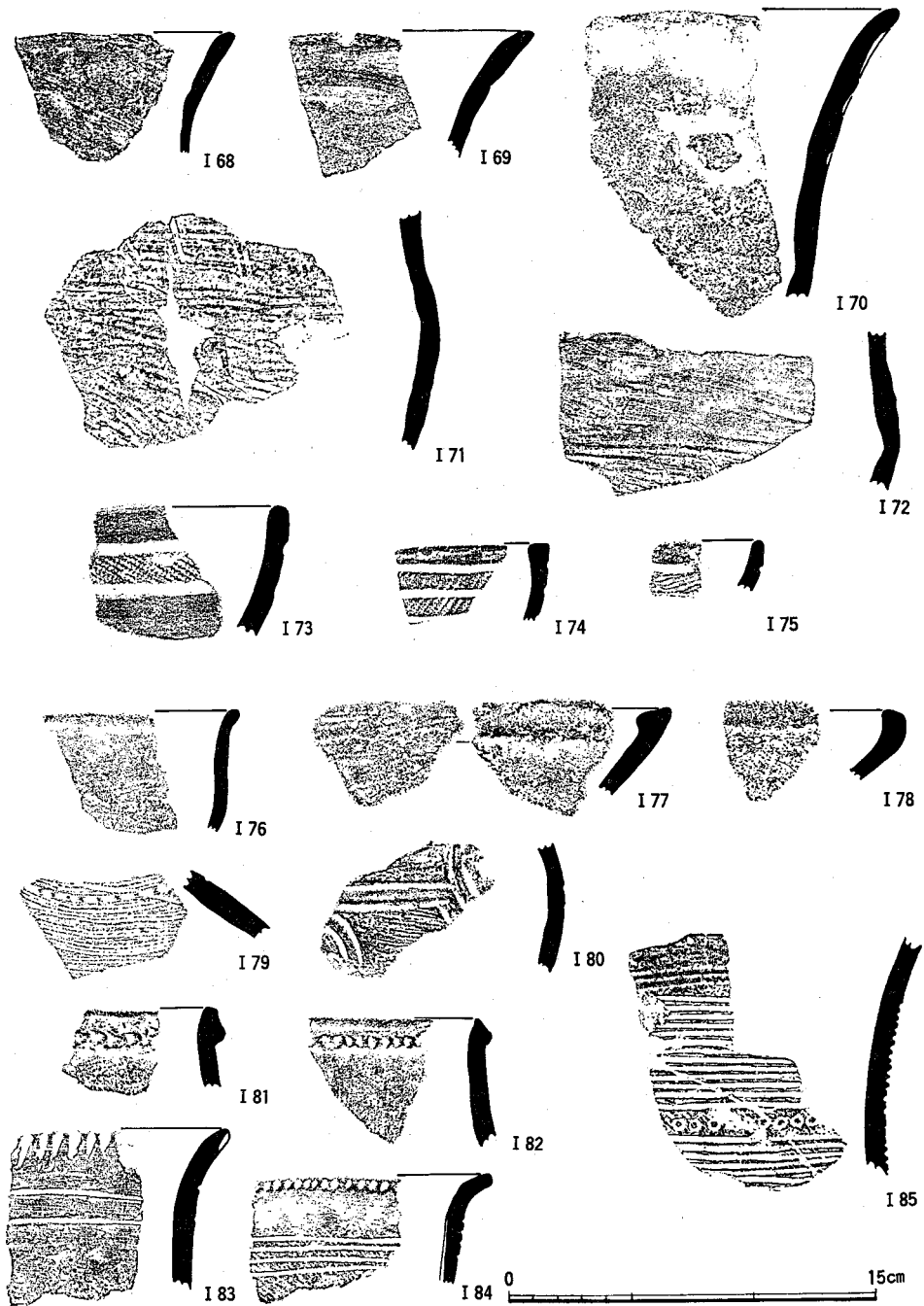


図18 縄文後期の土器 (I 68~I 80), 縄文晩期の土器 (I 81・I 82), 弥生前期の土器 (I 83~I 85) (A H19区出土) 縮尺1/3

た深鉢で、明確な文様帯をもたない。縄文地深鉢、条線地深鉢ともに北白川上層式を構成する器種のひとつである。I54～I60・I62～I72は無文深鉢。口縁端部を丸く仕上げるもののほか、外面を肥厚させるもの（I60・I63）、内面を肥厚させるもの（I59）がある。器面の調整は巻貝による条痕が多いが、I56は「細密条痕」〔横山79〕で仕上がっている。これらは、北白川上層式1期・2期を中心とした時期のものであろう。

I73～I78は鉢・浅鉢の類。I73～I75は口縁下に縄文帯が横走する浅鉢。I74は3条の沈線で縄文帯をつくる。I76は無文鉢。I77・I78は無文浅鉢。I77は口縁部内面が肥厚する。これらのうち、I77はやや古い様相をもつが、他は北白川上層式2期を中心とした時期のものであろう。

I79は結節沈線による区画の中に条線文を横位に密接に加えている。I80は2条沈線帯を曲線的に配し、磨いている。両例は形態・調整などから判断して注口土器の可能性があり、北白川上層式に含まれる。

縄文晩期の土器（図版6、図18） I81・I82は、口縁部に凸帯をめぐらした後葉の土器。口縁部直下に刻目凸帯をめぐらしており、I81は口縁端部を面とりし、I82はうすく仕上がっている。I81は滋賀里Ⅳ式～船橋式、I82は長原式に相当しよう。

弥生前期の土器（図版6・図18） I83・I84は口縁端部に刻みをめぐらし、体部に数条の沈線を加えた甕。I85は壺の頸部で、多条沈線を横位にめぐらし、竹管による刺突列を加えている。I84・I85は、第Ⅰ様式新段階に比定される。I83は端部の刻みが大幅であること、2条沈線の間隔が広いことなど、他に類例をみない特徴をもっている。

3 縄文後期前半土器の様相

前節で記したように、病院構内からは比較的まとまった縄文後期前半の土器が出土している。そこで、個々の土器の編年的系譜的位置づけについてさらに詳しく検討してみよう。

I6・I7は、瀬戸内地域に分布の中心がある福田K2式に位置づけられる。筆者は口縁部文様帯の位置に基づき、口縁部文様帯が口縁下の位置をしめる「古段階」（I6）と一部が口縁端部に上がる「新段階」（I7）に細分した〔千葉89〕。また、玉田芳英はかつて「中津Ⅲ式」としたものを「福田KⅡ式」の「古段階」とし、「福田KⅡ式」を前後2時期に細分している〔玉田89〕。筆者の細分は玉田の「新段階」の内容をほぼ2分する形となる。玉田の「古段階」は、文様構成に中津Ⅱ式の伝統を強くとどめる一方、口縁部の内折、口縁端部の面取り、あるいは不安定ではあるが文様描線の単位に3条、4条といった

多条のものが出現していることなど、新出の要素をみとめることができ、過渡的な様相として理解できよう。玉田や泉拓良〔泉・松井89〕が指摘するように、学史上の配慮より筆者もこの土器群を福田K2式としてとらえ直したい。このように考えることができるとすれば、福田K2式は過渡的時期も含めてほぼ3時期に区分してとらえることが可能となり、I6は第2段階、I7は第3段階に位置づけられよう。

さて、福田K2式は、分布範囲と東日本の土器型式との併行関係についてなお共通した認識を得ていない土器型式である。分布範囲については近畿地域を含めるかどうかで見解の相違をみてきたが、本資料の存在も示すように、分布範囲に含まれることは確実となっている。近年、滋賀県能登川町今安楽寺遺跡で良好な資料〔植田90〕が発見されている。

東日本の土器型式との併行関係については、堀之内I式併行説と称名寺II式併行説がある。筆者は、福田K2式に後続する「広瀬土壙40段階」が堀之内I式古段階・中段階に併行している点から称名寺II式に併行すると予測したが、称名寺I式C類で口縁端部が内側へ突出するようになり、II式で口唇上に文様を加えられるという変化〔今村77〕が福田K2式の細分に関わる変化とほぼ相似点がある点から、福田K2式第3段階が称名寺II式にほぼ併行し、第1段階は称名寺I式C類にさかのぼる可能性が高いと考えている。

I8～I10・I26・I27は「広瀬土壙40段階」に位置づけられる〔千葉89〕。頸部の無文化（ただし、頸部文様を残す例もある）にともない、口縁部—頸部—胴部という西日本縄文後期の有文深鉢の主流をなす文様帯規格が成立した土器で、福田K2式の系譜をひく口縁端部の文様帯、比較的短く、外へ開く頸部といった特徴をもつ。胴部文様は大別して福田K2式の系譜をひくものと東日本系の系譜をもつ2種類があるが、沈線施文後の再調整をおこなわず、沈線の縁に押し出された粘土が残存している粗雑なものが多い点でも前後の時期と区別できる。福田K2式と北白川上層式の間期的な様相を示す土器であり、縁帯文土器成立期として理解している。

I11～I13・I22・I23は北白川上層式I期の縁帯文深鉢。I22・I23は全体の形状がとらえられる良好な資料であり、詳細にみてみよう。なお比較資料として北白川追分町遺跡出土土器があげられる（図19）。I22・I23ともに口縁部外側に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、口縁部文様帯を作る。北白川上層式I期を特徴づける外面施文型の口縁部の作出には、本例のように段状肥厚するものと内湾や屈曲によって区別されるもの（I86～I88）がある。こうした口縁部作出法の成立はどのように説明できるであろうか。まず、前段階の近畿南部の「広瀬土壙40段階」の口縁部作出は口縁端部が内外に肥厚するものが主体を

占めており、口縁部を際立たせるという点では共通性を有しているものの上方へ拡張する1期の口縁部形態との差異は大きく、直接的な系譜を認めることは困難であろう。また、文様等で大きな影響を与えている関東系土器の口縁部形態は上方へ拡張しているという点では共通しているものの、通常1条の沈線が口縁部を横走する幅狭の形態を呈し、幅広の形態を示す1期の口縁部形態との直接的な関係は考えにくい。

「広瀬土壙40段階」の口縁部形態の地域色を眺めてみると、上方へ拡張するものが比較的多い山陰～近畿北部のあり方が問題となろう。「広瀬土壙40段階」の山陰～近畿北部（日本海沿岸部）型である布勢式〔久保88〕から、北白川上層式1期に併行する崎ヶ鼻1式にかけて、屈曲口縁から内湾口縁、段状口縁へと一連の連続的な変化がみとめられる〔千葉90〕ので、こうした地域の影響が加わって1期を特徴づける口縁部形態が成立、展開すると推測できるであろう。

次に、口縁部の文様意匠についてみてみよう。口縁部は水平口縁のものは稀で、本例のようにほとんどが突起を有する形態をとり、突起部の文様とそれをつなぐ文様で構成される。仮に、前者を主文様、後者を従文様と呼んで個別にみてみよう。1期の主文様の意匠は円形刺突の回りに配する弧線文（I86）と渦巻文の回りに配する弧線文（I87）ないしは非対称の弧線文（I23・I88）に大別できる。これらのうち、前者は基本的に「広瀬土壙40段階」の文様意匠を受け継いだものと理解できるが、円形刺突のまわりに配する弧線文の数が増える点、口縁部の拡張ともなって大ぶりの意匠が増える点などに細かな差異が見出せる。このような変化のうち、円形刺突のまわりに配する弧線文の数が増えるという変化は、1期段階における胴部文様の多条化と連動した現象であろうと考えている。また、後二者の渦巻文や非対称な弧線文の配置は「広瀬土壙40段階」にはほとんどみられないものであり、I88のように胴部文様にみられる同種の意匠を写し取ったとみるべきであろう。このように1期における口縁部主文様の発達が生じたのは前段階の意匠を継承しただけのものではなく、同時期の胴部の文様意匠との連関の中で変化していることに注目しておきたい。

口縁部主文様と胴部文様のある種の類縁関係をみとめてよいとすれば、こうした関係は口縁部従文様にもおよんでいると考えられる。それは従文様としての弧線文である。弧線文の由来を泉、玉田は「広瀬土壙40段階」に頻出する口縁部外側端部の刻み（I9）にもとめた〔泉・玉田86〕。正しい指摘であると考えるが、前段階で沈線と外側端部の間の刻みであったものが、弧線文として主文様間を埋めるようになる契機としては、やはり胴部文様の多条化が引き起こしていると考えている。「広瀬土壙40段階」の刻みが基本的に左下

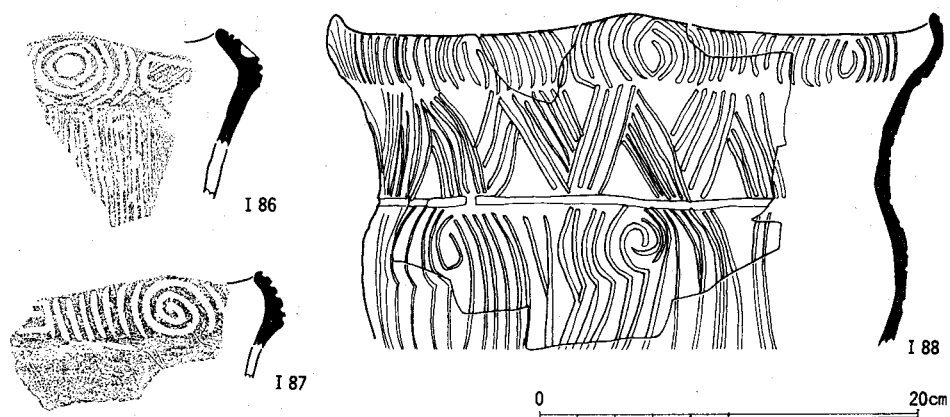


図19 北白川追分町遺跡出土土器〔中村74〕 縮尺1/4

がりか右下がりのどちらか一方で統一されているのに対して、I 88のような1期の弧線文が主文様をはさんで対称的な配置をとることや波底部での弧線文の反転が胴部の意匠に対応しているのも胴部文様意匠を写しているためだと理解できるのである。

1期の段階でのもうひとつの主要な従文様はI 22・I 23にみられる長方形区画文である。長方形区画文の由来を泉, 玉田は前段階の2条沈線にもとめ, 筆者もこれに従っているが, 端が開放された2条の沈線が区画文としてなぜ閉じるのかについては「広瀬土壙40段階」に散見される沈線末端の折りまげの手法が影響を与えたのであろうと推測している。

最後に頸胴部についてみておく。頸部を無文帯にする例は多いが, 胴部文様に縄文のみを加えるI 22・I 23は1期には類例が少ない。胴部を縄文のみですます例は2期に多くみられるものであり, I 22・I 23はその点で新しい様相を有していると考えられる。

I 14～I 21・I 24は北白川上層式2期に位置づけられる縁帯文深鉢。I 15の口縁部に対する条線文の使用は2期の特徴であり, 東大阪市縄手遺跡第10次資料〔芋本ほか87〕, 大阪府岬町淡輪遺跡1986年度出土資料〔藤永87〕などにみられる。I 16・I 17は口縁部が萎縮しており, I 17は口頸部の境が不明瞭となっている。胴部を縄文施文だけですまし, それ以外に文様を加えないものが増えることもあわせて, こうした特徴は一種の手抜き・退化とみられるものである。I 40の関東系有文深鉢が安定して器種を構成しているのに対して, 縁帯文深鉢は, 文様意匠等の展開が関東系文様の模倣を除いてほとんどみられず, 粗雑化の傾向を示していると理解できる。

I 25・I 42は北白川上層式3期の有文深鉢。三山の波状口縁になると想定できる。口縁部文様帯, 頸部文様帯(無文帯), 胴部文様帯が区別されるという点で縁帯文深鉢の文様

帯構成と軌を一にするが、三山・内湾口縁・幅広の口縁部文様帯を前段階の縁帯文深鉢の系譜でとらえることは困難である。東海西部では併行する時期に縁帯文深鉢と在地化を深めつつあった関東系深鉢との融合によって、三山波状口縁で口縁部と頸部に文様帯を有する深鉢が成立しているの、近畿の三山波状口縁有文深鉢の成立もこうした動きと連動していると推定できる。口縁部と胴部の文様意匠が、基本的に同一であり、その文様意匠が2期の関東系深鉢の頸部文様などからの展開でとらえられることから、両文様帯とも関東系深鉢の頸部文様帯の系譜をひくものと想定される。口縁部が内湾し、幅広の文様帯をもつことは、幅の広い頸部の文様帯を口縁部にあてはめたためと考えている。

以上、病院構内から出土した縄文後期前半の有文深鉢について個々に検討を加えてきた。今後、北白川追分町・北白川小倉町遺跡出土土器などとあわせて検討を進め、京都盆地東部という小地域における土器の様相を明らかにしてゆきたい。

4 比叡山西南麓における縄文時代遺跡

病院構内より出土した先史時代の遺物は縄文早期から弥生前期に及んでいる。時期的には長期にわたるが、確認された型式という点では、断続的なあり方を示し、また二次堆積のものもあって、遺物の存在をただちに縄文・弥生人の活動とむすびつけて考えることはできない。こうした中で、縄文後期前葉の土器はまとまって出土しており、その場に廃棄されたとみとめられる状況でみつかったものもあることから、病院構内東辺一帯が縄文後期の人々の活動場所のひとつとして機能していたことが明らかとなってきた。

病院構内が含まれる比叡山西南麓一帯は、複合扇状地が南北につらなった地形を示し、この扇状地上には縄文時代の遺跡が密集して形成されており、「遺跡群」として把握されている。ある遺跡を形成した縄文集団が一定の領域をもち、交易や婚姻などを通じて他の集団と密接な関係を保っていたことは様々な角度からの検討によって明らかになりつつあるが、遺跡群という概念は遺跡という単位とともに縄文集団の領域や集団の関係の様態を探る上で、重要な分析単位となることは間違いないだろう。具体的な遺跡群のあり方を検討する前に、最初に遺跡群把握の視点について簡単にみておこう。

まず、遺跡を群としてとらえるときに遺跡の密集の仕方および地形的地理的なまとまりに基づいて遺跡群としての把握を行なうが、これは当然ながら便宜的な作業単位の設定といった性格をもつものであるということを確認しておきたい。次に、注意すべきことは遺跡群としてとらえられる内容には、ふたつの異なった側面が含まれているということであ

る。第1の側面は時期の異なる遺跡の累積であり、第2の側面は同一年代を共有している遺跡の集合である。第1の側面からみた場合、遺跡群の形成は、ひとつの集団かどうかはともかく、ある集団の歴史的な変遷の結果の表現として、その地における集団の消長を示すということになる。第2の側面からみた場合、遺跡群は共時的な存在として、ある社会的な関係にもとづいた有機的な結合体の表現であるといえよう。共時的に遺跡を結びつけている、この社会的関係については、大きくみるとふたつの見方が呈示されてきている。ひとつは、複数の集団が相対的に独立して活動していたというものであり、他はひとつの集団が、拠点的な居住地以外に生業活動などに対応して一時的な利用地・野営地をもっており、遺跡のまとまりはひとつの集団の活動の反映であるとするものである。もちろん、こうした想定は遺跡における遺構や遺物の出土状況の吟味に基づき推定されているものであるし、また、ふたつの見方は相互に排除し合うという性格をもったものでもないから、現実には両者が組み合わさったより複雑な関係も十分想定される。

また、第1、第2の側面の関係については、第1の側面とは第2の側面である共時的な遺跡のまとまりを歴史的な展開過程のなかに投影したものにはほかならないのだから、両側面からの検討を統合することによって、ある一定地域に、一定期間残された遺跡群の構造や特質を明らかにすることができると理解するのである。いずれにしても、ある一定の地域的なまとまりのなかでとらえられる遺跡群は以上簡単に記したような視点に基づくことにより、その実態を追究してゆくことができるのではないかと考えている。

それでは以上のような視点に基づいて比叡山西南麓の縄文遺跡群について眺めてみよう。この縄文遺跡群についてはすでに泉拓良による検討がある〔泉84・85〕。その成果によれば、遺跡群は地形的なまとまりによって修学院・一乗寺遺跡群、北白川遺跡群、岡崎遺跡群の3つのまとまりに把握でき、これらは集団による移動や拡大の結果、形成されたものと解釈している。作業単位として、地形区分と遺跡の密集度に応じて、遺跡群をさらに3つの小さな地域単位に区分して把握する見方については継承しうる視点であろう。図20は泉の成果をもとに、それに最近の新たな知見を加えて作成したものである。病院構内東辺のAH19区は北白川遺跡群と岡崎遺跡群のほぼ中間的な位置にあることがわかるが、岡崎遺跡群が本調査区も含まれる聖護院から岡崎にかけて広がる扇状地上に位置していることから判断して、岡崎遺跡群を構成する1遺跡として規定してよいのではないかと考える。

岡崎遺跡群のうち、比較的内容の明らかになっているのは、本調査区の東200mの聖護院西町に位置する遺跡〔百瀬88〕である。ここでは幅0.5m、長さ6mをはかる溝状の土坑を

検出し、北白川上層式2期の土器・石器および植物遺体が出土している。狭い範囲での調査であり、これ以外に遺構はみつかっていないが、この地点が北白川上層式2期の集落の一角であった可能性は高い。一方、AH19区に廃棄されていた土器は北白川上層式1期のもので、時期差がみとめられることに注意したい。同一扇状地内で、地点をずらしながら遺跡が形成される現象は、北に隣接する北白川追分町遺跡でもみとめることができ、白川扇状地の南西端にあたる聖護院付近には後期前葉の遺跡が継続して営まれていたと想定することができる。そこで、これらの遺跡を聖護院遺跡と仮称し、土坑が検出された地点を1地点、AH19区を2地点として区別しておこう。このような遺跡をみとめることができるとすれば、次に問題となるのはその遺跡の性格であろう。とくに、隣接する地域である北白川遺跡群との関係が問題となろう。

北白川遺跡群では北白川追分町遺跡1地点で北白川上層式1期の墓域が検出されており〔中村74〕、北白川小倉町遺跡〔梅原35〕や北白川別当町遺跡〔横山・佐原60〕では北白川上層式2期の遺物がまとまってみつかっていて、後期前葉に継続的な遺跡形成がこの地域内でおこなわれていたことを推定させる。とすれば、聖護院遺跡が含まれる岡崎遺跡群と北白川遺跡群という隣接する2つの小地域に遺跡が同時に営まれていた可能性が高く、その両者の間の関係が焦点となるのである。調査地点が限られており、検出遺構も十分でない現状で両者の関係を明らかにするには資料が不足していることは否めないが、大別して次のような2つの可能性を想定することはできよう。

- (1) 岡崎遺跡群を形成した集団は、北白川遺跡群を形成した集団とは別集団に属し、この地一帯で恒常的に集落形成をおこなっていた。
- (2) 岡崎遺跡群と北白川遺跡群は同一集団によって残されたもので、一方は拠点的な集落であり、他方は一時的な利用地として、生業形態や季節に応じて反復利用された。

(1)、(2)どちらの蓋然性がより高いかを決めることは現状では困難といわざるをえないが、両遺跡群が形成された後期前葉期は比叡山西南麓の遺跡群ばかりでなく近畿全域に目を広げてみても、遺跡数あるいは遺構・遺物の質・量ともにみるべきもののもっとも多い時期のひとつであり、相対的な安定期をこの時期にみることができるともかもしれない。こうした相対的な安定性を背景にした集団の膨張を集落規模の拡大という方向にではなく、小集団の分岐という形で解決したと想定することもできる。その場合には集団の分岐という形で(1)のあり方が推定されることになる。ただし、資料的制約も大きいのでここでは結論を急ぐことはせず、今後に対する問題提起としておきたいと思う。

比叡山西南麓における縄文時代遺跡

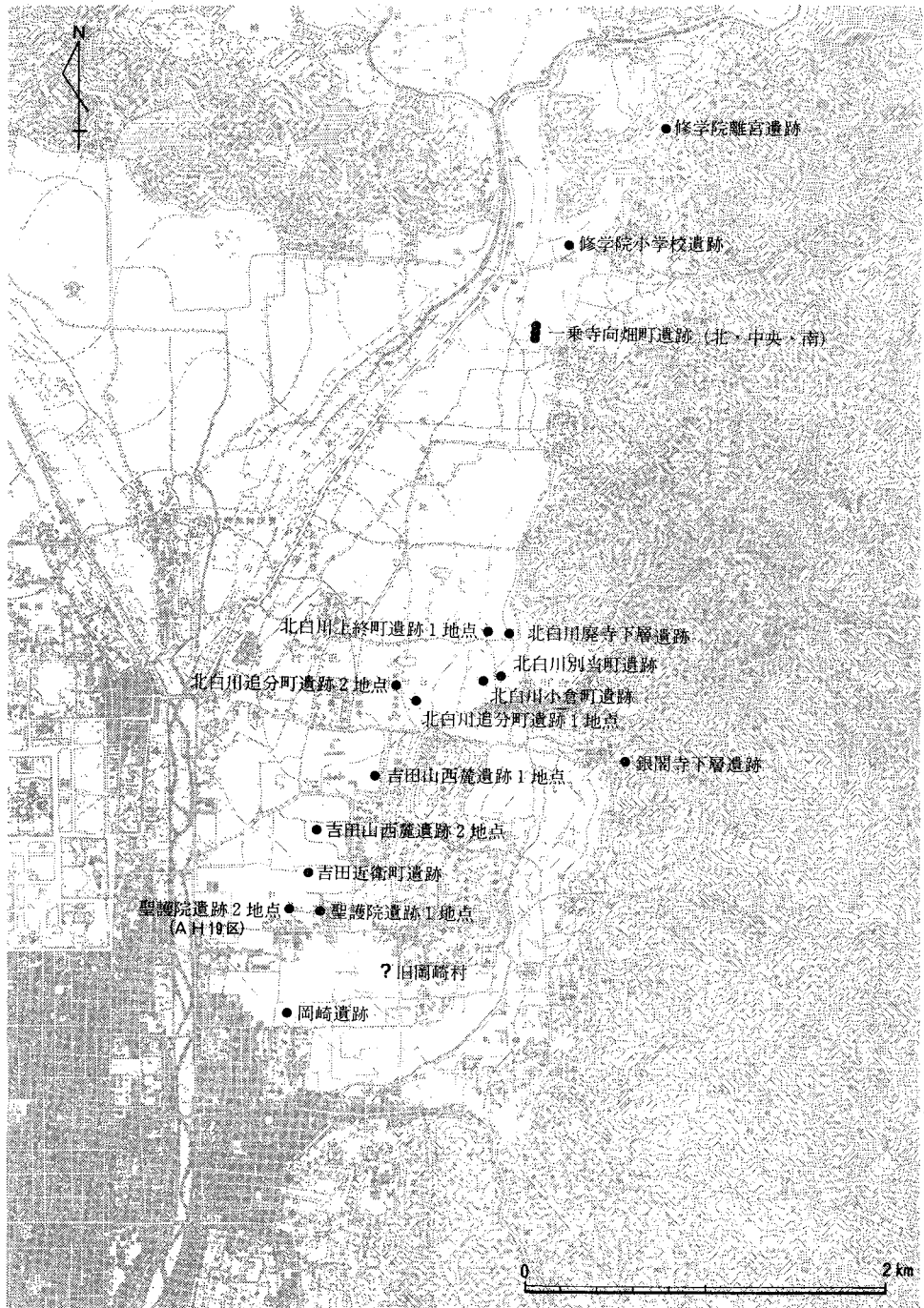


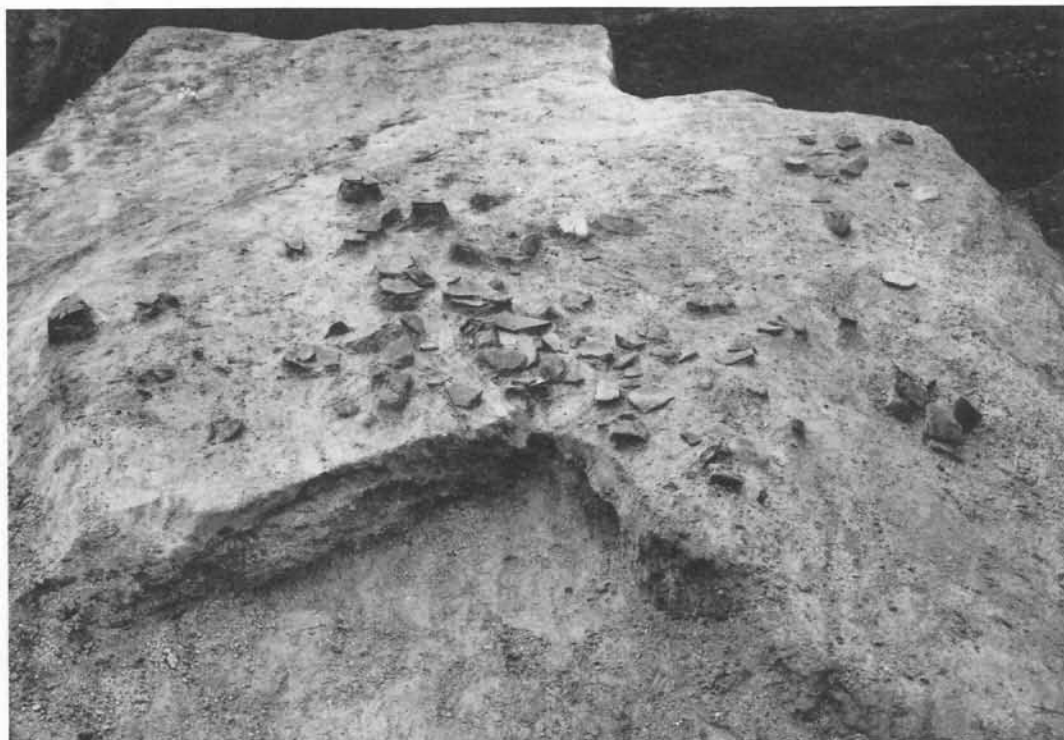
図20 比叡山西南麓の縄文時代遺跡 ([泉85]に加筆) 縮尺1/40000

病院構内の先史時代遺跡

いずれにしても、病院構内でみつかった聖護院遺跡2地点は、聖護院遺跡1地点とともに岡崎遺跡群を構成するもので、内容がよくわかっていない岡崎遺跡群のあり方を明らかにするひとつの材料となるだけでなく、比叡山西南麓で活動した縄文集団の実態を探るうえでも重要な資料となろう。今後、周辺地点の調査がすすめば、上述した遺跡の性格なども一層明確になっていくことが期待される。

〔参考文献〕

- 網谷克彦 1982年 「北白川下層式土器」『縄文文化の研究』3
- 泉 拓良 1981年 「縄文後期の土器—近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4
- 1984年 「縄文時代のムラ—近畿地方—」『縄文から弥生へ』
- 1985年 「縄文集落の地域的特質—近畿地方の事例研究」『講座考古地理学』4
- 泉 拓良・玉田芳英 1986年 「文様系統論」『季刊 考古学』第17号
- 泉 拓良・松井 章 1989年 『福田貝塚資料』（『奈良国立文化財研究所史料』第32冊）
- 五十川伸矢・浜崎一志 1989年 「京都大学病院構内A J 18・A J 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 今村啓爾 1977年 「称名寺式土器の研究(上)」『考古学雑誌』第63巻第1号
- 芋本隆裕・菅原章太・勝田邦夫 1987年 『縄手遺跡・若江遺跡の調査 —昭和61年度—』（『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要』28）
- 植田文雄 1990年 『今安楽寺遺跡』（『能登川町埋蔵文化調査報告書』第17集）
- 梅川光隆 1971年 「京都周辺の縄文時代遺跡 No. 3.4」『第24とれんち』
- 梅原末治 1935年 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第16冊
- 京大遺跡調査会（京都大学構内遺跡調査会）
- 1988年 『京都大学医学部附属病院構内の遺跡—A H 19区発掘調査現地説明会資料—』
- 久保穰二郎 1987年 「鳥取県下における後期前葉から中葉にかけての縄文土器の変遷について」『森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書』
- 佐原 眞 1961年 「京都市一乗寺縄文文化遺跡の調査」『古代文化』第7巻第2号
- 玉田芳英 1989年 「中津・福田KⅡ式土器様式」『縄文土器大観』4
- 千葉 豊 1989年 「縁帯文系土器群の成立と展開」『史林』第72巻第6号
- 1990年 「近畿北部・山陰東部の成立期縁帯文土器」『小森岡遺跡』
- 中村徹也 1974年 『京都大学理学部ノートバイオロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 浜崎一志・宮本一夫 1987年 「京都大学病院構内A F 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
- 藤永正明 1987年 『淡輪遺跡発掘調査概要報告書・Ⅶ』
- 三好博喜・肥後弘幸ほか 1989年 『志高遺跡発掘調査報告』（『京都府遺跡調査報告書』第12冊）
- 百瀬正恒 1988年 「白河街区1」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 横山浩一 1979年 「刷毛目技法の源流に関する予備的検討」『九州文化史研究所紀要』第24号
- 横山浩一・佐原 眞 1960年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部 日本先史時代



病院構内A H19区縄文土器出土状況（北から）



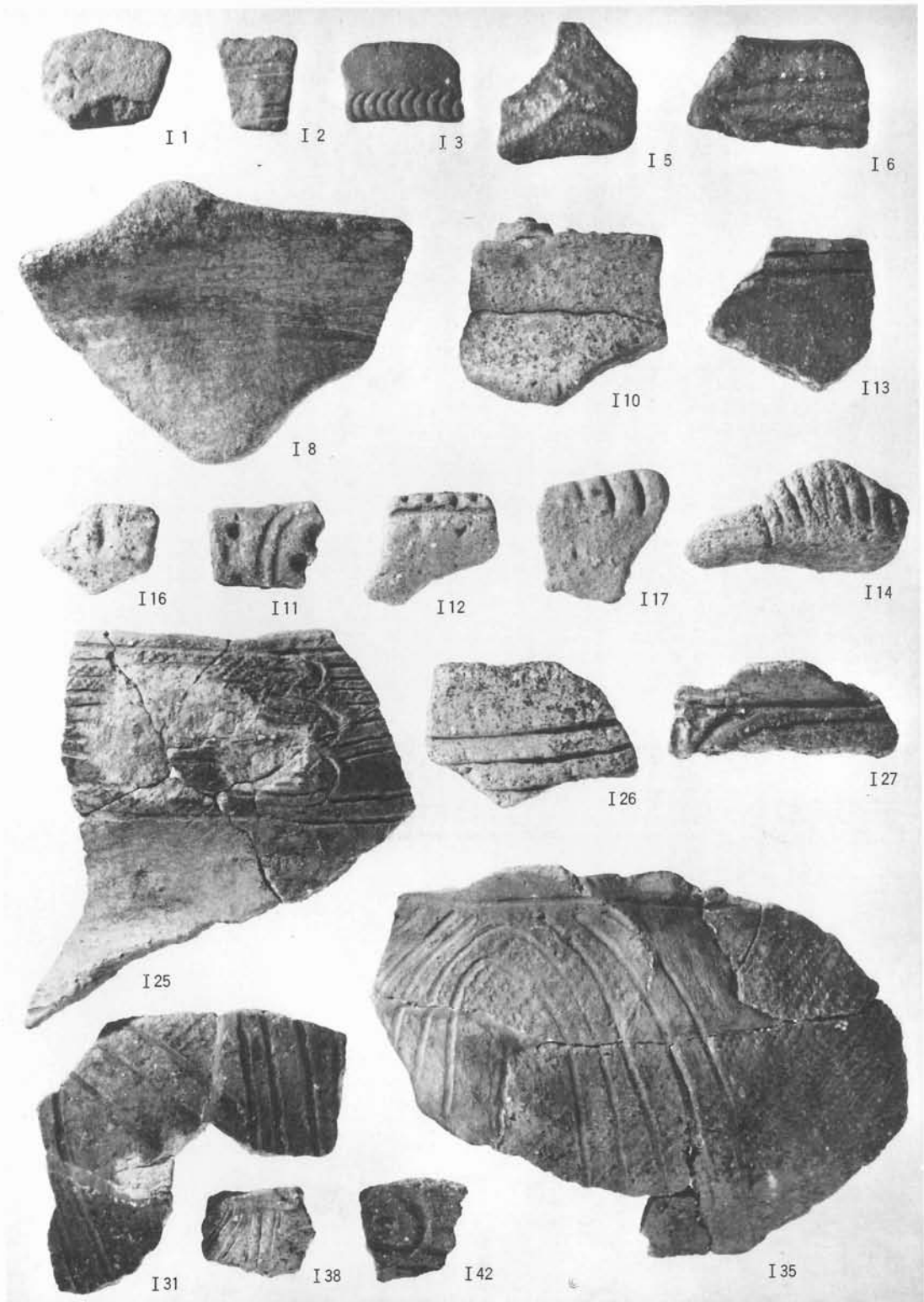
同（東から）



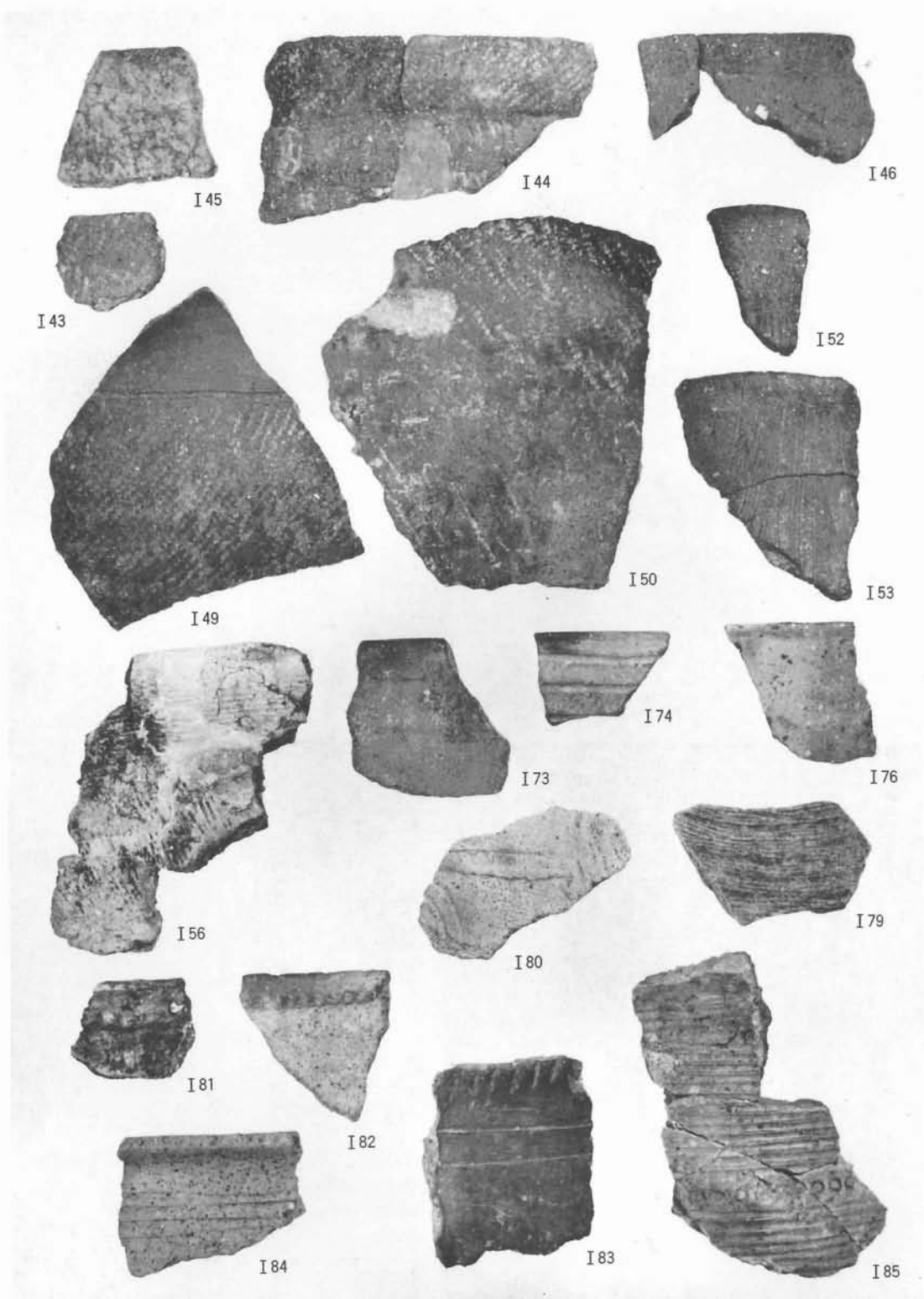
同（西から）



縄文後期の土器 (I22・I23・I61・I63・I64)



縄文早期の土器 (I 1), 縄文前期の土器 (I 2・I 3), 縄文中期の土器 (I 5),
縄文後期の土器 (I 6・I 8・I 10～I 14・I 16・I 17・I 25～I 27・I 31・I 35・I 38・I 42)



縄文後期の土器 (I 43・I 46・I 49・I 50・I 52・I 53・I 56・I 73・I 74・I 76・I 79・I 80),
縄文晩期の土器 (I 81・I 82), 弥生前期の土器 (I 83・I 85)

第4章 白河の条坊地割

浜崎一志

1 はじめに

「天狗ありなどいひし所⁽¹⁾」といわれ、鄙びた場所の代名詞であった白河（現京都市左京区吉田・岡崎一帯）の開発が進んだのは、11世紀後葉のことである。白河天皇の法勝寺の造営(1077年)を皮切りに、堀河天皇が尊勝寺(1102年)を、鳥羽天皇が最勝寺(1118年)を、待賢門院璋子が円勝寺(1128年)を、崇徳天皇が成勝寺(1139年)を、近衛天皇が延勝寺(1149年)を、つぎつぎと造営したためである。この6寺は「六勝寺^{りくしょうじ}」と総称され、「国王の氏寺⁽²⁾」としてその栄華を誇ったが、この六勝寺以外にも白河北殿・南殿などの院の御所や、公家の邸宅、および得長寿院、蓮華藏院、金剛勝院、証菩提院などの諸寺院の建立が続き、この地の様相は一変し、「京白河⁽³⁾」と洛中と並び称される白河の街区が出現した。

白河の地のこうした都市的發展にともない、洛中と同様に格子状の条坊地割が施されたと考えられている⁽⁴⁾。近衛末、大炊御門末、春日末など洛中の大路小路の名称に、「末」をつけた道路名が文献に現れることや、愛宕郡の条里が東に5〜6°振るのに対し、白河一帯では遺構の方位が六勝寺などと同じほぼ真北を示すことをその根拠とする。

しかし、白河の条坊地割の範囲、方位、造営尺、大路小路の幅員などの詳細は不明である。解明が困難な理由として、六勝寺の存続期間が短かったこと、近代に白河一帯が大規模に開発されたことなどがあげられるが、いまひとつ、整合性のある全体計画の無いままに条坊地割が施されたためである可能性を指摘したい。すなわち、白河の条坊地割は、六勝寺の造営にともなって漸次進められたもので、区画の大きさや、大路・小路の幅などに不整合な部分があった可能性がある。法勝寺が2町四方におさまらないことや、延勝寺が白河の条坊地割の中心街路である今朱雀を分断していることなどはその不整合な面を示し、また、大治2(1127)年、法勝寺の西側の大路が神楽岡まで延長されたことは、条坊地割の実施が長期にわたって行なわれていたことを裏づける。⁽⁵⁾こうした状況が白河の条坊地割の復原を困難にしていると考えられる。

本稿では六勝寺の伽藍配置の詳細な復原を論ずるのではなく、白河の条坊地割の復原に主眼をおいて考察を進める。条坊地割の復原は、文献だけでなく、近年多くの成果を上げてきた、六勝寺関係の遺構と、京都大学構内で検出した溝や道路遺構をもとに試みた。

2 白河御堂の遺構

六勝寺を中心とした白河一帯の発掘調査は、六勝寺研究会、京都市埋蔵文化財センター、奈良国立文化財研究所、京都市埋蔵文化財研究所、京都府埋蔵文化財調査研究センターなどの調査組織により実施され、大きな成果が上がっている。ここでは、白河の条坊地割復原の基礎となる六勝寺や院の御所などの遺構について考察する。

(1) はじめに法勝寺ありき

法勝寺は当初、藤原家累代の別業であった。関白藤原頼道の死後、その子の左大臣師実が白河天皇に献上し、その地に白河天皇が造営したのが法勝寺である。法勝寺は西大門を二条大路末に開き、金堂の南庇は二条大路の北辺に当たり、阿弥陀堂の南端が押小路末の北辺にあたることが指摘されている〔福山43〕。また、八角九重塔の位置は地籍図から〔西田25〕、金堂とその回廊は発掘調査〔杉山・梶川75、梶川76、辻・上村87〕により明らかにされている。

法勝寺の西辺は、^{くるまろち}車道（現在の岡崎通）を限りとする可能性が高いとされていたが、動物園医療・救護センター建設にともなう調査（図21—A地点）で検出した南北方向の⁽⁶⁾側溝がこれにあたると考えられる。東辺については、車道より東へ約270mの所（図21—B地点）で、池の東の汀線が発掘されており〔杉山ほか75〕、寺域の東西幅は2町より広く、この地点までおよんでいたことが判明した。法勝寺の東面は、他の3面のように門や築垣がなく、土手を築いただけであったことが指摘され〔福山43〕、また、「塔ノ段及池ノ内町水田低地図」〔西田25p.28〕には低湿地の中に、帯状の高地が南北に続いていたことが報告されている（図21梨地部分）。この部分が法勝寺の東を限る堤と小路にあたると考えられる。図21—⁽⁷⁾C地点における発掘調査はこの小路の存在を裏づけた。12世紀後半の遺物を大量に含む幅2.2m、深さ0.7m、断面逆台形の南北溝と、鎌倉時代の遺物を含む南北溝を検出した。この2本の溝は、心々で約9mの距離をとりながら並行するが、位置的には前述の帯状の高地の延長部分にあたり、法勝寺の東を限る小路の一部にあたると考えられる。

法勝寺の北限については冷泉小路末を限りとする福山説〔福山43〕と、冷泉小路末の北におよぶとする西田説〔西田25〕、林屋説〔林屋60〕がある。福山説は金堂・講堂・薬師堂を適当な間隔をもって配置すれば冷泉小路末を北限とすることができるとする。これに対して、林屋説は冷泉小路末を北限とすると、金堂・講堂・薬師堂の間隔が狭くなるのと、南限が押小路末よりも南まで及んでいることから、二条大路末に面した西大門を中央とし、

白河御堂の遺構

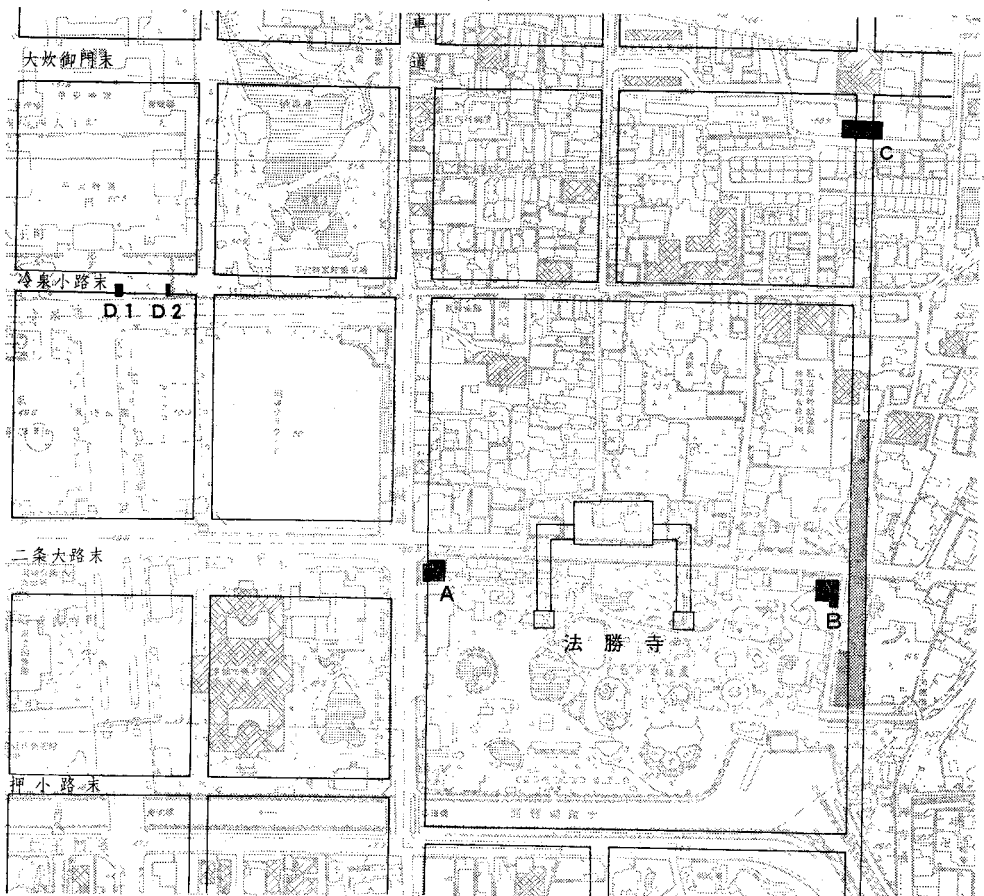


図21 法勝寺の寺域の推定図 縮尺1/5000

北限も冷泉小路よりも北におよぶとする説である。しかし、図21—D1地点の発掘調査〔梶川77b〕で冷泉小路末の延長部分にあたる東西に続く築地塀跡と、その北側の幅約2.6mの溝を検出した。D1地点の東約30mのD2地点でも同様の築地跡と溝を検出しており、築地と溝が東西に連続していることを確認している。この結果、現在の冷泉通は岡崎通（車道）を境に南北にずれているが、本来は一直線の冷泉小路末であったと思われ、したがって、法勝寺の北辺も福山説と同様に冷泉小路末であったと考えられる。

なお、D地点の遺構は築地の幅2.4m、犬走り3m、溝2.6mを測り、これを小路の幅に収めると道路部分がかなり狭くなる。当時、二条大路末を東に直行して法勝寺に御幸することは憚るべきこととされている〔福山43〕⁽⁸⁾。冷泉小路末はその迂回路として頻繁に使用されており、この道の幅が小路より広がった可能性がある。

白河の条坊地割

以上の復原結果をみると、法勝寺の東西幅は約278mと、2町+小路の幅84丈(約252m)を大きく逸脱している。南辺も押小路末よりも南にはみでており、白河の条坊地割が施行される前に法勝寺の寺域が確定されていたものと考えられる。逆に、二条大路末や法勝寺西大路(車道)、冷泉小路末が法勝寺の寺域に合わせて設定され、白河の条坊地割の起点になった可能性が高い。大路・小路の末が洛中に比して、ずれていることがこれを裏付ける。

(2) 尊勝寺の寺域の設定

尊勝寺の比定地において本格的な調査が実施されたのは、1959年のことで京都会館建設にともなうものであった〔杉山・岡田61〕。以後の多数の調査により、金堂、回廊、西の築地塀、観音堂、五大堂、東塔、西塔などの位置を確認した。ここでは伽藍配置の詳細な検討は省略し、寺域について検討したい。

尊勝寺の寺域の西辺については、図22—A地点で検出した溝と築地跡と思われるマウンド状の遺構がこの西辺にあたる〔梶川77a〕。1975年に、六勝寺研究会が疏水と並行する冷泉通の北側で検出した築地跡と考えられる遺構も、尊勝寺の西辺を限るものであろう。南辺は「承保勘文」から二条大路北辺が法勝寺金堂の南庇にあたることが指摘されているが〔福山43〕、二条大路末が二条大路の延長線上にあるかどうかは確証がなく、また、二条大路末の遺構も検出しておらず、二条大路末の北辺すなわち尊勝寺の南辺の位置は不明である。

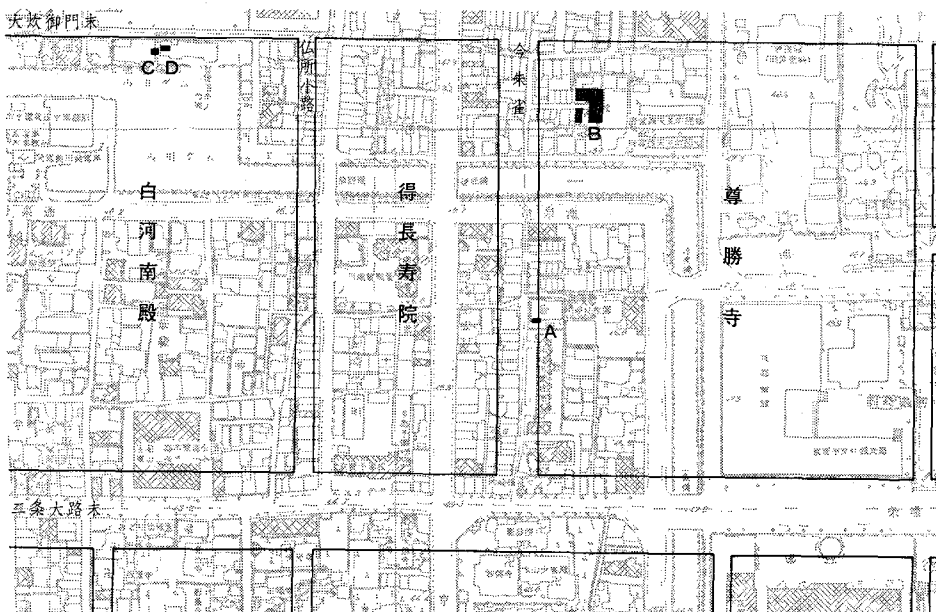


図22 尊勝寺の寺域の推定図 縮尺1/5000

白河御堂の遺構

尊勝寺の北辺については、図22—B地点で検出した幅約3.5m、深さ1.3~1.4mの断面逆台形の溝が、尊勝寺の北を限る可能性がある。しかし、この位置に大炊御門大路末を想定すると図22—C地点と図22—D地点〔上村83〕で検出した基壇をもつ平安後期の建物が、大路の中央に建てられていたことになり、北辺と推定するには難がある。

尊勝寺の西辺から法勝寺の西の築地までの距離が約534mを測り、4町の街区がちょうど納まることから、尊勝寺の東辺は西辺から2町(80丈)と小路(4丈)の位置にあると考えられる。なお、4町の街区がちょうど納まることから、尊勝寺の計画段階で条坊地割が意識され、将来の寺院などの造営に備えたものであったと考えられる。

(3) 白河北殿と白河南殿

白河南殿は白河法皇が、法勝寺の西方に造営したもので、もとは覚円大僧正の房であった。何度か修造がおこなわれ、「泉殿御所」「白河泉殿」などとも称されていたが、南殿の中に建立された2棟の九躰阿弥陀堂に対し、「蓮華蔵院」と称されるようになった。この白河南殿の建物と考えられる遺構はいくつか検出されているが、寺域を示す遺構は検出されていない。しかし、現在も東西・南北がほぼ2町の聖護院蓮華蔵町(図23梨地部分)の地名が残っており、蓮華蔵院を含む白河南殿の範囲がこれにあたると考えられている〔杉山62〕。

白河北殿が造営されたのは元永元(1118)年のことである。『保元物語』に「大炊御門ヨ

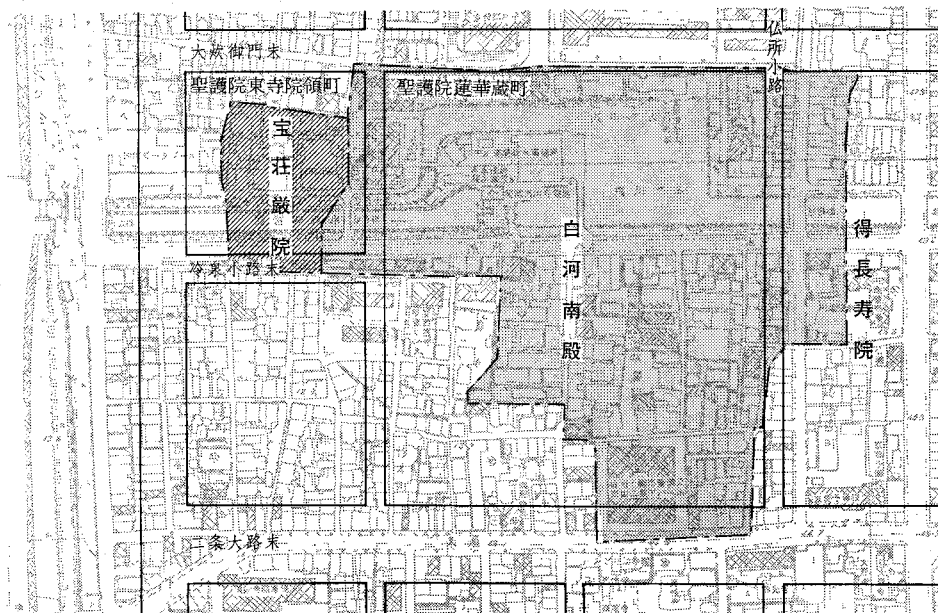


図23 白河南殿と宝荘殿院の推定図 縮尺1/5000

リハ北、川原ヨリ東、春日ヲカケテ作タル御所也⁽¹¹⁾」とあり、その範囲は南は大炊御門末、北は春日末で南殿の北にあったと考えられているが、大治4（1129）年の改造で中御門末まで拡張された可能性が指摘されている〔川上77〕。

（4）宝荘厳院と栗田の宮

宝荘厳院の建立は長承元(1132)年のことである。九躰阿弥陀堂や寝殿のあったことが知られている。宝荘厳院の位置については、この寺領が東寺に伝領されたことから、白河南殿の比定地のすぐ西にあたる聖護院東寺領町(図23斜線部分)がその旧地に比定されている〔杉山62〕。こうした状況を裏づけるものに、「宝荘厳院用水事」⁽¹²⁾という延文元(1356)年の絵図がある(図24)。この図は宝荘厳院の農民が、鴨川の上流から栗田宮のすぐ西を経由して、農業用水を引き入れていた様子を示す。延文元(1356)年ごろに洪水が続き、栗田宮が洪水被害をこの用水によるものとし、相論となった際のものである〔西岡76〕。

この図を見ると、大炊御門末の南と北に宝荘厳院と記され、この時期の宝荘厳院の領地は大炊御門末よりも北の春日末までおよんでいたことや、宝荘厳院が鴨川に面していたことがわかる。

宝荘厳院の北の栗田宮は、保元の乱に敗れ、讃岐で流刑死した崇徳院の霊を鎮めるため、後白河法皇が寿永3（1184）年に創建したものである。この宮は嘉禎3（1237）年に一度遷座したうえ、応仁の乱後に荒廃し、その後やや離れた所に再び祀られたため、その旧地の比定に混乱が生じている。当初の社地を『吉記』⁽¹³⁾は春日河原の白河北殿の跡とし、『源平盛衰記』⁽¹⁴⁾は春日末の北、河原の東とする。白河北殿の位置から、栗田宮の社地は春日末の北か南で、河原に近い所といえる。しかし、白河北殿の跡地には鳥羽法皇追善のための千躰阿弥陀堂が、栗田宮よりさきに造営されており⁽¹⁵⁾、また、白河北殿より河原よりに比定されている宝荘厳院も、少なくとも承久3（1221）年の火災までは堂舎が残っていたことから、栗田宮の初期の社地は春日末の北で、河原に近い所

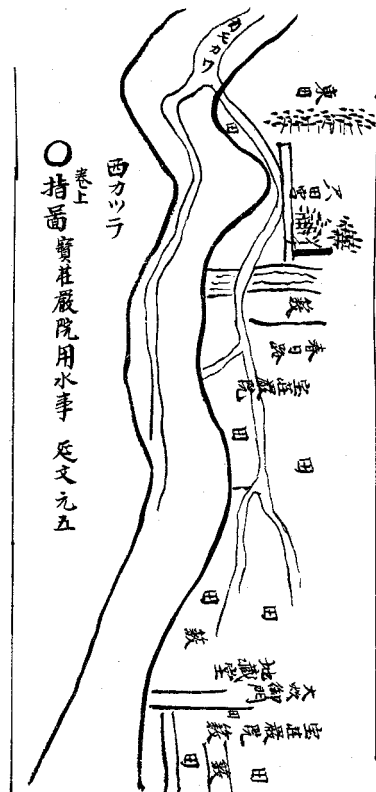


図24 宝荘厳院用水事
（『東寺古文零聚』所収）

と考えられる。

嘉禎3(1237)年、栗田宮が鴨川に近く、洪水の被害を受けやすかったため、やや東へ遷座した。⁽¹⁶⁾図24は遷座後の栗田宮の様子を示している。この図を見ると、栗田宮は春日末の北にあり、東へ遷座したというものの、その位置は鴨川に近く、距離的にはあまり動いていないことがわかる。また、この訴訟に関連するものとして宝莊嚴院の所司らが、以前のように用水路の設置を認めるように訴えたときの文書がある。⁽¹⁷⁾このなかで栗田宮の洪水被害が用水路によるものではないことを「去今兩年之洪水者、越河原大堤、浸東西高岸畢、必不限彼一所」と述べている。この文書からも栗田宮は河原の大堤より東であったものの、一段高くなっていた高岸より西にあったことがわかる。このほか、天理図書館吉田文庫の『栗田宮文庫』に、寿永3(1184)年の「栗田宮御敷地境内事」、応永33(1426)年の「栗田宮神領所領目録」、嘉吉元(1441)年の「栗田宮々地四至目録」がある。これらの文書は栗田宮の北を中御門大路、南を大炊御門、東を女院高岸、西を河原とし、南限以外は図24とよく一致している。北限を中御門末、西限を河原とすることに異論はない。東限の女院高岸は、前述の洪水で浸水した高岸と同じものと思われる。なお、病院構内で医療技術短期大学部校舎新営にともない実施した発掘調査で、平安中期の高野川系旧流路の護岸を検出している〔岡田・宇野78〕。女院高岸は少なくともこの発掘調査地点より西と考えられる。

以上の結果から、嘉禎の遷座は栗田宮の敷地内を移動した程度にとどまるものと考えられる。そして、栗田宮は創建当初も嘉禎の遷座後も、春日末の北、中御門末の南で、鴨川の堤防と、本来の河岸であった高岸のあいだの後背低地にあったと考えられる。度重なる洪水被害もこうした状況を裏づける。

3 京都大学構内で検出した遺構

(1) 教養部構内A P22区溝S D10

教養部構内A P22区(図25—A地点、図26上段)で道にともなう溝S D10、四脚門S B2、柵S A20を検出した。S D10は幅2 m、深さ1.2 mの溝で、発掘区内での検出長は37 mにおよぶ。埋土に13～14世紀の遺物を含む。この溝S D10の東では13～14世紀の土壇墓を、西では四脚門のある柵と、堀で囲まれた邸宅を検出し、この溝を境に土地利用形態がまったく異なることが判明し、溝S D10と四脚門S B2の間に南北の道があると判断した〔五十川・飛野84〕。この道の直上で同じ方位をもつ近世の道S F1を検出している。この道は『増補再板京大繪圖』(寛保元(1741)年刊)や、仮製2万分1地形図(明治25年製)にも記載

されており、この道は古代末以来、近代まで
 連綿と存続していたことがわかる。

この南北の道が尊勝寺の東側を通る道の延長部分、すなわち今朱雀にあたりと考えられる。図25—C地点(図22—A地点)の築地と側溝跡と、溝SD10を結ぶと、方位を真北から東に約 $0^{\circ}40'$ 振った軸線を得ることができる。図25—B地点の調査で、南北約15mにわたって検出した溝S2〔南はか89〕はこの直線上に位置し、この道の存在を裏付ける。溝S2はやや削平を受けたものか、幅1.1m、深さは0.1~0.2mであり、埋没した時期は13世紀後半と考えられている。

なお、四脚門SB2と溝SD10の間は約7mであるが、邸宅にともなう遺構は13~14世紀のものであり、巷所として道が狭められたと思われる。道路の西半に井戸が掘られたり、溝が埋まったのもこの時期と考えられる。

(2) 本部構内AT27区溝SD3と道SF3

本部構内AT27区の調査(図25—D地点、図26中段)で、溝SD3と道路状遺構SF3を検出した〔五十川81〕。SD3は幅2.5m、深さ1.5m、断面V字形の溝で、発掘調査区内では真北からやや東にふるが、北約110mの地点でこの溝の延長部分と思われる溝を検出しており、ほぼ真南北の溝と考えられている。溝の廃絶は上層の遺物から13世紀と考えられる。また、この溝の西約11mの所で、東西1.4~2.2m、南北8.6mにわたって路面と考えられる堅い面を検出した。この面上には幅

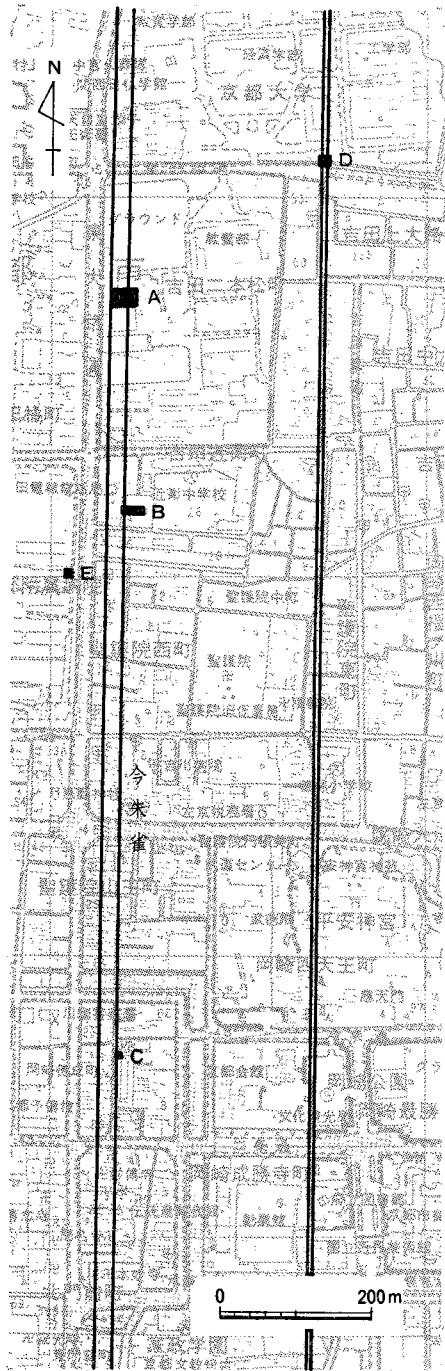


図25 白河の条坊の南北路 縮尺1/10000

京都大学構内で検出した遺構

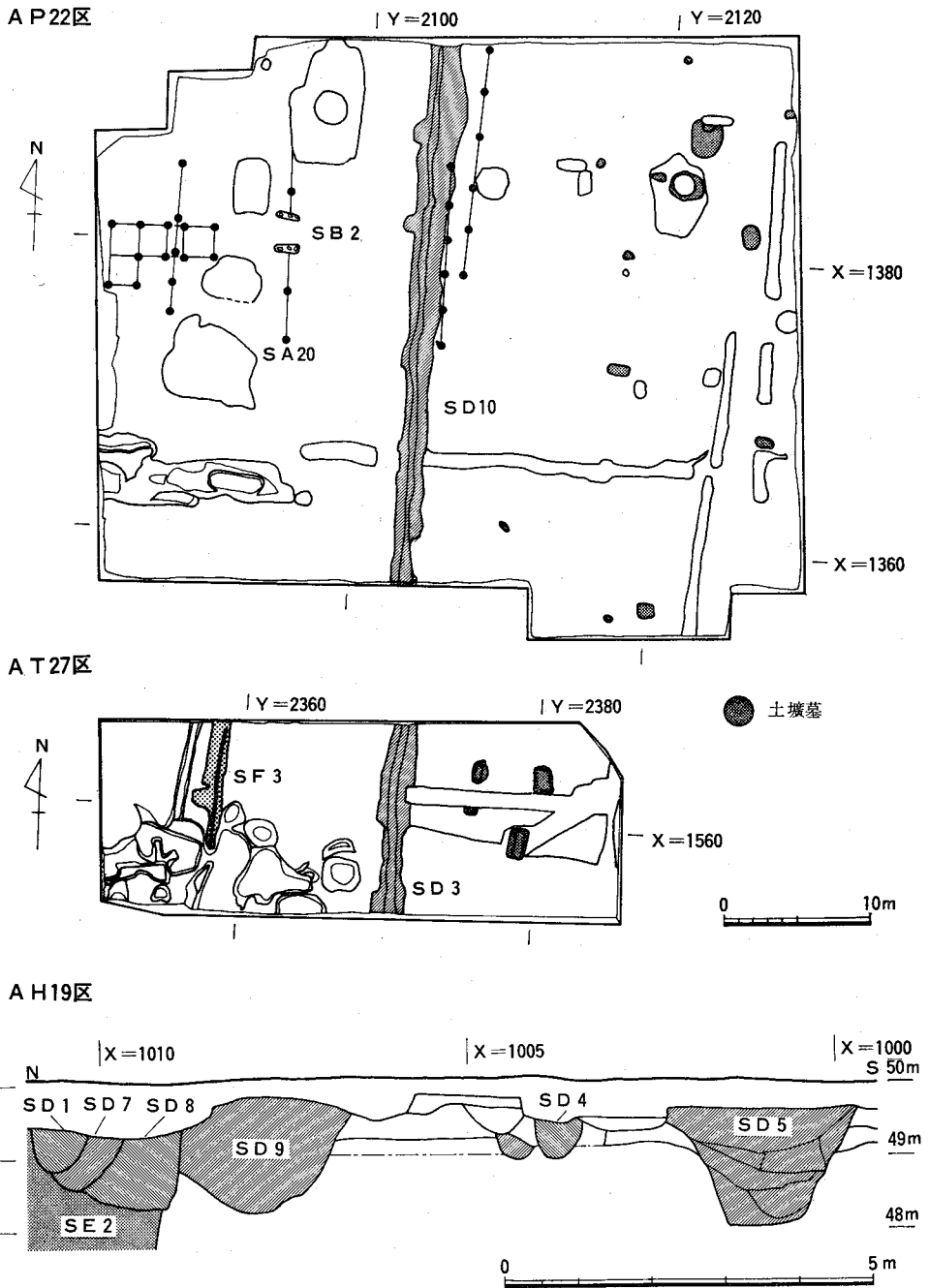


図26 京都大学構内検出の遺構

0.2mの轍と思われる細い溝が南北に走る。

この南北の道が、方位、今朱雀との距離などから、今朱雀の東2本目の南北路、すなわち尊勝寺の東を限る道の延長部分にあたると考えられる。

図25—D地点で検出した南北路と尊勝寺の東側の道を結ぶと、今朱雀と同様に方位を真北から東に約 $0^{\circ}30'$ 振った軸線を得る。ところが本部構内の南では、この線上に現在の道が約1kmにわたって続く。この道は、『新撰増補京大繪圖』(元禄4(1692)年刊)をはじめ、近世の古図によく描かれている道であり、また、D地点でも道路SF3の上層でわずかに位置は異なるものの、近世の道路遺構を検出しており、今朱雀と同様に古代末から現代まで、道路として使用されてきたと考えられる。

(3) 病院構内AH19区溝SD5とSD9

京都大学病院構内AH19区の調査(図25—E地点)〔京大遺跡調査会88〕で、東西に走る7本の溝を検出した(図26下段)。溝SD1が江戸後期の遺物を含むほかは、14世紀の遺物を含む。なかでも溝SD5と溝SD9は、ともに幅2.0m、深さ0.7m、底幅1.1mの断面が逆台形を呈する丁寧なつくりの溝である。溝が集中することや、この位置に旧吉田村と旧聖護院村の字境界が一致することから、これらの溝は道路にともなうものと考えている。道は『元禄京都 洛中洛外大絵図』⁽¹⁹⁾にも描かれており、前述してきた道と同様に古代末以来の道が踏襲されていたものと考えられる。

4 造営尺と方位

以上のような遺構をもとに白河の条坊地割の復原を試みる。

(1) 造営尺について

平安京の造営尺については諸先学の多数の論文があるが、結果的には杉山信三の提唱した0.987現尺(約0.2991m)〔杉山64〕で、大きな齟齬を生じない。白河の条坊地割の造営尺については、2次にわたる法勝寺金堂の調査から算出した0.303m〔梶川77c〕や、尊勝寺の五大堂に比定される遺構から算出した0.3014m〔工楽・藤村73〕、尊勝寺の九躰阿弥陀堂の東西規模 $25.56\text{m}=85\text{尺}$ から算出した0.3007m〔上村81〕など、個別の遺構から推定されているだけであるが、いずれにしても現尺から大きくはずれるものではない。

こうした造営尺を念頭におきながら条坊の復原を試みる前に、条坊地割の基準線となる築地の中心線と側溝の位置関係について述べる。『延喜式』⁽²⁰⁾には、平安京の東西・南北の幅や、大路・小路の規格などが記されている。その中で大路は幅が8丈でも10丈でも「自

造営尺と方位

「垣半至溝邊各八尺 垣基三尺 犬行五尺 溝廣各四尺」、小路は「自垣半至溝邊各五尺五寸 垣基二尺五寸 犬行三尺 溝廣各三尺」とある。築地の中心線から「犬走り」をはさんで、溝の中心線までなら、大路で1丈、小路で7尺であったことがわかる。白河の大路・小路の規格が平安京と大きく異なっていたとは考えられず、また、条坊全体を検討するにはあまり大きな影響をおよぼさないで、溝から犬走りと築地塀の中心線までの距離は延喜式の数値に準拠した数値、すなわち大路で1丈、小路で7尺として条坊地割の復原を試みる。

前述した白河の条坊地割にともなう遺構と考えられるものから、条坊の造営尺を算出してみたい。まず、溝SD3(図25—D地点)と溝SD10(図25—A地点)の間隔約267mが、2町+小路2本(88丈)とすると、1尺=0.3034mとなる。また、尊勝寺の西の築地(図22—A地点)と法勝寺の西を限る道の東側溝(図21—A地点)の距離に法勝寺西側の築地までの距離を加えると、都市計画図(1/2500)の上で約534mを測る。街区を40丈四方とし、法勝寺の西の道を8丈の大路とすれば180丈、小路とすれば176丈がこれにあたり、1尺=0.2967mと1尺=0.3034mをえる。法勝寺の西を限る道が大路であるか、小路であるかは不明であるが、大路であるなら冷泉小路末と同様に変則的な町割がおこなわれ、大路が街区の部分を削り込んでいた可能性もある。

南北方向では溝SD5(図26)の南に築地を想定し、図21—C1地点の築地と距離を測ると約575mをえる。この間を4町+大路2本+小路2本(188丈)とすると、1尺=0.3059mとわずかに長い数値となるが、前述したように冷泉小路末は4丈より広がったと考えられるが、仮に2丈広がったとすると1尺=0.3026mを得る。

以上のような結果から、白河の条坊の造営尺は現尺と同じ0.303mに近い値をとると考えられる。いずれにしても、造営尺を算定する基準となり得る遺構の発見例が少なく、また、大路・小路や街区の幅に、条坊地割としての整合性を欠いた部分があった可能性もあり、今後の発掘調査が待たれる。

(2) 方位について

個別の遺構の方位は、法勝寺金堂の真北から西に $0^{\circ}11'40''$ 〔梶川77c〕や、尊勝寺九輪阿弥陀堂の真北から東に $0^{\circ}59'59''$ 〔上村81〕、尊勝寺五大堂の真北から東へ $0^{\circ}22' \sim 0^{\circ}42'$ 〔工楽・藤村73〕、尊勝寺金堂の回廊付近は真南北、東塔は真北から西に $2^{\circ}50'20''$ 振る〔杉山・岡田61〕などの報告がある。検出範囲の狭いことや、遺構の年代差によって多少の差があることなどから、わずかずつ違った方位が示されている。

白河の条坊地割

ここでは図25—A地点とC地点や、D地点と尊勝寺の東辺のように、南北約1 km離れた地点を基準として算出した。結果としては、真北から東に $0^{\circ}30' \sim 0^{\circ}40'$ 偏った方位がとられたものと推定できる。

(3) 条坊地割の範囲について

白河の条坊地割の骨格は、今朱雀を中心に東西に4町ずつとし、南北路は今朱雀と法勝寺の西の道を大路とし、各町間の道を小路とし、これに法勝寺が東につきでていたとする福山敏男の案〔福山43〕で大きな齟齬をきたさない。

大治2(1127)年、法勝寺の西側の大路が神楽岡まで延長されたことは前述した。このことから白河の条坊地割が、北は吉田山のあたりまでおよんでいたことは確実視されていたが、図25—D地点の溝が条坊地割の遺構と判明したことから、白河の条坊地割は洛中と同様に、一条大路までであったものと考えられる。南については今後の課題である。

5 おわりに

以上のような調査結果や考察のほかに、宇境界や古道も考慮し、白河街区の復原図を作成した(図版7)。基本的には、南北の道は4町おきに、東西の道は2町おきに大路がある洛中と同じ型式をとっていたと考えられる。ただ、条坊地割を施す前に法勝寺があったため、法勝寺西大路や冷泉小路末などにやや変則的な部分が生じたほか、全体としても洛中よりやや北によったものになったと考えている。条坊地割を意識して町割を始めたのは法勝寺造営以後で、尊勝寺の造営以前のことであろう。

なお、この図は方角地割の基本型を示したもので、六勝寺や院の御所などの占地の詳細については今後の課題としたい。

本稿作成にあたっては、梶川敏夫氏(京都市埋蔵文化財センター)、上村和直氏・堀内明博氏(京都市埋蔵文化財研究所)をはじめ、多くの方々の御教示を賜わった。末筆ながら、各位に謝意を表します。

〔注〕

- 1 『栄華物語』巻三十九 布引の瀧(『日本古典文学大系76』所収)
- 2 『愚管抄』巻四「白河ニ法勝寺タテラレテ、國王ノウヂデラニコレヲモテナサレケルヨリ、代々ミナコノ御願ヲツクラレテ六勝寺トイフ白河ノ御堂、大伽藍ウチツヅキアリケリ」(『日本古典文学大系86』所収)
- 3 『平家物語』巻七維盛都落「京白河に四五万間の在家、一度に火をかけて皆焼拂ふ。」(『日本古典文学大系33』所収)
- 4 白河街区に関する考察は、古くは森幸安の「中古京師内外地図」(1748年)にはじまり、おもなも

参 考 文 献

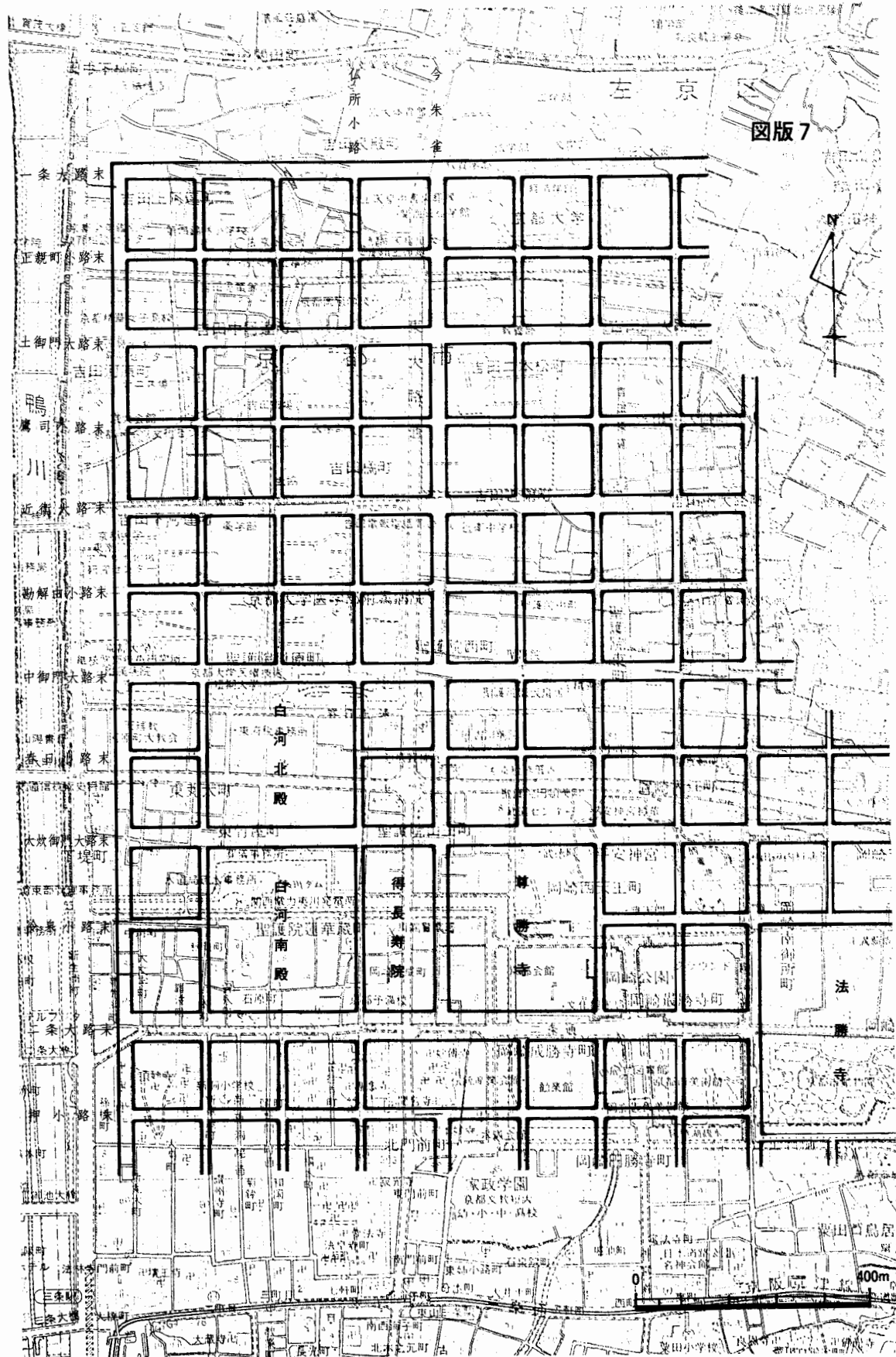
- のだけでも、「六勝寺の位置について」〔福山 43〕,「白河御堂」〔杉山 62〕,「六勝寺と鳥羽殿」〔村井 71〕,「京都大学構内遺跡と京・白河」〔岡田 79〕,「六勝寺の伽藍とその性格」〔清水 85〕などがあげられる。
- 5 『鯨珠記』大治 2 (1127) 年 7 月 10 日条「法勝寺西門ヨリ神樂岡ニ至ル大路成ル」(『史料綜覧』収所)
 - 6 京都市動物園医療・救護センター施設新築工事に伴う発掘調査で検出したもので、京都市埋蔵文化財センターの梶川敏夫氏にご教示頂いた。
 - 7 RITZ OKAZAKI 新築工事に伴う発掘調査で、京都市埋蔵文化財研究所の堀内明博氏にご教示頂いた。
 - 8 『明月記』建保元 (1213) 年 4 月 25 日条に「二條東古米被憚路也」とあり、二条大路末を東に直行することは、憚るべきこととされていた。『中右記』康和 4 (1102) 年 7 月 20 日条には、「經大炊御門、東洞院、二條大路、并御願寺西北東大路、従法寺西大門」とあり、堀河天皇は法勝寺行幸の際に尊勝寺の西、北、東大路を迂回している。
 - 9 昭和 62 年度に実施された店舗増築工事に伴う調査で検出した溝で、京都市埋蔵文化財センターの梶川敏夫氏と京都市埋蔵文化財研究所の上村和直氏に御教示を頂いた。
 - 10 京都市埋蔵文化財研究所の堀内明博氏に御教示頂いた。
 - 11 半井本『保元物語』「左大臣殿上洛の事」
 - 12 江戸時代の国学者伴信友が『東寺百合文書』から写した『東寺古文零聚』に収める。
 - 13 『吉記』寿永 3 年 4 月 15 日条「崇徳院、宇治左大臣、爲崇靈神、建仁祠、有遷宮、以春日河原爲其所、保元合戦之時、彼御所跡也」(『史料大成』所収)
 - 14 『源平盛衰記』彌卷 第四十一 元暦元 (1184) 年 4 月 15 日条「崇徳院遷宮あり。春日が末北河原の東也。此所は大炊殿の跡、先年の戦場也。」
 - 15 『百鍊抄』平治元 (1159) 年 3 月 22 日条「白河千鉢阿弥陀堂供養。大炊御門北。讃岐院御所。保元戦場爲灰燼之跡。佛者鳥羽院令造立給。爲彼御追福也。」
 - 16 『百鍊抄』嘉禎 3 (1237) 年 4 月 27 日条「栗田宮遷坐東方地。本所近河邊。依有洪水恐所奉遷也。」
 - 17 「東寺百合文書ヶ函 五十九之六十二」
 - 18 栗田宮の社地は上西門院御領であった(『吉記』寿永 3 (1184) 年 4 月 15 日条)。女院高岸の名もこれに由来するものか
 - 19 慶應義塾大学図書館蔵(白石克編『元禄京都 洛中洛外大絵図』1987 年所収)
 - 20 『延喜式』卷四十二「左右京戦」(『国史大系』第拾参卷所収)

〔参考文献〕

- | | | |
|------------|--------|--|
| 五十川伸矢 | 1981 年 | 「京都大学本部構内 A T 27 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和 55 年度』 |
| 五十川伸矢・飛野博文 | 1984 年 | 「京都大学教養部構内 A P 22 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和 57 年度』 |
| 井上満郎 | 1989 年 | 「院政期における新都市の開発」『中世日本の諸相 上』 |
| 上村和直 | 1981 年 | 「六勝寺跡 A・B 調査区」『六勝寺跡発掘調査概要 昭和 55 年度』 |
| | 1983 年 | 「白河北殿跡」『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 56 年度』 |
| 岡田保良 | 1979 年 | 「京都大学構内遺跡と京・白河」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和 53 年度』 |
| 岡田保良・宇野隆夫 | 1978 年 | 「京大病院遺跡 A F 14 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和 52 年度』 |

白河の条坊地割

- 梶川敏夫 1976年 「法勝寺金堂跡第Ⅱ次発掘調査概報」『京都市埋蔵文化財年次報告 1975』
 1977年 a 「得長寿院跡推定地発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告 1976—Ⅱ』
 1977年 b 「尊勝寺推定地第Ⅲ次発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告 1976—Ⅱ』
 1977年 c 「法勝寺跡」『仏教芸術』115号
- 川上 貢 1977年 「京都大学構内における史跡の文献的考察」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 木村捷三郎・畑三樹徳・上原真人 1975年 「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う法勝寺跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告 1974—Ⅱ』
- 京大遺跡調査会(京都大学構内遺跡調査会)
 1988年 『京都大学医学部附属病院構内の遺跡—A H 19区発掘調査現地説明会資料—』
- 工楽善通・藤村 泉 1973年 『尊勝寺跡発掘調査概報』
- 清水 擴 1985年 「六勝寺の伽藍とその性格」『建築史学』第5号
- 杉山信三 1962年 『院の御所と御堂 一院家建築の研究一』(『奈良国立文化財研究所学報』第11冊)
- 杉山信三 1964年 「平安京の造営尺について」『史迹と美術』第342号
- 杉山信三・岡田茂弘 1961年 「尊勝寺跡発掘調査報告」『奈良国立文化財研究所学報』第10冊
- 杉山信三・梶川敏夫 1975年 「法勝寺金堂跡発掘調査概報」『京都市埋蔵文化財年次報告 1974—Ⅱ』
- 西岡虎之助 1976年 『日本荘園絵図集成 上』
- 西田直二郎 1925年 「法勝寺遺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊
- 林屋辰三郎 1960年 「法勝寺の創建」『歴史における芸術と社会』(『古典文化の創造』1964年所収)
- 福山敏男 1943年 「六勝寺の位置について」『美術史学』81・82号
 1977年 「中世の神社建築」『日本の美術』No. 129
- 南 博史・定森秀夫・植山 茂・野口 実 1989年 『吉田近衛町遺跡』(『京都文化博物館調査研究報告』第4集)
- 村井康彦 1971年 「六勝寺と鳥羽殿」『京都の歴史 2』
- 辻 祐司・上村和直 1987年 『法勝寺跡発掘調査概報 昭和61年度』



白河の条坊地割の復原案

第5章 中世白河の鑄造工房

五十川伸矢

1 はじめに

これまでの京都大学吉田キャンパスの発掘調査によって、いくつかの鑄造関係の遺跡が発見されてきた。その地点は教養部構内から医学部構内にわたる一帯であったが、病院構内A J 19区の発掘調査では、鑄型を中心とする鑄造関係の遺物が出土し、鑄造遺跡は病院構内北半にいたる地域にまで分布していることが明らかになってきた。これによって鴨東白河の地で鑄物生産に従事した工人が、地点をすこしずつ変えながら古代から中世にかけて生産をおこなっていたことがわかりつつある。病院構内A J 19区の発掘調査で出土した鑄造関係の遺物の概要はすでに紹介し、京都大学吉田キャンパス一帯で生産をおこなった古代・中世の鑄造工人たちについて検討している〔五十川88b〕。ここであらためてA J 19区出土の鑄造関係の資料を解説して、中世の鑄造技術を検討し、鴨東白河の鑄造工人の確実な作品を紹介しつつ、中世の生産状態について再考してみたい。

京都大学構内の鑄造に関する遺跡は、図28のように分布しており、各遺跡の状況に関しては、それぞれの報告を参照されたい〔五十川・飛野84 pp.16-22, 五十川88a pp.15-17, 浜崎90 pp.11-12〕。このうち、教養部構内のA P 22区では、平安中期にさかのぼる鑄造工房を検出し、梵鐘鑄造のための土坑、鏡の鑄型、溶解炉の残片などを発見した。この工房では、大型の青銅鑄物を継続して生産していたことが判明しており、出吹きではなく、平安京の東辺に存在した重要な鑄物生産工房であることが確実である。

これに対し、A P 22区の西南に位置する医学部構内のA N 18区・A L 20区、病院構内のA J 19区では、中世の前半に位置づけられる鑄造工房が存在したことを裏づける遺構や遺物を発見している。これらの鑄造遺跡では、鉄鐘を鑄造したA N 18区のS X 13を除いて、明確な鑄造の場としての遺構を確認することができず、鑄型や炉壁が集中して発見されるという状況を示している。すなわち、A P 22区のように大型品を製作した形跡がみとめられず、これらの中世前期を中心とする遺跡では、以下で述べるように、青銅鑄物の小型品を中心に生産をおこなったものと考えなければならない。以上のように、古代のものと中世のものとは、生産のありかたに差異があるものとする。本稿では、この中世の遺跡に関して、中世京都の鑄造生産をながめつつ検討を加えることにする。

2 中世白河の鑄造工人の生産技術

まず、A J 19区で出土した鑄型や坩堝などの鑄造関係の遺物を図27に示して説明し、中世白河の鑄造工人の生産を特徴づける技術について考えることにしたい。

(1) A J 19区出土の鑄造関係の遺物 (図版 8, 図27)

Ⅱ 1～Ⅱ 3は椀状の形態をとる器物の鑄型と思われる。Ⅱ 1・Ⅱ 3には、真土が少し残っているが、細かい形状を復原することはむずかしい。Ⅱ 2には真土が付着しておらず、あるいは、真土を塗り付ける前の粗型ではないかと考えた。全体に酸化焼成されており、内面は回転による撫での痕跡を残し、外面は粗く飽磨きして仕上げている。Ⅱ 1・Ⅱ 3も、こうした粗型に真土を塗り付けて作成したものと思われる。これらは、あるいは医学部構内A L 20区で出土している六器の鑄型などに類似するものではないかと考えられる。

Ⅱ 4・Ⅱ 5は鏡の鑄型である。Ⅱ 4は小片で、その形状を明確にしがたいが、Ⅱ 5は製作技術を知ることができる。まず、酸化焼成した直径14cm、厚さ2.5cmの円形の粗型を用意し、その上に厚さ5mm程度に真土を塗って、凹凸をつけたようである。真土にはL字状の凹線を刻み、方形の鏡の縁部をなすものと思われる。中央に穴があり、それを真土で丁寧に埋めている。この穴は、鳥目とりめを設置するための穴とみるべきである。外側にむかって開く湯口がつくられている。Ⅱ 6は坩堝。口縁部の周辺には乱雑に鉍滓が付着している。

Ⅱ 7・Ⅱ 8は櫛羽口。Ⅱ 8の先端には、鉍滓が付着している。

以上の遺物は、近世中ごろに大規模な土取り作業をおこなった跡の埋土のなかに含まれていたものであるが、この埋土中には12世紀から14世紀前葉ごろにかけての遺物が多量に含まれているため、出土した鑄型も、ほぼその時期のうちに該当するものとみななければならない。

同様の状況で鑄型が出土した遺跡として、この病院構内A J 19区の北側約100mに位置する医学部構内のA L 20区があり、ここでは、六器などの鑄型が出土しているが、その型式から12世紀ごろのものと考えてよい。これらの鑄型も、粗型のうえに丹念に真土を塗りつけて鑄型を形成し、A J 19区の出土遺物と深い関連性があり、一連の鑄造に関する遺跡と考えるべきである。また後述するように、医学部構内A N 18区でも、同様の鏡の粗型と思われる鑄型が出土しており、ここでは、13世紀前葉に鉄鐘などの製品も鑄造されていたことが明らかとなっている。以上から、医学部構内の南半から病院構内一帯の鑄造遺跡については、関連を予想できるのである。

中世白河の鑄造工人の生産技術

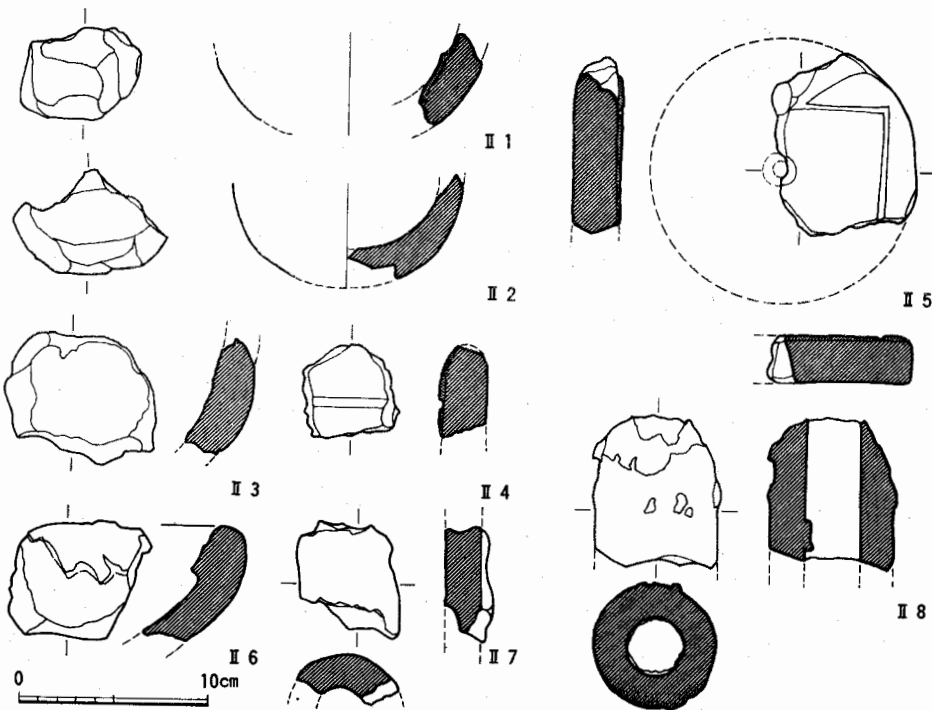


図27 病院構内A J 19区出土の鑄型・坩堝・羽口 縮尺1/4

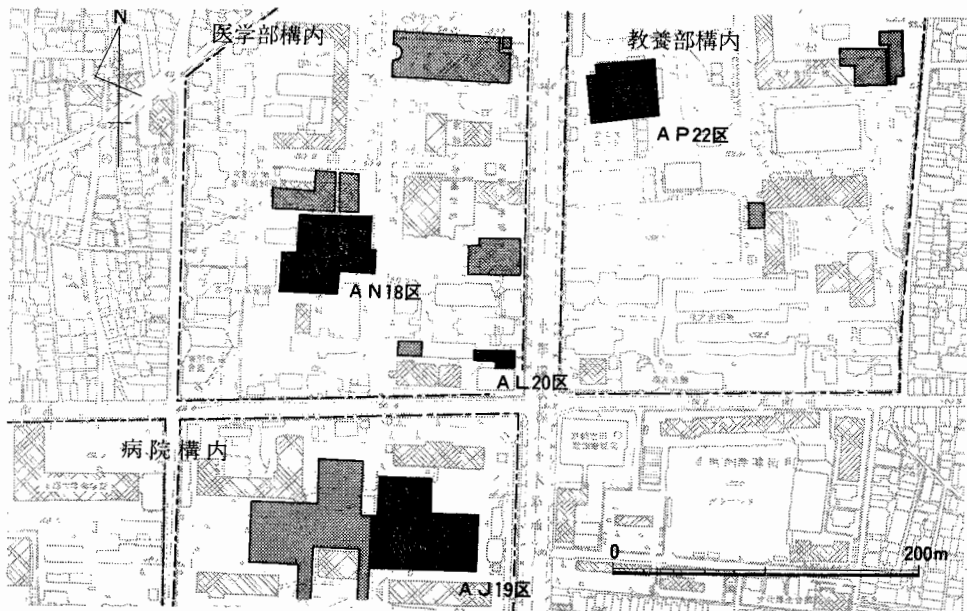


図28 京都大学構内の鑄造遺跡 縮尺1/5000

(2) 粗型と小炉壁

粗 型 さきにあげたⅡ 2は、表面に真土をつけて鑄型とする土台となるもので、ここでは「粗型」と呼んだ。香取秀眞は、元文 3 (1736) 年以前成立の鏡師青家の秘伝書『御鏡仕用之控書并ニ入用道具覚書』を紹介し、鏡の粗型が「土型」、「サネ型」、「土ドモ」などと呼ばれていることを指摘している(図29)〔香取35 pp.29-30〕。また、鍋釜や梵鐘に関する民俗例では、倉吉の鑄造工房の「土型」〔倉吉市教委86 p.56〕、近江の「クレ型」〔滋賀県教育委員会86 pp.90-1〕、天明鑄物の命脈を保つ佐野の「タネガタ」〔佐野市教委87 p.25〕は、この粗型に相当する。これは粘土を成形し酸化焼成して焼き固めたもので、引き型をラフに使用しているため、形状がいびつなものもある。その場合は、真土の厚みで補正するのだろう。また、鳥目をはめこむ穴を明瞭に残すものもあり、Ⅱ 5の鑄型は、元来円形の鏡を製作するための粗型の鳥目をふさいで方形の鏡を製作しており、きわめて興味深い。

こうした粗型は、大阪府真福寺遺跡〔大阪府教委86 p.27〕、埼玉県金井遺跡⁽¹⁾B区、鎌倉の今小路西遺跡〔河野89〕で出土しており、円形をなす鏡の粗型は、平安京左京八条三坊遺跡〔京都市埋文研 82 p.59〕、平安京左京北辺三坊五町遺跡〔伊野ほか 88 p.96〕、同志社大学構内〔鈴木90 pp.32, 35〕、京都大学医学部構内AN20区で発見されている(図30)。左京北辺三坊五町遺跡、同志社大学構内遺跡出土例は、中世末～近世のもので、表面に沈線を施し真土の接着を効果的にしている。これは香取が紹介した鏡師青家の伝統的手法と同じものであり、沈線を施す技法は中世末ごろ以降のものと考えられる。これらは、単なる土製品として報告されている場合も多く、調査者に注意を喚起したい。

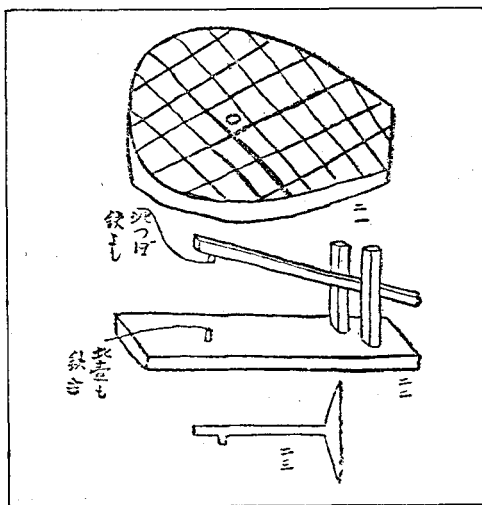


図29 鏡土形と引形ぶんまわし
『御鏡仕用之控書并ニ入用道具覚書』
〔香取35〕より)

一、鏡土形、土ノ仕法前書之通り、中なる筋はとくと打かため候跡にて三目錐にてふとく深く御付可被成候(一本、炭火ニテ焼ヌク也)五寸、六寸、七寸、八寸、九寸、一尺、一尺一寸、二尺二寸まで十五枚ヅム用意可仕候(一本、鏡ニヨリ大小ノ形ヲモチユベシ)。(図二一)(中略)

一、鏡形はとくと干し付誠によく焼仕べし。
一、引形臺。如斯(図二二)(一本、檜ノ木吉)
一、引形ぶんまわし(図二三)かねにても竹にても、八寸に七寸、六寸に五寸、尺に九寸、尺一に尺二寸、(下略)

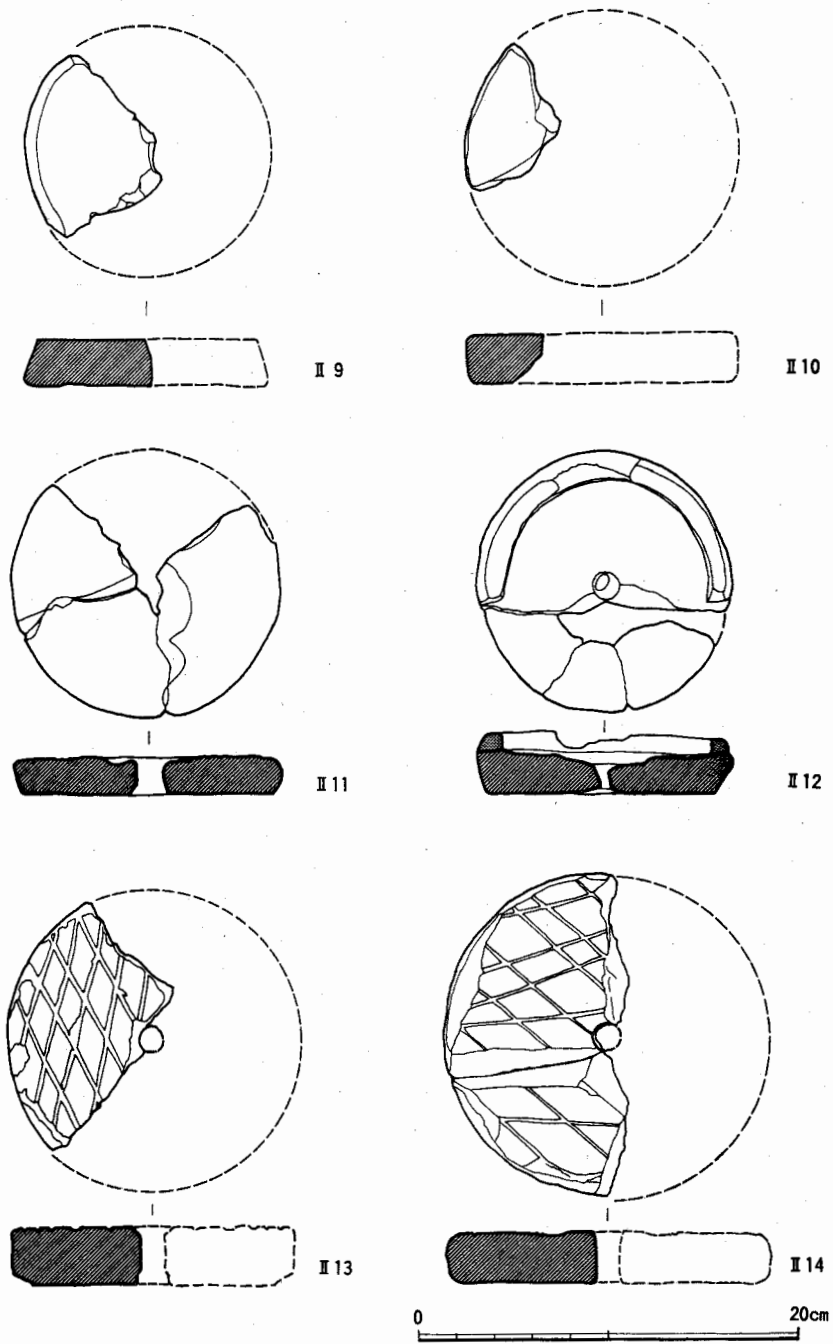


図30 鏡の粗型（II 9左京八条三坊遺跡, II 10京都大学医学部構内AN18区, II 11・II 12左京八条三坊遺跡, II 13・II 14左京北辺三坊五町遺跡）縮尺1/4

小 炉 壁 前述のように、病院構内A J19区と一連の鑄造遺跡と考えられる医学部構内A L20区では、注目すべき鑄造用具が出土しており、ここで紹介する(図32)。Ⅱ15～Ⅱ17は曲率をもった土製品で、内面は熱による熔融状態を示す。A P22区で出土したような近世の「甕炉」に類似したものと比較して、器壁もはるかに薄い。これは、さきにあげた青家の秘伝書で、「屏風」とよばれている道具にあたるものではないかと考える。すなわち、屏風は、坩堝の上に向い合せに立てる。ただし、前に羽口をはさむのであるという旨の記述があり、挿図には円筒形を縦に半分に切った形が描かれ、それを製作する土製の型もみえる(図31)。つまり、坩堝と一体となって小型の溶解炉を形成するものと考えられる。ここでは、かりに「小炉壁」と呼ぶこととする。

こうした類例は、平安京左京北辺三坊五町遺跡、太宰府市の御笠川南条坊遺跡〔前川78 pp.173-86〕で確実なものが出土している。後者の調査を担当した前川威洋は、図33のような使用状態を復原しており、鑄造遺跡の検出例の少なかった段階で示された考案として、実に卓見というべきである。さきにあげた羽口に鉱滓が付着しているのも、こうした使用状況を想定すれば理解しやすいのである。細部にわたることであるが、坩堝の底部に火を受けた痕跡があるものが多くあるため、その下部にも木炭を敷いて、坩堝を温めた可能性もある⁽³⁾。なお、今後の検討が必要と思われる。この小炉壁と坩堝を使用した溶解の方法では、あまり大量の湯を沸かすことは不可能であり、青銅鑄物中心の小型品を製作する場合に使用される装置と考えなければならず、その工房の性格を検討する重要な材料となるであろう。

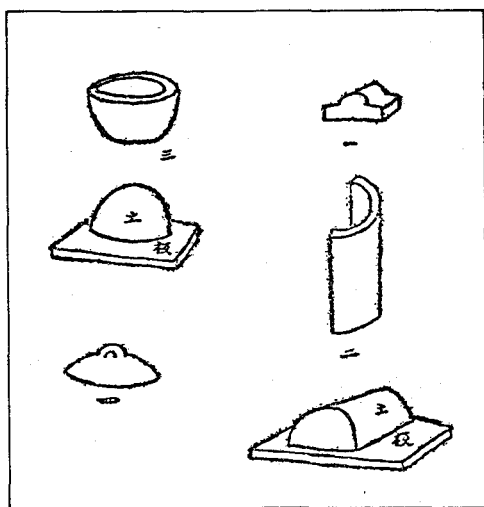


図31 ル壺と屏風

『御鏡仕用之控書并ニ入用道具覚書』

(〔香取35〕より)

一、馬のり、は口の上に置物也、なりは如斯也。(図一)

一、屏風。ルツボ之上に向ひ合せに立る也、但し前にて、は口をはさむ也、なりは如斯、(図二)屏風形は土にて、

一、ル壺、如斯、(図三)

一、ル壺ふた(図四)竝吹屋は地銅高一と吹に何程と云ふ定り有故、六寸斗の鏡の柄を取りふたに仕也。

一、竝吹屋にはよせ吹仕候時は、三貫入程之大き成、ルを遣い申候也、右に合候屏風も入申候。

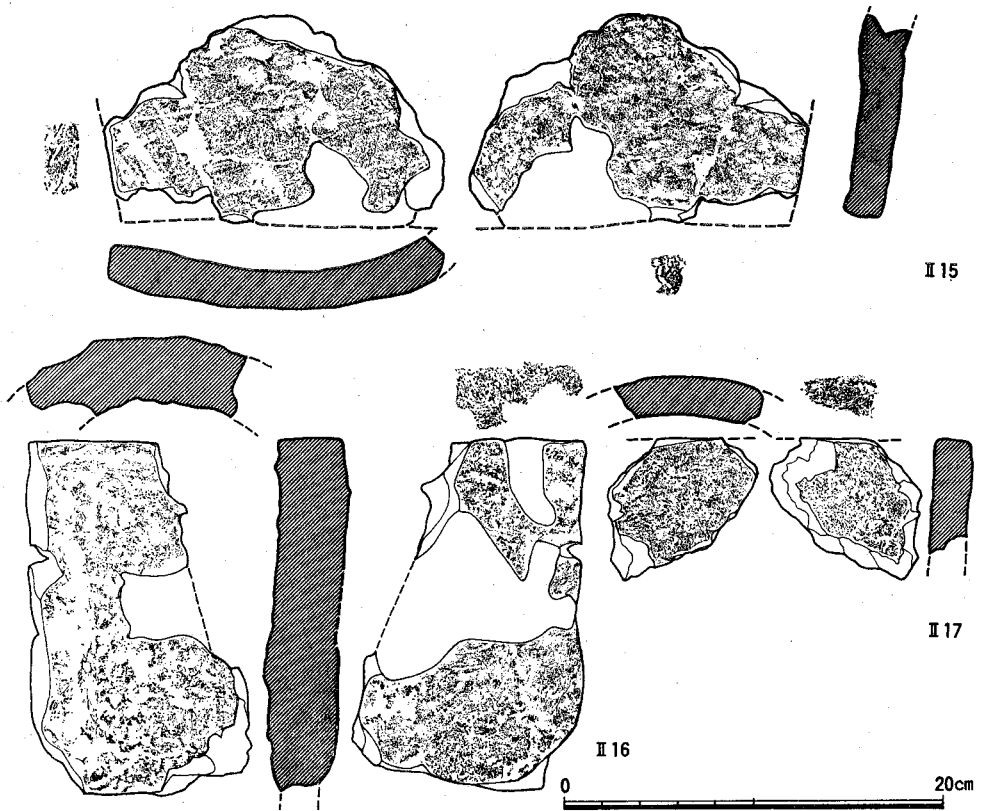


図32 医学部構内A L 20区出土の小炉壁 縮尺1/4

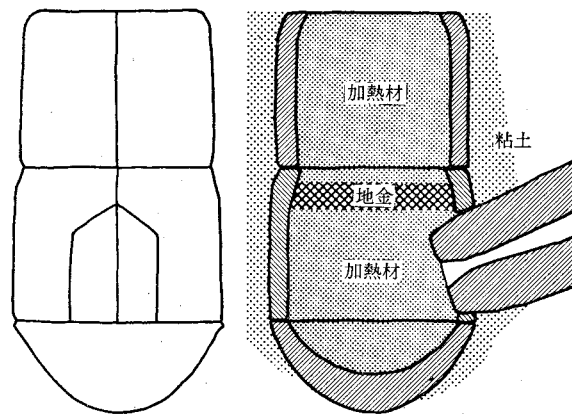


図33 小炉壁と使用状況の復原（〔前川78〕による）

3 中世京都の鑄造遺跡

さて、問題としている京都大学構内の鑄造遺跡(図34-1)のほかに、京都で検出されている中世の鑄造に関する遺跡のいくつかについて簡単に紹介し、それぞれの遺跡の性格について検討してみたい。

(1) 中世京都の鑄造遺跡

左京八条三坊周辺の遺跡(図34-2) 鑄造遺跡の最も稠密な地域であり、京都市埋蔵文化財研究所の調査では、釘、水瓶、飾り金具などの鑄型、鳥目用の穴のついた円形の粗型、埴塼のほか、「和・通」の逆字が判読しうる錢貨の鑄型が出土した。これは、「宣和通寶」である可能性が高く、ここで私鑄錢が製作されていたものとみられる〔京都市埋文研82〕。これらは、14～15世紀ごろのものと想定されている。また、平安博物館、京都文化財団の調査では、兎金、鞆尻、足金物などにわたる豊富な刀装具の鑄型や花瓶、鏡などの鑄型と埴塼が出土しており、12～14世紀前半ごろのものと推定されている〔古代学協会83・85、京都文化財団88〕。鑄造に関係する遺跡は、この周辺に広く分布しているようであり、中世の鑄造工房の中核になす地域であることが確実である。

東九条西山王町遺跡(図34-3) 台座反花の部分の鑄型が多数出土している。仏像か塔の台座の基部と考えられる。精巧な毛彫りのみられるものもある。真土の比較的厚いものもあり、それらは原型から転写して製作されたものとおもわれる。このほか六器、埴塼などがあり、平安後期を中心とする時代に鑄物生産がおこなわれたようである〔京都市埋文研86 p.86, 図版81〕。この地点は、上記の遺跡群の南方にあたり、あるいは関連するものかもしれない。

左京北辺三坊五町遺跡(図34-4) 16世紀から17世紀初頭ごろと考えられる土坑から、多量の炭とともに鞆羽口、鑄型の粗型、埴塼が出土した。すでに紹介したが、出土の粗型は円形で中央に鳥目の穴を残し、筋目をつけている(図30)〔伊野ほか 88 p.96〕。また、さきにあげた小炉壁も出土しており、上京の地にも鏡を主たる製品とする小工房があったことが判明した。

同志社大学構内遺跡(図34-5) 同じく上京の同志社大学構内徳照館地点の発掘調査で、16世紀に形成された土坑から、円形を呈し、表面に筋目をつけた鏡の粗型が2点出土している〔鈴木90 pp.32, 35〕。上記の左京北辺三坊五町遺跡出土品に類似し、ここにも鏡を製作した小工房の存在を確認することができる。



図34 京都の鑄造遺跡 縮尺1/80000

(2) 鑄造遺跡の性格

次に、鑄造遺跡の性格を考えるうえでの、いくつかの視点について簡単に説明し、中世京都の鑄造遺跡に関して検討する。

まず、鑄造作業は、工人の本拠の工房でおこなわれる場合のほかに、需要者、たとえば寺院や邸宅の一角に設けられた仮設の作業場で出吹きをする場合がある。とくに、梵鐘製作にあたって出吹きがおこなわれることがあるが、出吹きは、こうした大型鑄物だけに限らないようである。⁽⁴⁾ある鑄造遺跡について、継続的の工房か、仮設の作業場かを判断するのは、重要な問題であるが、遺跡だけからでは困難な場合もある。基本的に、近接して点々と鑄造遺跡が発見される場合は、継続的な操業をおこなったものと判断する。

梵鐘のような大型の製品を鑄造する場合には、鑄造にあたって鑄造坑を作り、そのなかに鑄型を設置することが知られているが、梵鐘ばかりではなく、大型の鑄鉄鑄物も同様の土坑で鑄造されたものとする[五十川90a pp.55-6]。一方、小型品を鑄造する場合は、

火床が検出されている場合⁽⁵⁾もあるが、その鑄造の場は明確でなく、鑄型や坩堝の出土する地点の周辺が鑄造工房であったと推定するにとどまるものが多い。

鑄型から推定できる製品の違いは、その工房の性格を考えるうえで、きわめて重要である。しかし、鑄型は軟弱な土の塊であり、特殊なものをのぞけば土師器以下のもろさを示すものである。内部には、靱殻やスサの細片を混入して空洞を作り、ガス抜きとしているが、形態の複雑なものは堅牢に作られているのに対し、単純な形態の鍋や釜の鑄型はどれもろくて、真土も薄くつけられている。当然のことながら、複雑な形状をした小型の鑄型ほど目につきやすく、調査者がその製品を判断しやすい傾向があり、鍋や釜の鑄型は明確に確認しにくいのである。

また、継続的な工房で、大型の炉を使用して溶金を作って操業した跡には、器壁の厚い炉の残片の出土量はかなりにおよぶのが常である。たとえば、梵鐘鑄造をおこなった教養部構内A P22区の調査では、整理箱200箱にわたる炉の残片が出土している。小型の鑄物を鑄造する場合には、小型の坩堝でよいし、さきに述べたように、坩堝と小炉壁(屏風)を使用することもあった。当然ながら、これにともなう鞆の形態も異なることが推定できる。つまり、製品によって地金の溶解に用いる用具に差異がある。

こうした観点から、これまでに発見されている中世京都の鑄造遺跡をみると、主として鑄鉄鑄物を継続的に生産したと考えられる遺跡、大型鑄物の生産をおこなった遺跡は、まだ発見されていない。そして、そのほとんどが小型の青銅鑄物の生産を中心とする工房とみられ、鑄型や坩堝といった鑄物製作に関する遺物は明確ではあっても、鑄造の場を特定できるものはほとんどない。

このなかで、八条三坊の界限は、これまでに発見されている鑄造遺跡の密度が最も濃いところであり、近接して鑄造に関する遺物が出土している。この地域は、中世京都のある時期の小型青銅鑄物生産の中核となった部分に属していることはまちがいない。鑄型から想定するかぎり、その製品は小型の鑄物が中心をなし、刀装具、仏具、飾り金具などを確認することができる。これらは、青銅製品として完成されたものとみてよいだろう。また、これらは、鑄上がった後、型ばらし、鑄凌いをほどこせば、製品になるものではなく、彫金、鍍金といった多様な加工を経て完成するものが多く含まれており、そうした工程も同時に、これらの工房でおこなわれたとみるのが自然である。また、刀装具のように部品として、次の生産工程を担当する別種の工人に手渡されるものも多くふくまれている可能性がある。

4 文献にみえる京都の鑄造工房

(1) 中世の鑄造工人

文献資料では、古代には大藏省典鑄司や御倉町の作物所に、「鑄工」と呼ばれる鑄造関係の工人がみえるが、中世の鑄造関係の工人には、「鑄物師」、「銅細工」、「鋳師」、「大工」、「小工」などがある。このうち、「銅細工」、「鋳師」とよばれた工人は、比較的小型で装飾性の高い青銅鑄物の小生産にあたった工人を指す言葉であって、型ばらし、鑄凌いの後、研磨、鍍金といった多様な後処理工程をもおこない、その製作品だけでは完成品にならないような部分品の製作もあったものとみてよい〔原田88〕。これに対して、「鑄物師」は、鑄鉄鑄物や青銅鑄物を、そしてその大型品もあつかう協業を前提としている工人と考えなければならない。

これらの鑄造工人のなかには、寺院や権門に所属し、奉仕を条件に年貢や公事を免除されたと考えられているものがある。また、特定の主にのみ従属していたとはかぎらず、諸方兼帯であった可能性のあることも指摘されている〔網野80 pp.125-31〕。そうした鑄造工人として、『醍醐雜事記』9巻 治承3(1179)年 醍醐寺座主御拝堂日記には、机饗にあずかったもののなかに、「銅工二人 矢集為清 同為時」があり、醍醐寺に所属した銅細工ではないかと思われる。また、『祇園執行日記』康永2(1342)年10月28日の条には、私鑄銭を作った銅細工が投獄されたが、祇園社に属していた金物沙汰の輩はゆるされたとあり、祇園社に属する銅細工の存在を確認することができる。これらの工人については、その生産の本拠がどこであったかは不明である。

(2) 中世京都の鑄造工房

つぎに、文献で知ることのできる鑄造工房について述べる。中世末の姿をかいまみることのできると考えられる17世紀の資料も検討の対象とした。

七条界隈の鑄造工房 七条界隈に住んだとみられる鑄造工人については、文献資料もあって、文学作品の題材にまでとりあげられている。まず、『新猿楽記』に登場する、四の御許の夫の金集百済は、七条以南の保長をつとめ、鍛冶、鑄物師、并に銀金細工の上手であったという。また、『荏柄天神縁起絵巻』、『松崎天神縁起絵巻』には、白河院の御時、西七条の貧しい銅細工の姉妹が継子いじめを受け、北野社に参籠して幸せを得るという話がある。このほか、『宇治拾遺物語』一卷ノ五には「七条まちに江冠者が家のおほ東にある鑄物師」の妻と山伏が密通した話がのせられている。

また、『吾妻鑑』文治2(1186)年8月26日の条によれば、蓮華王院領紀伊国由良荘において濫妨を致した七条の銅細工宗紀太に対して、これを停止すべく下知したという。また、貞和4(1348)年東寺根本鐘の改鑄にあたっては、三条と七条の鑄造工人が協力してあたったことが『東宝記』第一 鐘楼 にみえる。8月13日に作業を開始し、10月7日に三面西僧房跡の乾の地で鑄込みをおこない、明けて8日には鐘の撞初めをして、功あった工人たちは足利尊氏、足利直義の馬などを賜わっている。前段の話は、もとより虚構ではあるが、かつての東市や西市の周辺に位置する七条町界限に、中世には鑄造工人が住んでいたことを前提に創作されたものとみるべきであり、それは後二者の文献によって裏書される。

また、『東寺百合文書』ム函 学衆方評定引付の貞治6(1367)年4月24日の条には、東寺領八条院町で、白粉焼、銅細工、紺屋の屋敷や仕事場跡の畠地を耕作している百姓たちが、こうした職人の住居した跡には作物がよく育たないから、地子の負担を減らしてほしいと訴えている。この東寺領八条院町には、多数の手工業にかかわる工人が住んでいたことが明らかにされている〔中村75〕。

三条釜座の鑄造工房 なんといっても、中世京都の鑄造工房といえば、三条釜座が筆頭にあげられるであろう。しかし、中世の前半において、かれらの動向を語る資料はきわめて少ない。まず、著名な文献であるが、『師守記』暦応4(1341)年2月19日の条に「夜に入りて、亥の剋許、三条町の鎌座より六角西洞院に至り焼亡す。西洞院東頼と云々」とある。また、『東寺古文零聚』巻二に、「うけもうす釜の事 合五石なは一口者 右件かまにもとのあないしままできて候はば、三ヶ年かうちにはおなじたけすのかまにとりかへ候てまいらせんべく候。ただしみうちになのあやまちたきはりをばまかり候べからず候。仍後日のため之状如件。 正暦二年卯月廿一日 三条まちかまのぞの弥藤三」という興味深い記述がある。ただし、年代に問題があり、豊田武の正応2(1289)年説〔豊田65〕をとる。つまり、鎌倉後期には、かなり大型の鑄物を生産しており、鑄造工人の製品に対する自信のほどを信じれば、優秀な鑄鉄鑄物を生産していたこととなる。また、さきに述べたが、貞和4(1348)年、東寺根本鐘の改鑄にあたっては、七条の大工とともに、三条の大工がかかわったこともみえる。

15世紀にはいると、梵鐘を中心とする青銅鑄物や各種の鑄鉄鑄物に、この三条釜座の工人による製品があらわれ、16世紀から17世紀にかけて全盛時代をむかえることとなる〔坪井70 pp.169-74〕。それは、応仁・文明の大乱の後の京都の町の復興とも関連しているのではないかと考えられるが、16世紀には茶の湯の盛行ともあいまって、茶湯釜という鑄鉄

鑄物の生産が高まったことは、周知の事実である。三条釜座の鑄物生産は、中世の後半に至って、装飾的な鑄物生産にもりだしたものとみてよい。しかし、その生産の基本が鑄鉄鑄物であったことは、以下に述べる『毛吹草』や『京羽二重』などの文献からも明らかであり、基本的に装飾的な小型鑄物に固執した生産体制をとる小工房ではなかった。

中世京都のその他の鑄造工房 このほか、『祇園執行日記』貞和6(1350)年7月10日の条には、綾小路京極に住む銅細工のもとに、刀作の用途1貫300文と大念珠小球、緒違の代450文が遣わされている。これによって、祇園社に属する銅細工が下京の東北辺にいて、装飾的な鑄物製品の製作にあたっていたことがわかる。また、坪井良平の研究によれば、栗田、橘などの姓を名乗る工人を、中世なかばごろの京都の鑄物師としてあげられるという。栗田はもちろん、東山一帯の地であり、鍛冶生産のほかに鑄物生産の根拠地が、ここにあったことを物語っている。かれらは、梵鐘の大工としてしか、その名前をあらわさないが、当時の鑄物師のあり方としては、鑄鉄鑄物や梵鐘以外の大型製品の製作にもかかわっていた可能性が高い。

『毛吹草』に記された鑄造工房 正保2(1645)年に成立したものと思われる『毛吹草』には、中世末にさかのぼりうる京都の特産物が詳細に記述されている。三条釜座に鍍(鉄)唐金鑄物をあげているが、そのほか、鑄物に関連するものとして、四条坊門の鑄物の目貫、六条の仏具、油小路の仕立刀、室町の目貫(鹿相彫)、万里小路の鐐(鹿相物)、後藤の彫物、同分銅、正阿弥の金具、埋忠鐐などがみえている。三条釜座については、鑄物の材質にしかふれていないのに対して、そのほかの小型の装飾品については、その生産が分業化されて、製品別に産地が細かく記載され、さらにその鹿(粗)精の差異にまで言及していることに注目したい。これは、中世のおわりごろに至って、青銅鑄物を中心とする装飾品の生産が一段と高まりをみせたことを示すものといつてよい。

『京羽二重』に記された鑄造工房 貞享2(1685)年に成立の『京羽二重』巻六には、多種多様の諸師職藝の氏名や住所がかなり細かくかかげられており、そのなかには、鏡師、仏具師、鑄師、鋳屋などの鑄造関係の工人も多数みえる。こうした工人の本拠を地図上に示した『京都の歴史』第5巻別添地図を参照すると、たとえば鏡師の本拠は、上京、下京に分散的に存在しており、中世前半に青銅鑄物を中心とする生産をおこなった鑄造関係の工人が七条～八条に集住していった状況とは一変している。こうした状況は、上にあげた『毛吹草』に示された姿と大きく変わらないものであり、中世のおわりごろにまでさかのぼりうる状況ではなかったかと考えられる。

5 中世京都の鑄物生産の変転

以上のような鑄造遺跡のありかたや文献資料の示すところから、中世京都の鑄物生産の変遷を描き出すには、まだまだ材料が不足しており、今後の検討が必要と思うが、簡単にその概観を述べてみる。

(1) 中世前半の鑄物生産

古代にさかのぼる鑄造遺跡については、京都大学教養部構内A P 22区〔五十川・飛野84 pp.16-22〕、右京区太秦広隆寺境内遺跡〔石尾82〕など、やや特異なものが検出されているにすぎない。平安時代の鑄物生産工房に関する文献はほとんどなく、その根拠地を特定することができないが、鑄物そのものの生産量が少なく、一般に広く普及するような状態ではありえなかったのではないかと推定する。そして、仏具などを中心とする青銅鑄物の注文生産が、主体をしめていたのではないかと考える〔五十川90 b〕。

平安後期以降、中世の前半には、遺跡の検出状態や文献資料のしめすところは、七条～八条の界限における活発な鑄物生産である。この七条～八条を中心とする地域では、鑄造遺跡が多数発見されているが、その出土鑄型をみるかぎり、小型の仏器や刀装具を中心とするものであり、現状では鑄鉄鑄物や大型の鑄物が、大量に生産されていたという積極的な証拠をみいだすことができない。また、以下に述べる三条釜座の鑄造工人と対比的にとらえるならば、かれらの生産形態は、銅主鉄従という点を特徴としてあげられるのではあるまいか。つまり、これまで発見されているのは、「銅細工」と呼ばれた工人たちを中心とする生産の跡と考えられる。この周辺地域は、古代の東市や西市の周辺にあたり、商工業者が集住していたことが明らかとなっており、中世前半には鑄造工人も多数居をかまえていたと推定されるのである。とくに七条界限の銅細工を中心とする工人たちについては、定朝以来、運慶、快慶らを生みだした七条仏所が近隣に存在したと無関係ではなからう。それは、鑄物製作にあたって必要な製品の原型が、仏師によってつくられていたと推定されるからである。⁽⁷⁾

三条釜座に関する遺跡はまだ検出されていないが、中世前半に鑄鉄鑄物を生産していたことは確実であり、「釜座」という名称を文字どおり素直に解釈すれば、主として鉄を製作し、いくつかの工房によって形成されたものではなかったかと推定する。しかし、文献資料も少なく、青銅製品がみとめられないのは、多くの鉄主銅従の鑄物生産をおこなっていた工人集団と似かよった生産状況であったからであると考えざるをえない。

以上のように、中世前半から中ごろの京都においては、七条界限の銅細工を中心とする青銅鋳物生産と三条釜座の鋳物師による鋳鉄鋳物の生産がそれぞれおこなわれるとともに、その周辺に点在する白河や栗田の工人が、それを補完する生産にあたっていたのではないだろうか。

(2) 中世後半の鋳物生産

中世後半の青銅鋳物中心の鋳造関係の遺跡をみると、七条～八条には、中世前半ほど鋳物工房が目立たなくなる傾向があるのではないかと考えられる。一方、中世末ごろのものと推定される遺跡が、上京の一角に点在して検出され、ここでは鏡を中心とする小型の青銅鋳物を生産しており、それぞれの遺跡の規模は、そう大きくないようである。文献資料のうえでも、七条～八条の周辺に、鋳造関係の工房が群立していた形跡はなく、近世初頭の文献を援用するならば、上京、下京という核のなかに、それぞれ鋳物生産工房が散在するものと考えてよいだろう。

こうした変化は、古代の市町の伝統をひく地域に商工業者が集住するという形態が、徐々に解体するなかで形成されたのではなかろうか。すなわち、中世のなかば以降、上京と下京というふたつの核が成立し、そのなかに多くの商工業にかかわる人々が組み込まれてゆくという中世京都における都市構造の変化によるものではないかと考える。そのありかたは、近世のはじめの『毛吹草』や『京羽二重』に記された状況に反映されているものと考ええる。

また、鋳鉄鋳物の生産を主体的におこなっていた鋳物師の工房にも、おおきな変化が生じた。中世後半になると、中世前半に隆盛をきわめた河内系鋳物師集団の活動に対して、各地の在地鋳物師の活動が顕在化し、その地で梵鐘のような大型でしかも装飾要素の多い青銅鋳物の製作にも積極的に乗り出してゆくものがあらわれた。京都では、15世紀半ばの応仁文明の大乱は京都の市街地を焼きつくすが、すぐ復興が開始される。このあたりから、鋳物生産集団として、三条釜座の鋳物師が大きく成長した姿を表わしてくるのである。かれらは本格的に大型鋳物の梵鐘鋳造をおこない、中世末から近世はじめにかけて、生産は最盛期をむかえる。その生産状況や経営形態については、社会経済史の視点からのいくつかの研究がある〔寺尾38・40、水上39、広岡42〕。かれらの本拠が、上記の銅細工とは異なって、大きくその位置を変えなかったのは、鋳物師の場合、生産活動に必要な土地、家屋、道具といった固定資本が、銅細工あるいは鋳師に比較して、いちじるしく大きいことも、その一因であろう。

(3) 鴨東白河の鑄造工人

こうした大きな流れのなかで、中世京都の中核部分から、ややはずれた鴨東白河の鑄造工人たちの生産活動は、どのように位置づけられるであろうか。中世京都の鑄造工人たちのうち、銅細工と呼ばれた人々の作品について現在確認できるものはきわめてすくないが、舍利容器などの銘文によってこれを知ることのできるものがあり、海龍王寺藏金銅舍利塔、西大寺藏金銅火炎宝珠形舍利塔、西大寺藏金銅透彫舍利容器などがある。このうち、海龍王寺藏の金銅舍利塔は、鎌倉時代を代表する優品で、重要文化財に指定されている。総高34cm、水晶の宝珠形舍利容器を金銅火炎で包み、美しい金銅の台座をそなえ、彫金技法を駆使した部材を組み合わせており、製作にかかわった工人の技術水準の高さを強く感じさせる〔岡崎78, 奈良博83, 奈文研83〕。その底面に「海龍王寺常住／大願主比丘實忍／正應三年七月日／小工白河守員／小工室町道一／彫工七条昇蓮／大工白河行圓」の陰刻の銘文があり、正應3(1290)年に、少なくとも4人の工人が協力して、その製作にあたったことを知ることができる。比較的小型品ではあるが、細工は極度に複雑であるため、大工の指揮のもと、小工が配下の一般工人を加えて作業にあたったとみてよい。しかも、大工、小工という鑄造工人のほか、七条の彫工と特記されるものが加わり、この工人が彫金作業をおこなったものと思われる。この作品は、白河と室町の銅細工と七条の彫工の協力によって、はじめて製作可能な著しく手の込んだ作品と考えなければならない。また、懸案の白河の鑄造工人を検討するための唯一の実体的な資料である。

さて、鴨東白河の鑄造工人集団については、前稿で中世の文献や金石文に、ほとんど姿をあらわさないため、中世京都の鑄造工人のなかで、中心となったものではなく、「傍系」の工人ではなかったかと考えた〔五十川88b p.54〕。しかし、教養部構内A P22区で検出した鑄造遺跡は、9～10世紀に梵鐘を中心とする青銅鑄物の生産を継続的にこなしていることが確実であり、そうした工人集団の本拠とみなすべきものである。これが、この地において中世に鑄物生産をおこなった工人と密接に関係をもつものであるとするならば、かれらの出自は、当時の鑄物生産技術の最先端にあった工人集団につながるものとするのが妥当ではなかろうか。

しかし、古代の鑄物生産と中世の鑄物生産の状況とのあいだには、大きな一線を引くことができる。すなわち、13世紀に製作された金銅の舍利塔に大工・小工の名前を記していることは、さきにくわしく述べたが、この舍利塔は、鎌倉時代のものであり、第一級のものであり、この製作にあたった工人の巧みさは、いくら強調してもしすぎることはない。

また、13世紀の前葉には、鉄鐘を鋳造しているが、鉄鐘は現状では特殊なものであり、なおかつ小型品であることに留意したい。そして、中世の鋳型や埴塼のありかたからみて、小型の青銅製品中心の鋳物生産であり、やはり、銅主鉄従の銅細工の工房があったものとみてよい。ここに示された大型鋳物をも鋳造した古代の工人から、中世の銅細工への変転が、どのようにして生じたかについては、今後の検討課題である。また、周辺の遺跡の状態や文献のありかたから判断して、この白河の鋳造工房は近世はおろか中世の後半には、その活動を終えていたのではないかと推定する。これが、さきに述べた中世のなかばの商工業地域の変化に起因する工人集団の再編統合によるものなのか、その終焉にいたる過程を明らかにするためには、さらに今後の発掘調査の成果にまつところが大きいことはいうまでもない。

〔注〕

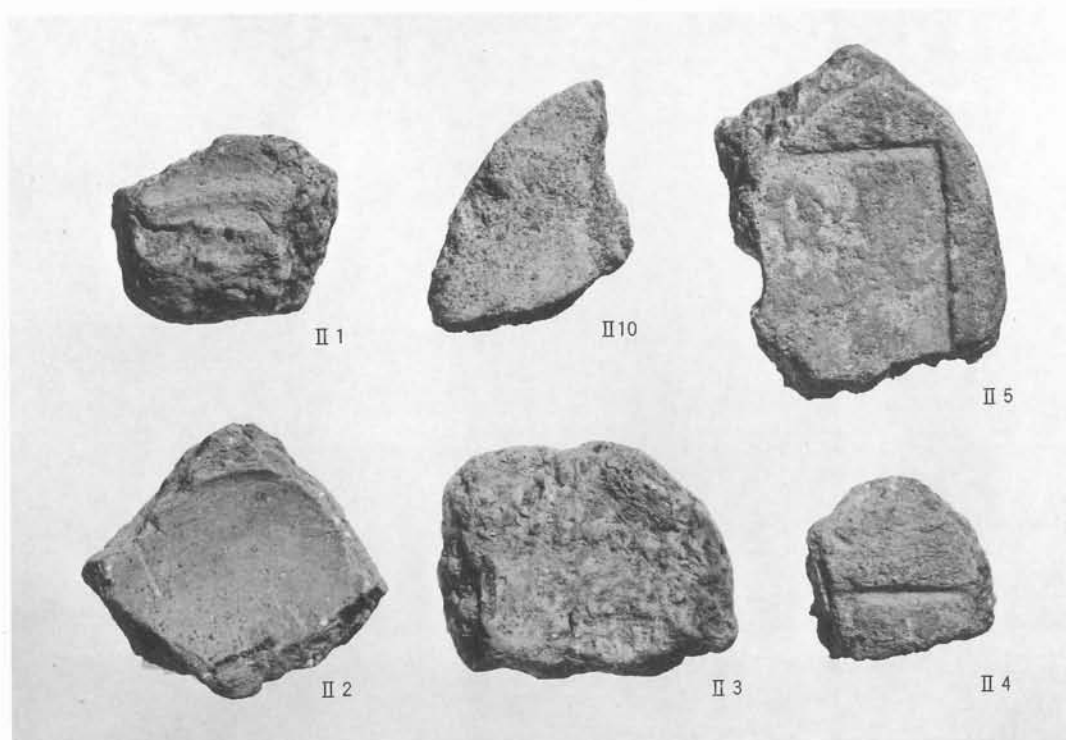
- 1 調査を担当された埼玉県埋蔵文化財事業団の赤熊浩一氏のご教示による。
- 2 京都府埋蔵文化財調査研究センター主催の現地説明会で実見した。
- 3 日本鋳物協会主催の鋳物の科学技術史研究部会において、葉賀七三男氏からご教示を得た。
- 4 『歙喜天靈驗記絵巻』には、仮設の作業場とおぼしき情景が描かれている。いくつかの研究にひきずられて、前稿〔五十川88b〕では、小型の梵鐘を鋳造している情景ではないかと想定したが、詞書にしたがって素直に仏像と考えたほうがよいのではないと思う。ともあれ、こうした小型の青銅鋳物も、出吹きによって製作された一例とみなす。
- 5 たとえば、太宰府史跡の第6次調査では、火床と思われる遺構（保土穴）が発見され、小型の青銅鋳物と考えられる鋳型が出土している〔福岡県教委71〕。
- 6 銅細工が鋳造にかかわったことは事実である。しかし、その末裔たる鋳師などは、彫金技術の進歩や製作工程の分業化によって、次第に鋳造工程の比率を低めてゆく可能性もあるのではないかと考える。今後、詳細に検討したい。
- 7 『山槐記』元暦元（1184）年8月22日条に「隆職宿禰内々に申して云く。近代内匠寮、皆銅細工として、木を彫るの事、其の骨を得ず。仍て、兼ねて仏師をして彫らしむなりといえり」とある。

〔参考文献〕

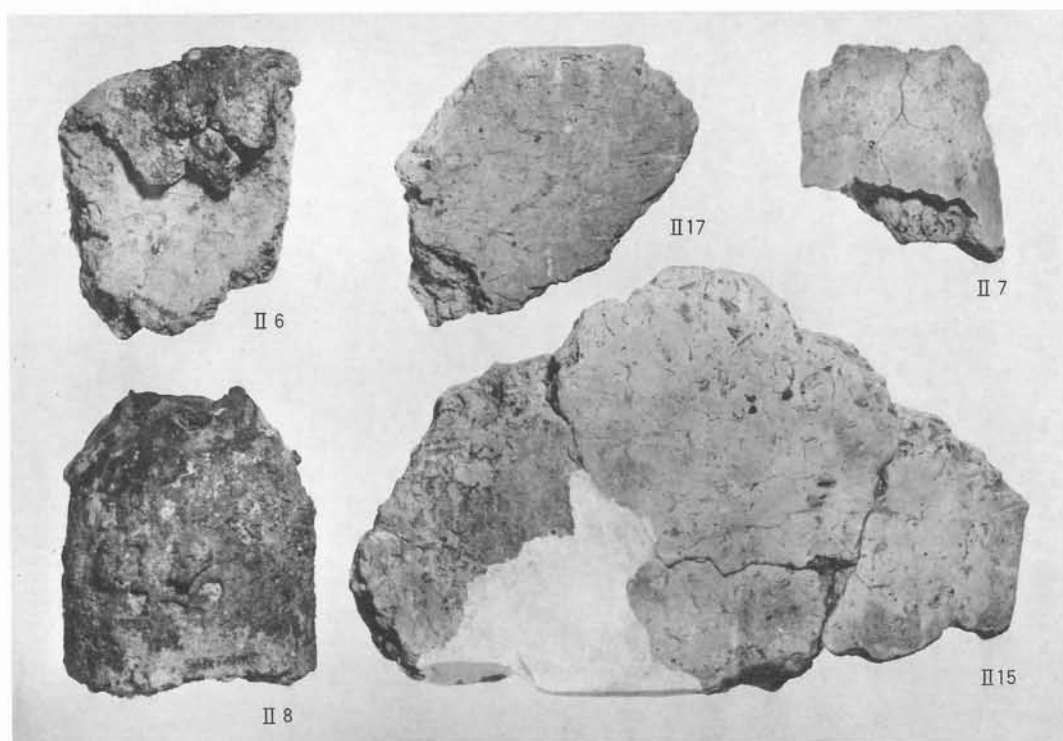
- | | | |
|-------|--------|---|
| 網野善彦 | 1980年 | 『日本中世の民衆像—平民と職人—』 |
| 石尾政信 | 1982年 | 「広隆寺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第3冊 |
| 五十川伸矢 | 1988年a | 「京都大学医学部構内AN18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』 |
| | 1988年b | 「鴨東白河の鋳造工房—京都大学の鋳造に関する遺跡—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』 |
| | 1990年a | 「中世前半の大型鋳鉄鋳物」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』 |
| | 1990年b | 「京都の鋳物生産—古代から中世へ—」（まちと暮らしの京都史22）『京都民報』第1428号 |

中世白河の鋳造工房

- 五十川伸矢・飛野博文 1984年 「京都大学教養部構内A P 22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
- 伊野近富・石井清司・遠坪一樹 1988年 「平安京左京北辺三坊五町」『京都府遺跡調査概報』第27冊
- 大阪府教育委員会 1986年 『真福寺遺跡』
- 岡崎譲二 1978年 「海龍王寺舍利塔」『大和古寺大観』第5巻
- 香取秀眞 1935年 「御鏡仕用之控書註記」『考古学雑誌』第30巻 第1号
- 河野真知郎 1989年 「武家屋敷によばれた鍛冶屋」『よみがえる中世』3 武士の都 鎌倉
- 京都市埋文研(京都市埋蔵文化財研究所)
1982年 『平安京左京八条三坊』(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第6冊)
1986年 『平安京発掘資料選(二)』
- 京都文化財団 1988年 『平安京左京八条三坊七町 京都市下京区東塩小路町』(『京都文化財団調査研究報告』第1集)
- 倉吉市教育委員会 1986年 『倉吉の鋳物師』
- 古代学協会 1983年 『平安京左京八条三坊二町』(『平安京跡研究調査報告』第6輯)
1985年 『平安京左京八条三坊二町 第2次調査』(『平安京跡研究調査報告』第16輯)
- 佐野市教育委員会 1987年 『佐野の鋳物師』
- 滋賀県教育委員会 1986年 『近江の鋳物師』
- 鈴木重治 1990年 『同志社大学徳照館地点・新島会館地点の発掘調査』(『同志社大学校地学術調査委員会調査資料 No. 22』)
- 坪井良平 1970年 『日本の梵鐘』
- 寺尾宏二 1938年 「京都における座の問題」『経済史研究』第19巻第1号
1940年 「鋳物師の座」『経済史研究』第24巻第6号
- 豊田 武 1965年 「第5章第4節Ⅱ 金属工業」『産業史Ⅰ』(『体系日本史叢書』10)
- 中村 研 1975年 「八条院町の成立と展開」『文化史学』25号(『京都「町」の研究』1975年所収)
- 奈良博(奈良国立博物館) 1983年 『仏舎利の荘厳』
- 奈文研(奈良国立文化財研究所) 1983年 『西大寺観尊伝記集成』(『奈良国立文化財研究所史料』第2冊)
- 浜崎一志 1990年 「京都大学医学部構内A L 20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』
- 原田一敏 1988年 「鋳技術と鋳師」『ミュージアム』No. 447
- 広岡 泰 1942年 「三条釜座の研究」『経済史研究』第27巻第5号
- 福岡県教育委員会 1971年 『大宰府史跡 昭和45年度発掘調査の概要』
- 前川威洋 1978年 「鋳造関係遺物」『福岡県南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集
- 水上 毅 1939年 「三条釜座の考究」『明倫誌』



1 铸 型



2 坩埚 (II 6), 鞴羽口 (II 7·II 8), 小炉壁 (II 15·II 17)

第6章 土取りの歴史的変遷

五十川伸矢

1 はじめに

考古学的発掘調査によって検出される遺構の多くは、過去の人間が地面に穴を掘って、それを利用した痕跡である。しかし、土そのものを採取する目的で掘られた穴もあり、これまた遺構と呼んでさしつかえない。こうした遺構の特徴をかいつまんで述べると、土取り穴は、目的が土の採取だけに、その形態は複雑なものではありえない。また、その採取の対象は、たいてい、それまでに形成された遺構の基盤となっている粘土・砂層や礫層であり、その上に堆積していたはずの遺構にともなったと考えられる遺物が、埋土にいわば攪乱状態でまじっている。ところが、土取りという作業には、鍬、鋤、畚などの道具があればよいわけであるから、当然のことながらこの作業に関連する遺物は少なく、土取りのおこなわれた時期を推定するには、十分な検討が必要である。

さて、病院構内A J 18・A J 19の両区では、江戸時代の中ごろの大規模な土取り跡を検出した。粘土や砂を採取した遺跡は、構内の各所で検出されているが、この近世の遺構は、これまでに発見されている中世の土取りの遺跡とやや異なった形態をもつものであった。ここに、土取りという作業の歴史的変遷を考える材料があるものと考えてる。

歴史的にみて、採取業にかかわる職人には石切、金ほり、^{みずがね}汞ほりなどがあり、土を材料として作業をおこなう職人には、壁塗、窯業関係の工人、鋳物師、鍛冶などかなりの数におよぶのに、土を掘ることをなりわいとする職人は、中世を通じて、明確な形では登場しない。それは、「土を掘る」という作業が、土にかかわりをもっている職人の従属的な作業工程であったのか、それとも職人とは呼ばれない人々が、これを担当していたからだろうか。あるいはまた、土を掘るには、職人的技術と呼べるようなものは必要としないからだろうか。たしかに、そこに介在する技術は農民的であるが、だからといって農民ばかりが、この土取りという作業にもっぱらかかわってきたと速断してよいものだろうか。苛酷な労働ではあるが、歴史的変遷があるにちがいない。

本稿では、まず土取りの遺跡について、これまでに調査されたものをいくつか紹介する。そして、文献資料によって知ることのできる京都周辺のさまざまな土の種類や用途、その産地などについて検討し、土取りにまつわる歴史の一端を描いてみることにする。

2 中世・近世の土取り遺跡

(1) 京都大学構内の土取り遺構 (図版9, 図35・36)

まず、本部構内 A T27・A X28・A X30などの調査区では、中世前半の白色砂採取の跡を検出している〔五十川81 p.27, 五十川83 pp.11, 13, 清水89 p.43〕。これらの土坑は、白色砂の上面で検出され、掘形は不定形で黄灰色シルト層の上面が浅いところでは分布せず、シルト層を掘り込むものはない。また、土坑どうして掘形を深く切りあうものがないため、砂取りのために掘削した土坑と考えた。ほぼ13世紀のものである。

また、医学部構内の東半に位置するA P19・A N20の両区では、ほぼ13世紀から14世紀中葉ごろの土取り跡を検出した〔清水・吉野81 pp.15-17, 五十川86 pp.28-9〕。その掘形は上記の砂取りの跡よりもやや小さめであるが、ほぼ同様の形態を示し、黄灰色シルトを採取している。また、医学部構内東南部のA L20区でも、同様の黄灰色シルトを採取した跡が検出されている〔浜崎90 p.7〕。近世の初頭ごろのもので、A P19・A N20の両区と比較して、土坑の単位はやや大きいものが多いが、一定の規格があったとは認めがたい。これらの土坑は、わずかに底部しか残存しないものも多いが、不定形であることが特徴であり、その形態に対応して当時の地表面の開口部の形態も不定形であったと推定できる。

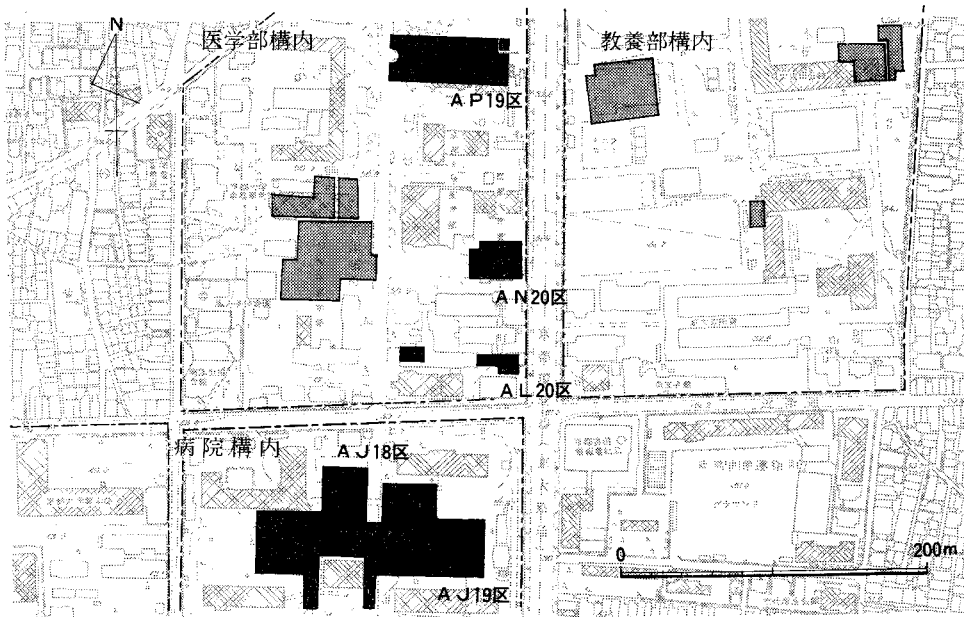


図35 京都大学構内の土取り遺跡 縮尺1/5000

中世・近世の土取り遺跡

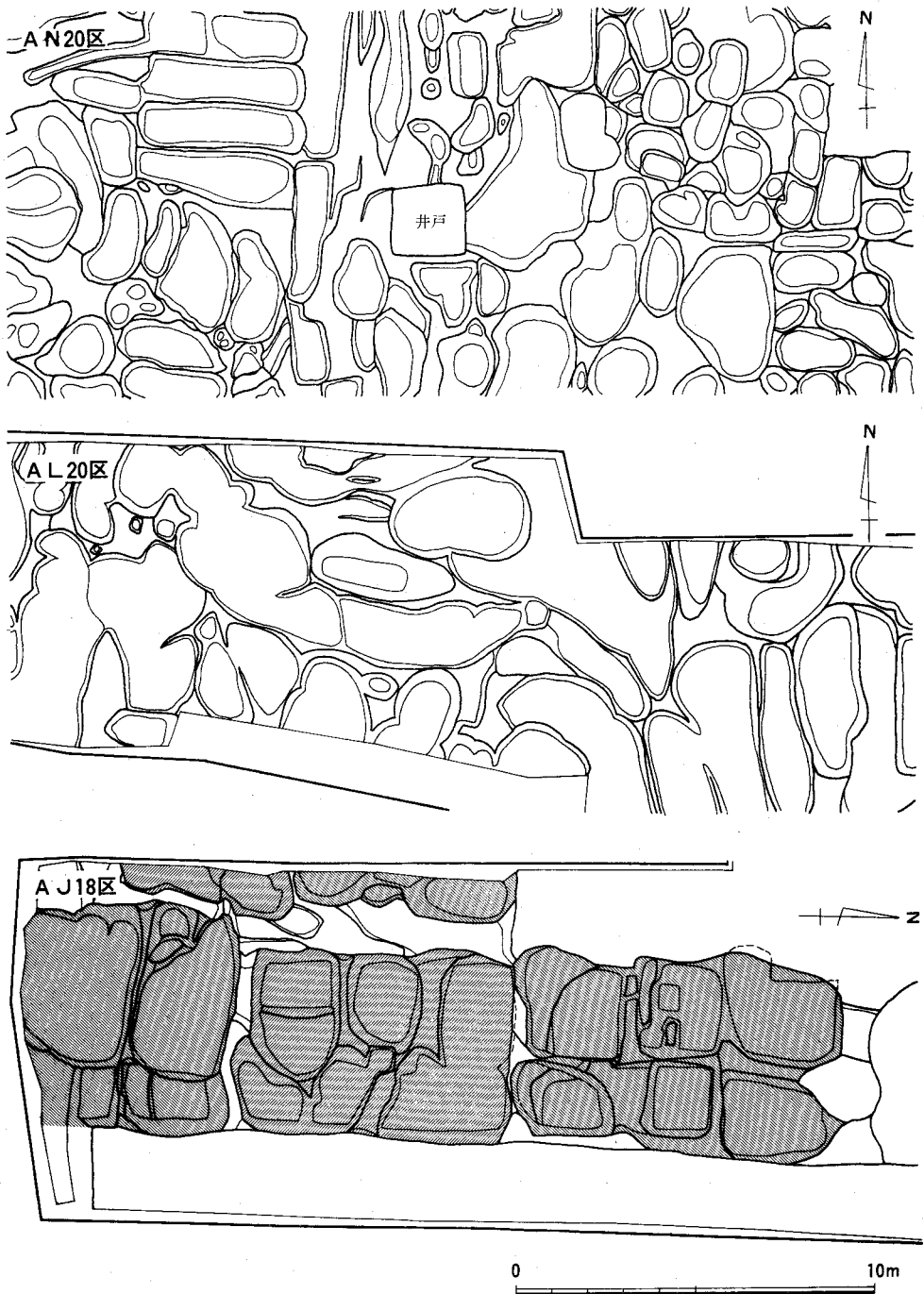


図36 京都大学構内の土取り遺構 縮尺1/200

土取りの歴史的変遷

一方、病院構内A J18・A J19の両区では、近世のなかごろの土取り跡を検出した〔五十川・浜崎89 pp.24-5〕。ここでは、S X1～S X11の大きなまとまりがみとめられる。S X1～S X11の幅は2.5～13mと多様であるが、検出長は短いもの10m、長いものは56mをはかる。A J19区では、それらが幅約1mの畔をはさんで平行し、この畔はほぼ真北から東に約5°振る方位を示す。これは当時の地割りに沿った境界であった可能性が高い。いずれも地山をほぼ垂直に掘り込むが、最下部で粘土を追って掘り進んだ部分もある。また、土砂の埋積状況から、ほとんどが南から北へむかって、先に掘った土坑を埋めながら掘り進んだことがわかる。これらは、黄灰色シルト、青灰色シルトあるいは黒灰色粘土を採取するために掘削されたものである。さらにその中を詳細にみると、たとえばS X2では、いくつかの小さな方形に近い形態をした単位にわかれている。この単位の大きさは一定ではないが、1人の人間がそのなかにはいって、土取り作業をおこなうのには十分な空間をしめている。

以上のように、A J18・A J19の両区で検出した土取りの土坑は、A P19・A N18・A L20などの調査区で検出した中世から近世のはじめごろにかけてのものと異なり、方形に近い小さな単位を累積したような形態をとる。また、当時の土地の区画や境界と推定される畔を大切に残して掘削をすすめており、地上部の物件に留意しつつ、作業がおこなわれたことがわかるのである。

(2) 京都・大阪の土取り遺構

土取りの遺構は、京都市内では左京二条二坊〔小森・原山84〕、平安宮内匠寮〔堀内89〕、平安宮中和院南〔梅川88〕、左京三条二坊〔原山・小森88〕、右京三条一坊〔加納・辻88〕、右京三条二坊〔平尾・本88〕などの地点に所在する遺跡で検出されており、京都盆地の各所に堆積している黄色の粘質土を採取していたことが判明している。とくに、近世に採取されたものについては、さきに京都大学構内の土取りの遺構にみたように、方形に近い形態をなしていることも興味深い。

また、大阪市内の遺跡に関しては、長原遺跡や喜連東遺跡などで土取りをおこなったとみられる遺構が検出され、最近では中央区法円坂町にある大阪市中央体育館内の遺跡調査では、黄色粘土を規則正しく方形に採取したあとが、明瞭に検出されている〔大阪市文化財協会90 p.19〕。このほか、東大阪市西ノ辻遺跡21次調査で検出された近世の土取りの穴も、長方形に近い形態をしめす〔東大阪市文化財協会90 pp.9-11〕⁽¹⁾。大坂産の土は、『雍州府志』に京都産よりすぐれた壁土として記載されている。

3 土の用途

京都に産する土に関しては、正保2(1645)年刊の俳論書『毛吹草』巻第四 名物、黒川道祐が貞享元(1684)年に著した『雍州府志』巻六 土産門 土石部、鏡師の青家に伝えられ、元文3(1736)年以前に成立したと思われる『御鏡仕用之控并ニ入用道具覚書』などに散見される。ここで用途別に整理して、その産地や性質などを検討する。

(1) 建築用土

古くは鎌倉時代の辞書『名語記』に「はにとは土の名也。つちかべをぬれる也。」とあり、一般の壁土が^{はに}埴とよばれていたらしい。『雍州府志』に^{じゅうらくち}聚楽土があり、京都の良賤ともに家壁はすべてこの土を使用し、特に米倉の塗壁に使用する。土質が稠密で火災にあっても火気がなかにはいらないからだという。聚楽第周辺の地域に堆積している茶褐色の土と推定できる。また、『毛吹草』に^{ゆぎようさびつち}遊行土と呼ばれる土があり、八坂の^{さびつち}遊行土 壁にこれを用いるとある。また、『雍州府志』には、遊行^{さびつち}土が、東山清水山の山麓法国寺の周辺にあり、赤くて壁をぬるのに使う。色は淡い紅色で斑点があり茶室の壁に使うが、大坂産の土には及ばない。法国寺は遊行聖人の一遍を祖とする時宗の寺なので、俗にもっぱら遊行土と呼ぶという。聚楽土とともに、壁土として、最もよく知られた土である〔山田81 pp.168-73〕。このほか、『雍州府志』に^{いわやつち}窟土がある。窟土は俗称で、土壁用の赤土であり、二条と三条河原町の住民がこれを製造しているという。

(2) 土木用土

『雍州府志』に、^{ぜんせき}敲土は硯^{ぜんせき}を交えた黄土で、志也礼土とよばれ、これに石灰を少し混ぜて水で練り、底の下や飛石の間に敷き、木槌でしっかり叩くと石のようになる。泉涌寺や等持院の山間から採取するとある。志也礼土とは砂利土のことであろう。^{ぜんせき}硯^{ぜんせき}とは、玉に次ぐ美しい石のことであり、特殊なものでなければ、チャートがこれに相当する可能性が高い。泉涌寺、等持院の地は、チャートまじりの土が分布している。また、『百品考』下巻には巴初刺那について、和名ヂャリとして、京師東山にありと、上記の敲土と同様のことが述べられている。この敲土について、これまでに調査した中世・近世の道路の路面遺構が想起される。ちなみに京都大学構内で調査した中世・近世の道路は、チャートの小礫を含む硬い路面を形成しており、こうした材料と手法をもって造成されたと推定できる〔岡田・吉野80 pp.24-5, 五十川83 pp.7-8, 清水89 pp.44-6〕。強度を要する路面にこれをもちいる伝統は、古くからあったものとみてよい。

次に、白砂は庭園の白洲の材料として需要が高かったものであり、白川産のものが古くから好まれ、『明月記』建保5(1217)年2月8日の条に、白砂を水無瀬殿上山の新御所造営に際してもちいられたとあるのが古い例である。『雍州府志』に、上栗田、北白川から出る白石が砕けてできる白砂が禁裏や行路に敷かれ、高貴来臨の折に門前の左右に立砂をする際に、この白砂をもちいるとある。

(3) 焼物土

京焼と総称される陶磁器の原料の土については、多くの資料があり、尾形乾山の『陶工必用』(元文2(1737)年)、欽古堂亀祐『陶器指南』(文政13(1830)年)、『陶磁器説』(明治5(1872)年)をはじめとする陶磁器製作の技術書は、土を選ぶことから始まり、土の産地が明記されているものが多い。産地のわかる主なものを若干かかげることにする。

『毛吹草』に黒谷の茶入の合せ土とある。『陶工必用』には、黒谷土、遊行土、山科石(珪砂)のほか下栗田の大日山に産する土があって、その土地のものが採取販売しているという。『陶器指南』には、「黒谷岡崎ヨリ出土ス土は妙々有事、世の焼物師ノシル所ナリ」とある。栗田焼では、当初は陶土を建仁寺や東岩倉山(大日山)一帯で得ていた。これが不足しはじめ、近江野洲郡南桜村などからも土をはこんだが、18世紀の後半には元真如堂、泉涌寺、日岡のほか「洛東岡崎村にて地主相對を以土買取」るようになる。文政6(1823)年には、五条坂職方が岡崎土の買占めをおこなったことから、栗田焼職方との間で争論がおきている。病院構内A J18・A J19の両区は岡崎にほど近く、また、土取り穴の埋土出土遺物が18世紀のものであり、栗田焼の陶工が土を求めている時期と一致することから、採取された土が岡崎土として商われていた可能性がある〔五十川・浜崎89 pp.35-6〕。

(4) 鑄物用土

『毛吹草』に、黒谷の鐘鑄形土とある。「諸寺にこれを用いる」という注記があり、製作に直接あたる鑄造工人(鑄物師)ではなく、需要者の寺がこれを購入する場合のあった可能性もあり、需要者が材料の一部を用意するという形態とみられる。しかし、それは鐘という特殊なものの鑄造にかかわる材料であったためではなかろうか。『重修本草綱目啓蒙』三卷 土 にも、産地を記さないが黄土が鐘鑄の型土や鋤の柄を入れる穴を作る部分の鑄型の材料に使われるという。また、『毛吹草』に白川に産する真鍮瑠土があり、諸国に行くところとある。鑄造用具の埴塙は「ル」とよばれることがあるから、「瑠」を埴塙とみる。この周辺は花崗岩の風化した土が堆積しており、京都大学構内で発見されている白河の鑄造工房の立地条件は、鑄型用の土の存在にかかわっていたと考える〔五十川88 pp.53-4〕。

土の用途

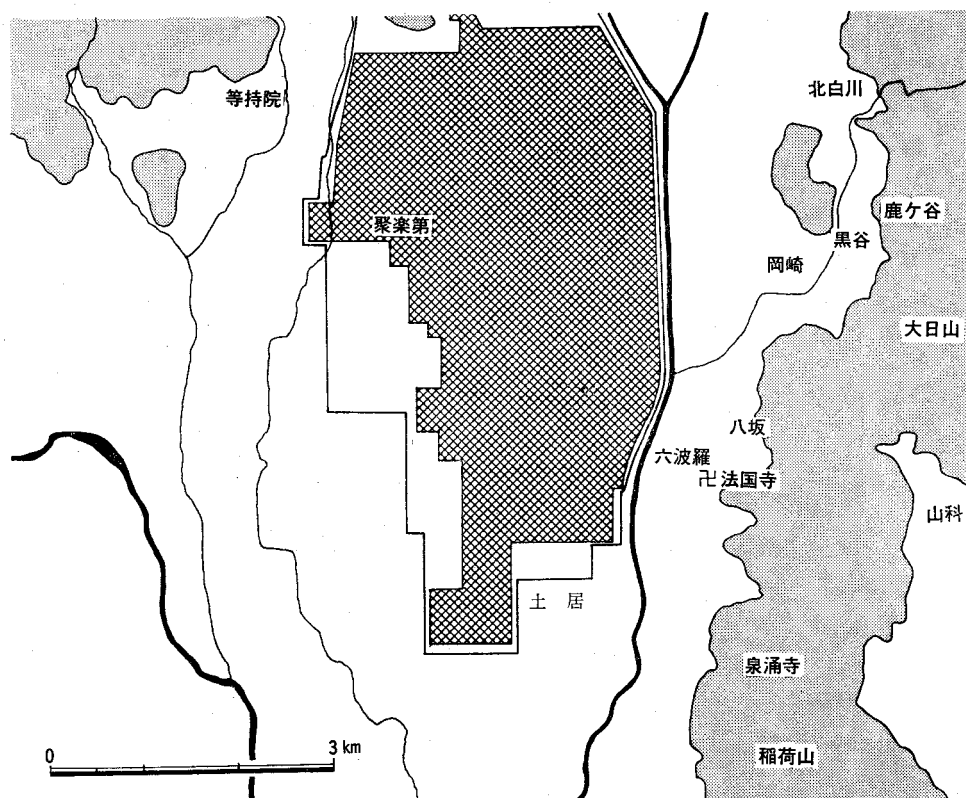


図37 京都周辺の土の産地 縮尺1/80000

また、鏡作りの青家の『御鏡仕用之控并ニ入用道具覚書』には、鑄造に必要な土の使い分けや販売元、頒価などの詳しい記載がある〔香取35〕。まず、真土土は岡崎万願寺の北浄ガク寺あたりの茂右衛門の所にあり、一荷三百文余で三十貫目ほどあるという。下真土土は黒谷中山の土で、下岡崎の長兵衛という百姓の所にあり、一荷三百文。鏡を磨く定盤を作る土は、岡崎万願寺の百姓から購入し、このほか、埴塙を作ったり真土を合わせたりする土として六原という赤砂利まじりの土、黒谷土と混ぜて真土土とする獅子谷土、真土に使う九条土、鑄型の重ね目に塗る山科土、鏡の表面についた鑄型の砂を除去するための白川砂などの地名を冠するものが多数記載されている。また、「土は随分吟味すべし、六原と云ども外山の土持来る事有、きび敷土屋に申付専一ニ候也。」ともある。

(5) 鍛冶用土

『毛吹草』に、稲荷の^{やいばつち}刃土 諸国に行くところとある。また、『雍州府志』に岡崎黒土は黒保古利と呼ばれ、黒くて軽く細塵のようなものである。鍛冶工人が刀を鑄て、この土を取り埴

をこねて、これを塗れば火気を去るという。『重修本草綱目啓蒙』には、刀工が焼きをつくるのに用いる土は、紙屋川の上流の岸边にある鼠色の土と稲荷山の赤土を水に混ぜて使うとある。このほか、『日本国花万葉記』（元禄10(1697)年刊）巻一上にも、岡崎土がくろほこりと呼ばれる黒土であり、鍛冶の刃をうつ時にこの土をねやし刃に塗るという。焼入れの際に、冷却速度を大きくして焼入れの効果を増すとともに、焼刃土によって刃部が加熱中に脱炭するのを防止するものである。『雍州府志』にいう岡崎産の粘性の少ない黒土は、京都大学構内周辺では黒褐色土と呼んでいるものを候補にあげうるが、今後の検討を要する。

(6) 宗教用土

『毛吹草』に、**梶尾の土砂末期**^{まつご}にこれを用いるとある。また、『雍州府志』には、古来、持律僧が梶尾山の土砂を採取して、これを清水で何度も洗浄し、壺にいれて護摩壇のうへに置き、7日間加持祈禱を加え、死んだ人にかける。死後数日たった死体も、これによってやわらかくなるので棺に納めやすいという。梶尾高山寺の明恵上人高弁（1173～1232）が著した『光明真言土沙勧進記』と同『別記』によれば、光明真言によって、加持された土沙をかけることによって、いかなる極悪人といえども地獄に落ちる苦悩から救われて、極楽往生できるという。しかし、これがいつしか死後硬直をやわらげる秘薬に変化した。これをもじった歌舞伎もあり、真偽のほどは別として、ごく特殊な利用であったとみてよい〔中村78 pp.213-22〕。

このほか、『毛利草』には、**稲荷山の黄土**が絵の具にもちいられるとある。また産地の明記はないが『重修本草綱目啓蒙』には、黄土の絵の具あるいは染料としての利用が記されている。『毛吹草』によれば松尾の白粉合せ土があり、薬用土などもあったようである。また、『雍州府志』に記載されている、東山の中山で取れる**中山赭土**は赤土で、野菜果物をこの土で覆っておけば、月を経ても腐らないという特殊なものであった。

『陶磁器説』によれば、東山あたりでは上層の土は壁土に、下層の土は瓦の原料や敲土として、最下層の土を陶土として使用することが記載されている。京都の東山山麓一帯が主要な土の採取場所となっており、とくに岡崎界限は各種の用途に用いられる土の名産地として名高い。これは、比叡山の南側に花崗岩塊があり、これが風化して形成された良質の砂土が、比叡山西麓に集中して堆積しているからであろう(図11)。このように、近世のはじめには、じつに多くの種類の土に対して、それぞれの適性に応じた用途が確定されており、すくなく商品化されていたことも判明するのである。

4 土取りの歴史的変遷

(1) 中世の土取り

土取りの主体 中世の土取りの実態について、いくつかの資料がある。まず、最初に大和の例をあげるが、京都と大きく異なる状況ではないと考える。

『大乘院寺社雑事記』文明7(1475)年3月17日条によれば、大和の土器座衆は、たとえその地がいかなる権門高家の敷地であっても、これにはかかわりなく、土器の材料の土を取る権利があるにもかかわらず、薬師寺の阿弥陀院の田地では採取を拒否された。畠は麦を植えるから土取り無用という阿弥陀院側の言い分に対して、座衆は、畠では土を取らないのは当然で、ここで係争中の地は田ではないかと応酬している。土器座は土掘りのために年に二貫四百文の年貢を薬師寺に納めていたという。また、『同雑事記』同年4月26日条によると、土器座衆は、薬師寺阿弥陀院知行の田に学侶より神人をさしむけて神木を立て、その地を差し押さえたという。ここでは、土取りが冬期におこなわれたものとみえ、この争論が水田の裏作として麦を作るようになったことと関連しているようであり、二毛作の進展にともなって、こうした問題が生じてきているらしい〔豊田35〕。

また、『東大寺文書』には、土の採取に関する窪庄の百姓の訴状がある〔奈文研編82 pp. 21-2〕。これによると、一乗院の御造手が、瓦毛(土器)土として、自分たちが耕作している大乘院領を掘り取り、大乘院に備進する御油を作っている田地を荒したとして、一乗院の御造手は一乗院御領を、大乘院領の御造手は大乘院御領を、それぞれ掘るようにと訴えている。ともに、土を材料として生産をおこなっているものが、土を掘り取る作業にあたり、その土地で耕作をいとなんでいる農民と争論をおこしている。

一方、洛北岩倉の土師器作りの場合も、同様な状況がみられる〔京都市編85〕。『愛宕社文書』文明元(1469)年12月30日付文書には、土師師が岩倉の地のどこにおいても、土器土の採取のできることを室町幕府がみとめている。また、『山本家文書』元龜3(1572)年10月18日付文書には、この地の土豪山本氏が木野に土師器工人の居住と土器土の採取をみとめている。『愛宕社文書』慶長4(1599)年3月5日付文書には、岩倉郷から土師器工人たちが、七十間四方の土地を買収し、惣まわりの地については、年貢未進の場合は取り上げるといっている。ここでも、その地にすんでいる土器生産集団が、土の採取に直接関わっていたことが確実である。

このほか、『教言卿記』の応永12(1405)年を中心とする記事では、文庫の修理にかかわ

った壁塗などの工人を知ることができるが、その際に土の用意をしたのは、河原者であった。壁塗配下の下働きとして、こうした当時の被差別民がかかわっており、同様に井戸掘りや溝掘りといった作業もかれらの担当することであった〔吉村86〕。

また、日本中世の土木事業は僧侶を主導者とすることによって、展開されたといわれている。勧進聖による道路や水路の開削、池や井戸の築造には、土木技術がそこに介在したことが確実である〔三浦84 pp.149-54〕。そして、土を掘り取るという作業にかれらが関わるのは当然の帰結といわなければならない。『雍州府志』には、遊行土は遊行聖人一遍を祖とする時宗の法興寺界隈から採取されるから、そう呼ばれるのだと記されているのだが、これは土木事業に関わる遊行僧たちが、土取りにも深く関与したためではなかろうか。

土の霊力 山科家に入出入りしていた散所の熊法師などにみられるように、中世において、河原者や穢多と呼ばれる人々が、土取りや溝掘り、井戸掘りなどにかかわったことは、単にその作業が専門的な技術を要しないということを越えたものがあると考えられている〔吉村86〕。これに関して、中世には土公神^{どくじん}という土をつかさどる神に対する信仰をその一例としてあげる。土公神は、陰陽道の遊行神で、春は竈、夏は門、秋は井戸、冬は庭におり、穴掘、築土、動土などの土を犯す行為は、干支一巡の間、庚午から甲申にいたる15日間は慎まなければ祟るという。御神体は白蛇であるとか、鶏を好むとかいわれている。犯土日にやむをえず作事をおこなう場合には、家人がしばらく他に居を移す、いわゆる方違をおこなわなければならなかった〔直江72〕。

中世的な土の採取 以上のように、土を必要とするものが、地権者に年貢を納めて、採取が可能な土地から必要に応じて、主体的に採取するというのが、中世の土取りの原則であり、土に関する信仰が厚くおおいかぶさっていたと考えてよいだろう。このため、土がひろく商品として流通するようなことは少なかったのではないかと考える。

もちろん、中世において、土が商品として売買されることが、まったくなかったということとはできない。たとえば、『高野山文書』嘉吉3(1443)年5月28日付の山王院一御殿造営勘録状には、「三百五十文 にとわうどの代」とあり、丹と黄土の代価がしるされている⁽²⁾。しかし、壁塗の工人が持ち込んだものに対する代価であった可能性もある。ほぼ同じころ、文安4(1447)年に、高野山大湯屋の湯釜鑄造がおこなわれたが、原料の鉄が堺で購入されているのに対し、鑄型や炉を製作するのに必要な土や砂は、周辺の村から農民に搬入させているという例もあり、土を広範に流通する商品とみることはむずかしいのではないかと考える。⁽³⁾

(2) 近世の土取り

土の商品化 近世の土に関する記載をみると、細かい用途による分化がみられ、それぞれに産地が特定されているのは、多くの職種において、製品や作業工程が分化し、あらたな職種がうみだされ、材料が商品化していった社会全体の動向に対応するものである。

『菟藝泥赴』(貞享元(1684)年刊)第四下 聖護院森 によれば、河の彦四郎なるものが、熊野社より十間ばかり西を掘って、その土を商っていたという。また、さきにあげたように、青家の『御鏡仕用之控并ニ入用道具覚書』には、岡崎周辺で土を販売している百姓とその頒価、偽土を売る土屋などについてくわしく記載されている。このほか、『人倫訓蒙図彙』(元禄3(1690)年刊)作業部には、瘦牛に縄袋をかけて土を盛り、市中を徘徊して砂土を売る砂土売も登場する(図38)。また、江戸初期の京大繪圖には、土屋町という名称もみ



紙屑買 女の作業として、ふくろをかたにかけて、洛中洛外をめぐり、諸の紙ぎれ、反古のやぶれ、かみとさへ名のつくものなれば浄不浄をえらはず買ありきて直し屋へうる也。
砂土売 瘦牛に縄袋をかけて土をもり、砂をもりて売に出る。一人して何疋もひくゆへに往還の人に障りをなし、人に瞋意をもやさし聊遠慮なくしてうき世をわたるは此牛牽ぞかし。六尺五寸の升にはかりて、砂十三匁、砂利三十匁、土二十五匁、大やう是也、然ども道の遠近によりて高下有とかや。

図38 紙屑買と砂土売(『人倫訓蒙図彙』より)

られ、販売者による同業者町が形成されていた可能性もある⁽⁴⁾。このように、江戸時代には、土が商品として広範に売買されていることが確実であり、土を産出する地のものが採取販売するほか、これを商う店や振売行商するものもあらわれている。

近世大坂の住友家では、別子銅山の鉱石の精錬をおこなっており、多量の銅吹用土を必要とした。『年々諸用留』三番には、正徳5(1715)年3月、4月に銅吹用土に関して記載があり〔住友修史室編86 pp.209-13〕、近世の大坂においても、広範な土砂の商品流通がみられる。

土取りの主体 以上のように、土取りという作業が、農民の商品生産の一環としておこなわれるばかりでなく、すくなくならず専業者を生み出していったことが推定される。さきにあげた砂土売は、土の採取にもかかわっていたと考えられるが、『人倫訓蒙図彙』の記述や紙屑買と番^{つが}いにされている点からみても、すくなくならず賤視されていることがうかがわれる。これは、前述のように中世において、河原者とよばれた被差別民が、こうした土にまつわる仕事に関与していたことにつながるものであろう。しかし、中世においては井戸掘りや溝浚えなど土を掘る作業に、被差別民がかかわっていたが、近世に至ると次第にかかわりが少なくなってきたという〔脇田85〕。それは、さきにあげた土公神信仰などによる呪縛から次第に開放されていった結果とも受け取ることができるだろうが、その根幹には、あらたな人的支配や土地の権利関係の変化、社会総体の生産量の増加による商品生産の高まりがあり、こうした変化がうみだされていったのではなかろうか。

もちろん、中世的な土の採取形態も引続き残っていたにちがいない。『京都御役所向大概覚書』(享保2(1717)年)によれば、岩倉の木野村や上嵯峨の八軒村では、農閑副業として土師器の生産をおこなっており、材料土は岩倉、市原、松ヶ崎などの近郷の地に求めている。おそらく、土器師みずから土を採取したものと思われる。江戸時代にはいり、土師器は急速に主要な食器としての地位を失い、禁裏御用や灯明具、祭祀用具に限定されてきており、その生産は小規模なものであったとみられる。こうした小規模な生産や特殊な用途につかわれる土に関しては、土を必要とする主体が直接これを採取するのが一般的であり、一部は現在にもおよんでいると考えてよい。しかし、土は商品として流通機構を通じて、諸国にまで搬送されたものも数多くあった。

土取り作業上の変化 土取り穴の形態は、中世のほぼ不定形のものから、近世の方形の単位となったものへと変化するのには確実であり、それがうえに述べた土の採取のあり方の変化に対応することはまちがいない。丹波立杭焼の窯場の場合、陶土は坪単位で売買され、

土取りの歴史的変遷

採取量が算定しやすいように地面を方形に掘り取っており〔薮内編 55 p.38, 図版(15)〕, 江戸時代の土取り穴が方形の区画をなすのも, 採取量算定の便を考慮したものであろう。

すなわち, 中世においては, 土取りという作業に際して, 年貢という形の損料によって補償されていたものが, 近世に至って, 土が商品として売買される状況のもとでは, 採取の段階から採取量に応じて売買されたとみるのが, まったく当然のことである。また, 採取作業が, 既存の境界や水路, 土手, 畔などを破壊することなく, 注意深くおこなわれていることも, 近世的な土地の管理状況が反映されたものといわなければならないだろう。

本稿作成にあたっては, 広面積でしかも困難な病院構内A J 18・A J 19両区の発掘調査に筆者とともにあたった浜崎一志氏に, 数多くの教示をいただいた。末筆ながら, 心より謝意を表する次第である。

〔注〕

- 1 大阪方面の土取り遺構については, 大阪市文化財協会の鈴木秀典, 黒田慶一, 南一雄の諸氏, 東大阪市文化財協会の松田順一郎氏のご教示を得た。
- 2 大日本古文書 家わけ第一 高野山文書之四 〔又統寶簡集 二十四 山王院一御殿造営勘録〕
- 3 大日本古文書 家わけ第一 高野山文書之八 〔又統寶簡集 百九 大湯屋釜鑄目録並勅進帳〕
- 4 中京区柳馬場三条下ルの槌屋町, 下京区猪熊仏光寺下ルの槌屋町に相当する地と思われる。

〔参考文献〕

- | | | |
|------------|-------|--|
| 五十川伸矢 | 1981年 | 「京都大学本部構内A T 27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』 |
| | 1983年 | 「京都大学本部構内A X 28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』 |
| | 1986年 | 「京都大学医学部構内A N 18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』 |
| | 1988年 | 「鴨東白河の鑄造工房—京都大学構内の鑄造に関する遺跡—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』 |
| 五十川伸矢・浜崎一志 | 1989年 | 「京都大学病院構内A J 18・A J 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』 |
| 内田九州男 | 1985年 | 「壁塗り」『部落史用語辞典』 |
| 大阪市文化財協会 | 1990年 | 『大阪市中央体育館地域における 難波宮跡・大坂城跡発掘調査中間報告』Ⅱ |
| 岡田保良・吉野治雄 | 1980年 | 「京都大学本部構内A W 27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』 |
| 香取秀眞 | 1935年 | 「御鏡仕用之控書註記」『考古学雑誌』第30巻第1号（『統金工史談』1943年所収） |
| 加納敬二・辻 裕司 | 1988年 | 「右京三条一坊」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』 |
| 京都市編 | 1985年 | 『史料京都の歴史』第8巻 |
| 小森俊寛・原山充志 | 1984年 | 「左京二条二坊」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』 |
| 梅川光隆 | 1988年 | 「平安宮中和院南」『平安京跡発掘調査概報 昭和62年度』 |

土取りの歴史的変遷

- 清水芳裕 1989年 「京都大学本部構内A X30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 清水芳裕・吉野治雄 1981年 「京都大学医学部構内A P 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 菅田 薫・本弥八郎・吉川義彦 1985年 「左京三条二坊」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 住友修史室編 1986年 『住友史料叢書』年々諸用留 二番・三番
- 豊田 武 1935年 「大和の諸座 続編」『歴史地理』第66巻第1～3号
- 直江広治 1972年 「土公神」『日本民俗辞典』
- 中村義雄 1978年 『魔よけとまじない—古典文学の周辺—』(塙新書51)
- 奈文研(奈良国立文化財研究所) 1982年 『平城京西市跡 右京八条二坊十二坪の発掘調査』
- 浜崎一志 1990年 「京都大学医学部構内A L20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』
- 原山充志・小森俊寛 1988年 「左京三条二坊」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 東大阪市文化財協会 1990年 『西ノ辻遺跡第21次発掘調査報告』
- 平尾政幸・本弥八郎 1988年 「右京三条二坊」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 堀内明博 1989年 「平安宮内匠寮」『平安京跡発掘調査概報 昭和63年度』
- 三浦圭一 1984年 「中世の土木と職業集団」『講座・日本技術の社会史』第6巻
- 藪内清編 1955年 『立杭窯の研究』
- 山田幸一 1981年 『壁』(ものと人間の文化史 45)
- 吉村 亨 1986年 「壁塗」『中世の民衆と芸能』
- 脇田 修 1985年 「井戸掘り」『部落史用語辞典』



1 医学部構内A N20区 土取り穴（南から）



2 医学部構内A L20区 土取り穴（南から）



3 病院構内A J18区 土取り穴（南から）

1991年3月30日発行

京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ

編 纂	集 行	京都大学埋蔵文化財研究センター 京都市左京区吉田本町
印 製	刷 本	山代印刷株式会社 京都市上京区寺之内通小川西入

正 誤 表
京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ

頁	行	誤	正
3	12	白川北殿	白河北殿
26	24	ことがきる	ことができる
73	27	青銅鎮物	青銅鑄物
91	3	わち、	すなわち、